

鬼 虎 川 遺 跡

—東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う第15次発掘調査概要(その2-2)—

1983

財団法人 東大阪市文化財協会

はしがき

東大阪市の中央部を横断し、生駒市と結ぶ高速鉄道東大阪線の建設計画は、大阪府と奈良県を直結する大動脈として、また東大阪市の都市再開発の中心として、その早期開通が期待されているところであります。その反面、新鉄道建設予定地内には貴重な埋蔵文化財が多く存在していることも、これまでの調査で知られています。東大阪市では鉄道計画の推進と埋蔵文化財の調査研究、保存との問題を解決すべく大阪府教育委員会の御指導のもと昭和57年3月財団法人東大阪市文化財協会を発足させ、調査体制の強化を図るとともに、調査を進めております。今回、報告します鬼虎川遺跡の調査は、昭和55年度の調査（鬼虎川遺跡その1）以来鉄道予定地の橋脚部分について調査を進めてきておりますが、今回の調査地点は、前回の報告書（その2）の中で明らかになりましたように、遺跡の周辺部にあたるものと考えられたため、前回の調査結果にもとづいて、東大阪市教育委員会では、遺跡の取扱いについて大阪府教育委員会ならびに関係各機関と協議を重ねた結果、橋脚部分については全面調査を実施する結論を得ました。そこで、本調査を再度国道308号線関係遺跡調査会が委託を受けて実施することになりました。調査の終了後は引き続いて整理事業を実施してまいりましたが、なにぶん発掘調査と並行しながらであるため、大幅に遅れたのですが、今回昭和57年より事業を引き継ぎました本協会より報告書を刊行することができました。調査の実施及び報告書の刊行にいたるまで多大なる御協力を受けた東大阪生駒電鉄株式会社はもちろんのこと、調査当時の調査会職員の方々に深く感謝いたしますとともに、今後とも関係各位の御理解と御協力をお願いする次第であります。

財団法人 東大阪市文化財協会
理 事 長 秀 平 勇 造

例　　言

1. 本書は、東大阪生駒電鉄株式会社が建設を進めている東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に伴う鬼虎川遺跡（その2-2）の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、国道308号線関係遺跡調査会が東大阪生駒電鉄株式会社の委託を受けて実施し、その後の整理作業は同調査会より財団法人東大阪市文化財協会が一切を引き継いで実施した。
3. 現地調査は、昭和56年7月1日から昭和56年10月31日まで実施した。
4. 本書の地区名は、以前の調査より引き続いてD区として、トレンチ西よりD1区、D2区……D7区と仮称したが、新鉄道建設予定地内全域の地区名は、国土座標にもとづき、5m区画の地区割をおこなっている。遺構図面にはXIII F 2 aという地区を付している。地区割については（その2）の報告書を参照していただきたい。
5. 遺構番号は、（その2）の報告書に統一しており、同一の番号は前回の調査で検出した遺構と連続するものである。
6. 収録した図面の北は、国土座標の北をしめしている。標高は、大阪ポイント（O.P.）を用いた。
7. 本書の執筆は、文末に記入している。収録した写真は、遺構を担当者が撮影し、遺物写真は落合信生氏に委託して撮影した。
8. 本調査は、東大阪市が継続して実施している鬼虎川遺跡内の調査であり、通して第15次調査にあたる。

本文目次

はしがき

例　　言

1. 調査に至る経過	1
2. 調査の概要	3
1) D 1 区の調査	3
2) D 2 区の調査	5
3) D 3・D 4 区の調査	7
4) D 5 区の調査	13
5) D 6 区の調査	22
6) D 7 区の調査	24
3. 出土遺物	28
1) 土器・土製品	28
2) 瓦	29
3) 木器	29
4) 石器	30
5) 銭貨	30
4. まとめ	42

挿 図 目 次

第 1 図	調査位置図	1
第 2 図	D 1区自然流路 1 実測図	3
第 3 図	D 1区自然流路 2 実測図	4
第 4 図	貨錢拓本	4
第 5 図	D 2区 S D-14 実測図	5
第 6 図	D 2区 S D-14 実測図	6
第 7 図	D 3区 S D-1 実測図	7
第 8 図	D 3区 S D-16・17・47 実測図	8
第 9 図	D 4区 S D-41 実測図	9
第 10 図	D 4区出土石器実測図	9
第 11 図	D 4区 S D-3 遺物出土状態	10
第 12 図	D 4区 S D-3 実測図	11
第 13 図	D 5区 S D-23 実測図	14
第 14 図	D 5区 S K-1・田跡実測図	15
第 15 図	D 5区 S K-2・3, S D-24・36・37 実測図	16
第 16 図	D 5区 S D-41・43, SK-4・5 実測図	17
第 17 図	D 5区 S D-39, SK-9 実測図	18
第 18 図	D 5区 S D-42・49, SK-7, 四地実測図	19
第 19 図	D 5区 S D-51, SK-10 実測図	20
第 20 図	D 5区出土石器実測図	20
第 21 図	D 5区 S D-50 実測図	21
第 22 図	D 6区 S D-28 実測図	23
第 23 図	D 7区 S D-35・東側落ち込み実測図	24
第 24 図	D 7区 S D-37 実測図	25
第 25 図	D 7区 S D-37・52・53・54 実測図	26
第 26 図	D 7区埋没谷実測図	27
第 27 図	D 1区北・西壁断面実測図	折り込み
第 28 図	D 2区北・西壁断面実測図	折り込み
第 29 図	D 3区北・西壁断面実測図	折り込み
第 30 図	D 4区北・東壁断面実測図	折り込み
第 31 図	D 5区北・西壁断面実測図	折り込み
第 32 図	D 6区北・東壁断面実測図	折り込み
第 33 図	D 7区北・東壁断面実測図	折り込み

図版目次

図版一	出土土器・土錐実測図		
図版二	出土土器・陶磁器実測図		
図版三	出土土器・瓦・土錐実測図		
図版四	出土木器実測図		
図版五	出土木器実測図		
図版六	出土木器実測図		
図版七	出土木器実測図		
図版八	出土木器実測図		
図版九	出土木器実測図		
図版十	出土木器実測図		
図版十一	出土木器実測図		
図版十二	出土木器実測図		
図版十三	調査地全景		
図版十四	D 1 区遺構	1. SD-11	2. SD-38
図版十五	D 1 区遺構	1. 北壁断面上層	2. 北壁断面下層
図版十六	D 1 区遺物出土状況	1. 9層上面足跡状遺構 2. 刺突具出土状況	2. 錢貨出土状況
図版十七	D 2 区遺構	1. SD-14 検出状況	2. SD-14 掘削後の状況
図版十八	D 2 区遺構	1. SD-14 北壁断面	2. 北壁断面下層
図版十九	D 2 区遺物出土状況	1. SD-14 内木器出土状況	2. SD-14 内杭列検出状況
図版二十	D 2 区遺物出土状況	1. SD-14 内下駄出土状況 2. 刺突具出土状況	2. 和銅開珎出土状況
図版二十一	D 3 区遺構	1. SD-1	2. 北壁断面
図版二十二	D 3 区遺構	1. SD-17	2. SD-16・47
図版二十三	D 4 区遺構	1. SD-46	2. 東壁断面
図版二十四	D 4 区遺構	1. SD-3	2. 弥生土器出土状況
図版二十五	D 5 区遺構	1. SD-23	2. SK-3, SD-24・36・37
図版二十六	D 5 区遺構	1. SD-41・43	2. SD-42・49, SK-7
図版二十七	D 5 区遺構	1. SD-39, SK-9	2. SD-39 内遺物出土状況
図版二十八	D 5 区遺構	1. SD-50	2. SD-51, SK-10
図版二十九	D 5 区遺構	1. 北壁断面	2. 西壁断面
図版三十	D 6 区遺構	1. SD-28	2. SD-29

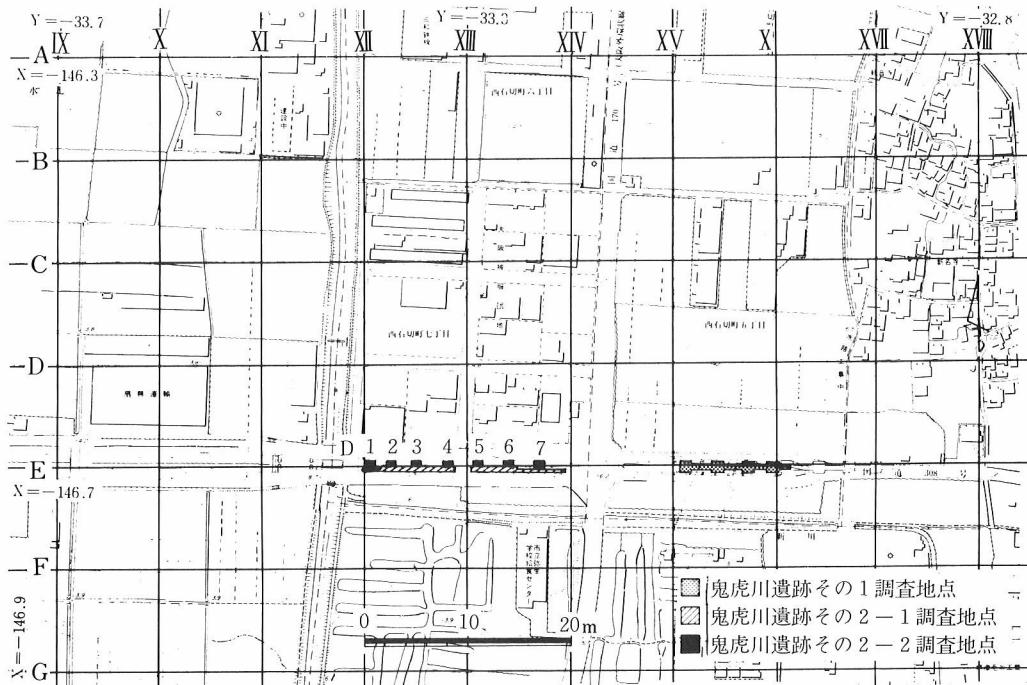
図版三十一	D6 区遺構	1. SD- 28 北壁断面	2. SD- 29・30
図版三十二	D6 区遺物出土状況	1. SD- 28 内木器出土状況	2. SD- 28 内杭列検出状況
図版三十三	D7 区遺構	1. SD- 35	2. SD- 35 内杭列検出状況
図版三十四	D7 区遺構	1. SD- 37	2. SD- 37・52・53・54
図版三十五	D7 区遺構	1. SD- 35 北側断面	2. 北壁断面
図版三十六	D7 区遺物出土状況	1. SD- 35 内土師器出土状況	2. SD- 35 内木器出土状況
図版三十七	遺物		
図版三十八	遺物		
図版三十九	遺物		
図版四十	遺物		
図版四十一	遺物		
図版四十二	遺物		
図版四十三	遺物		

表 目 次

第 1 表	新鉄道建設工事に係る鬼虎川遺跡の調査一覧表	2
第 2 表	土器観察表	31
第 3 表	木器観察表	37

1. 調査に至る経過

大阪府と奈良県を結ぶ新鉄道建設工事は、昭和46年の都市交通審議会の答申以来計画が進められており、一部では工事も施工されている。こうした中で大阪府教育委員会と東大阪市教育委員会は、新鉄道建設工事予定地全線について試掘調査をおこない、遺跡の有無及び範囲の確認をおこなった。試掘調査は、用地買収が完了したところから順次実施したが、昭和56年度末で全線の調査を完了した。この結果、あらたに神並遺跡（縄文時代早期～室町時代）、水走遺跡（弥生時代～室町時代）などが確認されるとともに、鬼虎川・西ノ辻遺跡の範囲の確定がおこなわれ、現在遺跡の取扱いについて協議が進められている。これとは別に、今回の調査地点のように、従来より遺跡の範囲内と考えられている個所については、全面調査を前提として、調査体制や調査後の遺跡の取扱いについて協議が進められていた。昭和55年7月から12月にかけて、国道308号線と大阪外環状線（国道170号線）との交差点東側の分離帯内の調査が大阪府教育委員会、東大阪市教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会の合同で実施された。（鬼虎川遺跡の調査その1）調査地点は、当初遺跡の東端に位置すると考えられていたが、調査の結果弥生時代中期に属する方形周溝墓6基、土壙墓、大溝などが確認された。特に鬼虎川遺跡の墓域を確定したことは重要な発見であった。昭和56年2月には大阪外環状線の西側で国道308号線分離帯内の調査計画が進められた。この時点で大阪府教育委員会と東大阪市教育委員会は、



第1図 調査位置図

あらたに国道308号線関係遺跡調査会を組織し、調査を実施していくことになった。調査地点は、遺跡の北端にあたると考えられていたので、まず予定地内に幅3~5m、長18mの規模のトレーンチを設定し、遺構・遺物の状況を確認することになった。この調査が鬼虎川遺跡（その2）の調査であり、すでに報告書が刊行されている。調査の結果、弥生時代の遺構としては、溝・自然の谷地形が発見されたのみであった。この調査結果にもとづいて、再度協議がおこなわれたが、遺構の破壊する恐れのない橋脚予定地（計7カ所約767m²）を調査対象地とし、鬼虎川遺跡（その2-2）の調査として実施されることになった。発掘調査は、昭和56年7月1日から10月31日まで実施した。当時の調査体制は以下の通りである。職名は当時のものである。

理 事 長	秀平勇造（東大阪市教育委員会教育長）
事 務 局 長	寺澤 勝（〃 社会教育部参事・文化財課長）
事 務 部 長	小川 満（〃 文化財課主幹）
調 査 部 長	井藤 徹（大阪府教育委員会文化財保護課係長）
調 査 副 部 長	原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主任）
調 査 部 員	下村晴文，才原金弘，松岡良憲，山本芳彦，曾我恭子，小西優美（旧性林）
事 務 部 員	安藤紀子
調 査 補 助 員	浦元英俊，相田正明，綾仁正人，綾仁清隆，森田 実，白神典之，能田筆和，岩田一彦，広岡 勉
整 理 補 助 員	荻野淳子，西原清美，八代洋子，成海節子，梶山絵理，岡本美恵
事 務 補 助 員	井口雅之

第1表 東大阪都市高速鉄道東大阪線建設工事に伴う鬼虎川遺跡の調査一覧表

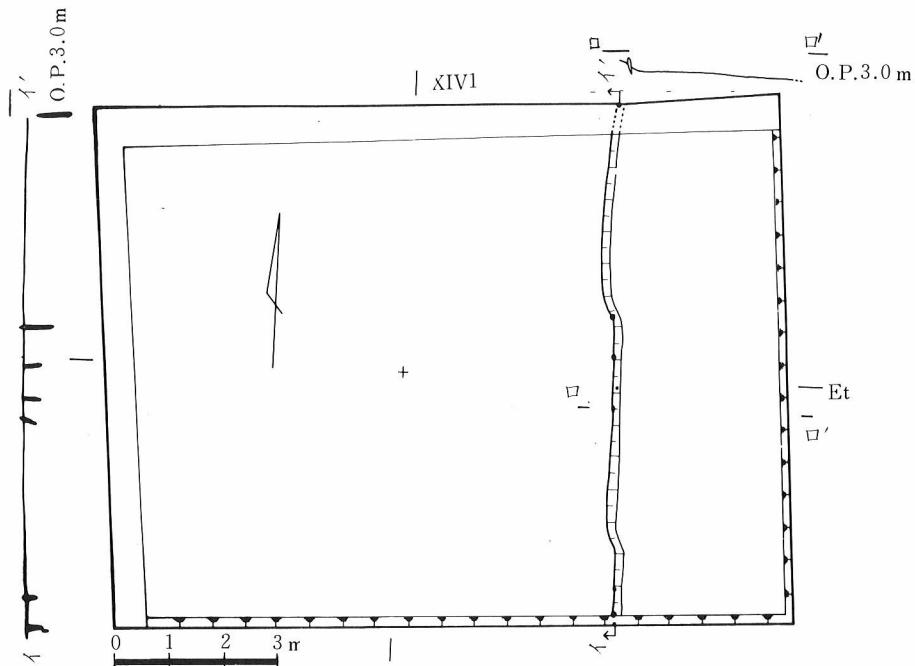
調 査 名	地 番	面 積	検 出 遺 構・遺 物	調 査 期 日	調 査 主 体	
鬼虎川遺跡の調査 (その1)	西石切町5丁目 183~188地番	1124 m ²	方形周溝墓6基(II様式5, III様式1) 土括墓2基(IV様式1, 不明1) 大溝(II様式) 供獻用壺蓋その他木製鍬, 鋸	昭和55年7月21日 昭和55年12月20日	大阪府教育委員会 東大阪市教育委員会 東大阪市遺跡保護調査会	第12次
鬼虎川遺跡の調査 (その2)	西石切町7丁目 191~200地番	767 m ²	溝4(I~II様式) 埋没谷 刺突具, 土器片	昭和56年1月10日 昭和56年6月30日	国道308号線関係 遺跡調査会	第13次
鬼虎川遺跡の調査 (その2-2)	西石切町7丁目 191~200地番	767 m ²	溝2(I~II様式) 埋没谷	昭和56年7月1日 昭和56年10月31日	国道308号線関係 遺跡調査会	第15次
八尾土木ヨウ壁工事 に伴う鬼虎川遺跡の 立合調査	西石切町5丁目 180, 181, 183地番	約20 m ²	奈良時代羽金棺 製塙土器片 須恵器片	●立合期間 昭和56年10月16日 昭和56年11月6日 調査期間11月4~5日	東大阪市教育委員会	第17次
鬼虎川遺跡の調査 (昭和57年度)	西石切町5丁目180, 182地番 西石切町3丁目 175, 176, 178地番	約1500 m ²	大溝1(II様式) 繩文中期の土器片 中世期の建物跡	昭和57年12月1日 昭和58年3月31日	財團法人 東大阪市文化財協会	第18次

2. 調査の概要

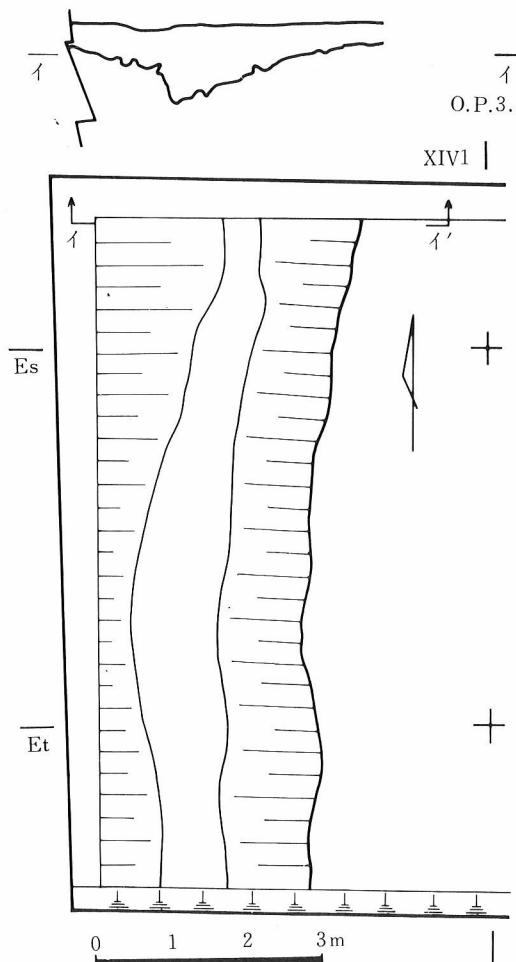
1) D 1 区の調査

(1) 層位

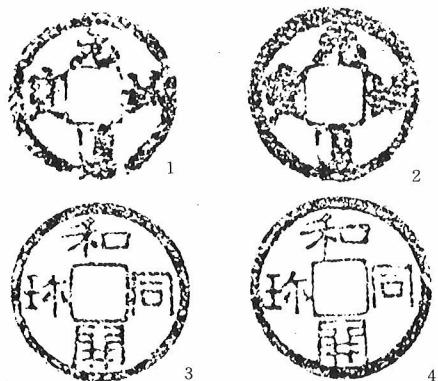
D 1 区の層位は、鬼虎川遺跡（その 2）調査報告書の C 地区基本層位に従っており、特に変更するところはないので、詳しくはこれを参照していただくことにし、ここでは概略をのべることにする。第 1 層～第 5 層までは前回の調査と同じく、時期を決定できる遺物は出土していない。しかし、水路 1 内より近世の陶器・木器が出土しているところから、近世以降の堆積と考えられる。第 6 層以下 8 層までは粘土乃至シルト質粘土と砂の互層になっている。この層からも時期決定できる遺物が出土していないので、詳しくはわからないが、中世末以降近世までの堆積土と考えられる。特に第 8 a 層は、この地区全域を覆っている砂層の堆積土であり、不安定な水の流れが想定される。第 9 層より 12 世紀代に属する瓦器碗を検出した。前回の調査での基本層位第 10 層から、古墳時代から平安時代にかけての遺物が多量に出土している。今回新たに第 9 層より瓦器碗を検出したことは基本層位の時期決定に際して一つの基準となるものである。第 15 層は、弥生時代の遺物包含層に相当すると考えられるが、今回の調査地区が遺跡の縁辺にあたることなどから、遺物はほとんど認められなかった。ただ、第 15 層内より 3 点、第 16 層内より 1 点（第 15 層からの転落と考えられる）の木製刺突具が出土している。このう



第 2 図 D 1 区水路 1 実測図



第3図 D1区 自然流路1実測図



1. 元祐通宝(D1区)
2. 元祐通宝(D1区)
3. 和同開珎(D2区)
4. 和同開珎(D2区)

第4図 貨銭拓本

ち第15層中の1点は、基部に桜の皮を巻いたものであり、刺突具状木製品の用途を考える上で重要である。

(2) 遺構

遺構として確認できたのは、水路1ヵ所及び自然流路が2ヶ所である。時期はいずれも近世以降に属するもので、古墳・弥生時代の遺構は検出されなかった。

水路1

前回の調査で、第3C・第4層の落ち込みに相当する。前回の調査では、遺構と断定できなかったが、今回は落ち込みの西肩に沿って7本の杭を確認した。杭は、径5~8cmの自然木を使用し、先端を尖らしている。上部はすべて消失していた。落ち込みは、東肩がトレンチ外に広がるため全貌は不明であるが、最も深いところで30cmを測る。性格などは不明であるが、西肩に沿って杭列を打ち込んでいるところから、水路などの用途が想定される。

自然流路1・2

自然流路1・2としたものは、前回の調査の遺構番号SD-11, SD-12に対応する。前回の調査では断面観察に基づく結果であったため、今回の調査で新たに精査をおこなった。この結果、流路は第7・8層のシルト質及び砂層をベースとすることが明らかになった。つまり、第8層の砂が堆積する際かなりの起伏が生じたものと考えられ、その凹部に堆積したものと考えられ、何らの人為的な変化は認められなかった。そこで今回は、前回の遺構番号をはずして、自然流路として報告することにした。(下村晴文)

2) D 2 地区の調査

(1) 層位

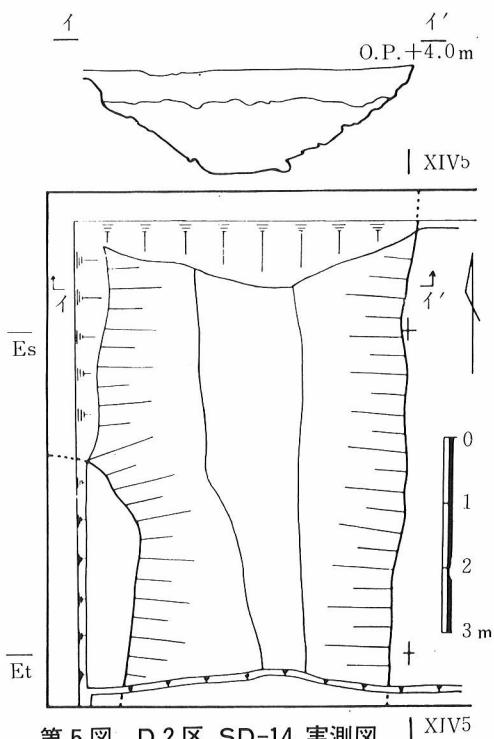
今回の調査地は、前回の調査地（C地区）の北側隣りに位置し、層位も連続すると考えられた。そのため、D 2 地区の層位も、D 1 地区と同様に前回の調査地の基本層位に従うこととした。今回の調査結果からみると、層位に大きな変更はないが、色及び土質に若干の異なりが認められた。例えば、色の変化が認められたのは第3層、第4層、第8層などが上げられる。第3層は黄灰色が灰色、第4層は灰色が暗緑灰色、第8層はオリーブ灰色が暗緑灰色となる。土質は第3層の粘土がシルト質粘土に、第6層の粘土がシルト質粘土に変化していた。また、前回の調査で第11層としたものが第11a層、第11b層に、第12層が第12b層にそれぞれ細分できた。前回の調査地で検出した第10層と第14層は今回の調査地では欠層となる。これらの層は北側へは連続しないと考えられる。第8層からは木製の布巻具1点を検出したが詳細な時期は不明である。第9層より時期決定のできる土師器小皿1点を検出した。土師器小皿の時期は平安時代である。D 1 地区では同層より12世紀代の瓦器椀が出土している。このことから、D 1 地区で検出した資料がこの層の下限となる。また、第11層から和同開珎2点と土師器小皿1点を検出した。和同開珎は2点が重なりあった状態で出土した。和同開珎は708年に鋳造が開始されており、第11層の時期決定の新らたな資料となる。第15層は弥生時代の遺物包含層に相当し、今回、木製刺突具1点を検出した。また、第16層より弥生土器の壺底部が出土した。これは第15層より転落したものと考えられる。

(2) 遺構

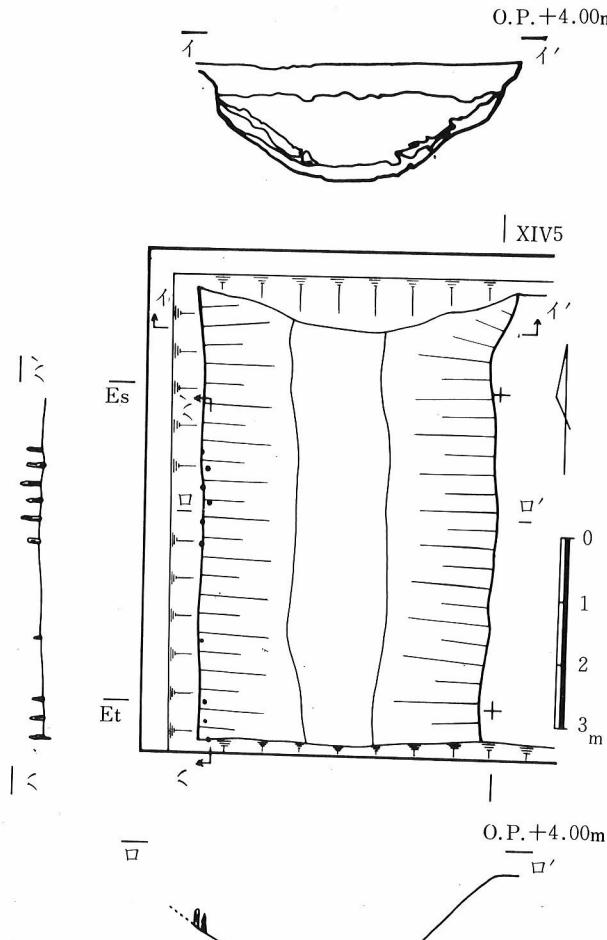
今回の調査地では近世以降の溝を3ヶ所で検出した。これらは前回の調査の際に断面観察で確認したものであり、SD-13・SD-14・SD-15に相当する。これらはいずれも南北方向に伸びるものである。他の時期の遺構は、当調査地では検出できなかった。

SD-13

SD-13は調査地の最も西側で検出した。第6層上面より掘り込まれており、東肩がSD-14によって切られている。溝の南側でわずかに西肩の一部を検出した。溝の幅は4m、深さ1.5mを測る。溝内の堆積層は5層に細分され、いづれもシルト質粘土である。



第5図 D 2 区 SD-14 実測図 | XIV5



第6図 D2区 SD-14実測図

SD-14

SD-14は第2層上面より掘り込まれている。溝の横断面形は、ゆるいU字状を呈する。西肩には径5~10cmの杭を打ち込んでおり、杭は肩の南側と中央に集中する。今回、調査地内では10本を確認した。また、東肩には杭を打ち込んだような痕跡は認められなかった。溝の幅は5.1m、深さ1.8mを測る。溝内の層位は大きく2層に分けられ、上層が埋土である。下層は黒色腐植土であり、堆積層と考えられる。溝内の層は大部分が埋土である。下層より近世以降に属する木製品が多く出土した。食膳具や容器と思われる蓋・桶・樽・箸と下駄などがある。

SD-15

SD-15は第6層上面より落ち込んでいる。溝のベース面がシルト質粘土であることや溝内の堆積層のベース面の土質とほとんど変わることから自然流路と考えられる。溝は幅4.7m、深さ0.6mを測る。溝内の堆積層は2層に分けられ、いづれもシルト質粘土である。（才原金弘）

3) D 3・D 4 区の調査

(1) 土層

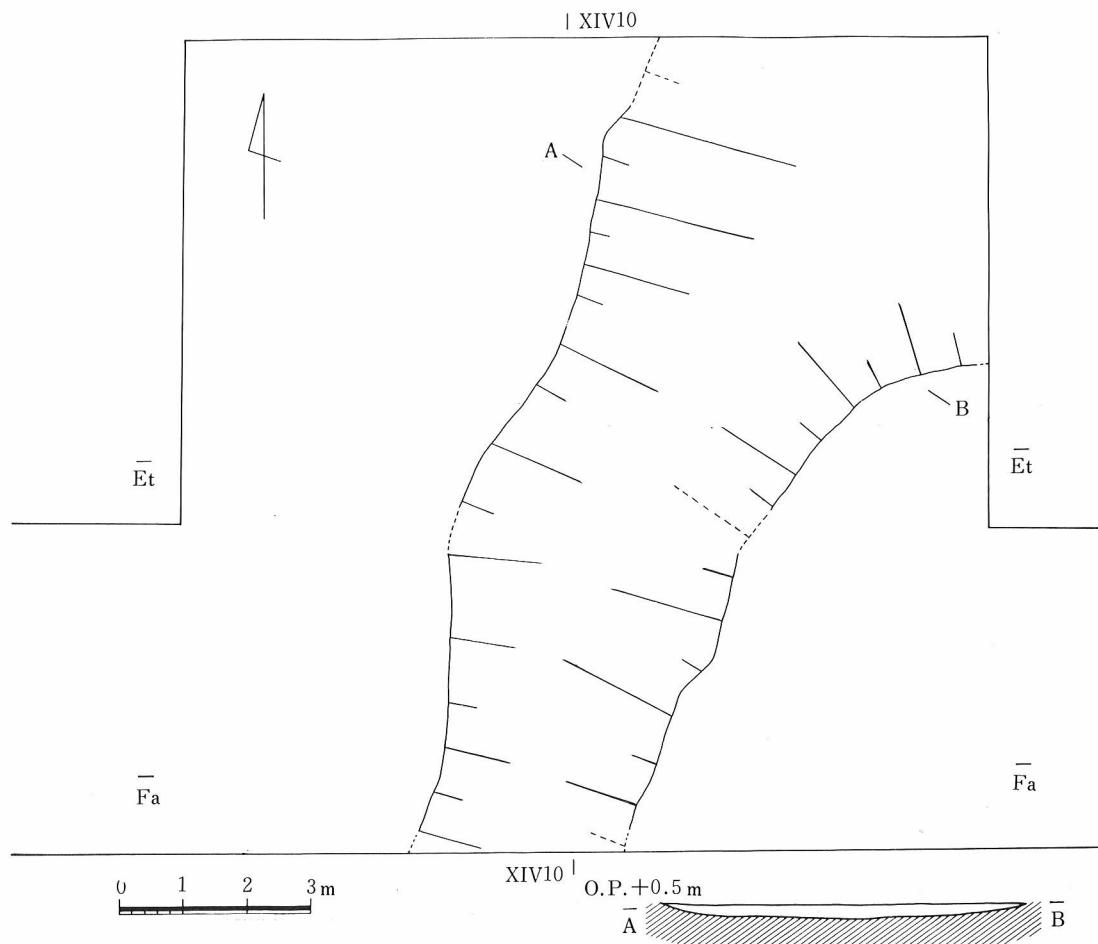
今回報告する調査区は、「鬼虎川遺跡発掘調査その2の1」として実施したトレーンチ調査区に接した橋脚基礎部分の調査であるため先の報告と基本層位に関してはほとんど変化が認められない。D-4区、D-5区、では、南北方向の土層断面は、先の報告のC区東端の南北方向断面B区西端の南北方向断面と連続するものである。以上の点を含んでD-3からD-7区の層位について述べるものとする。

盛土 上部は山砂を用いており、下部は砂、礫を多く含む暗緑灰色の粘土。

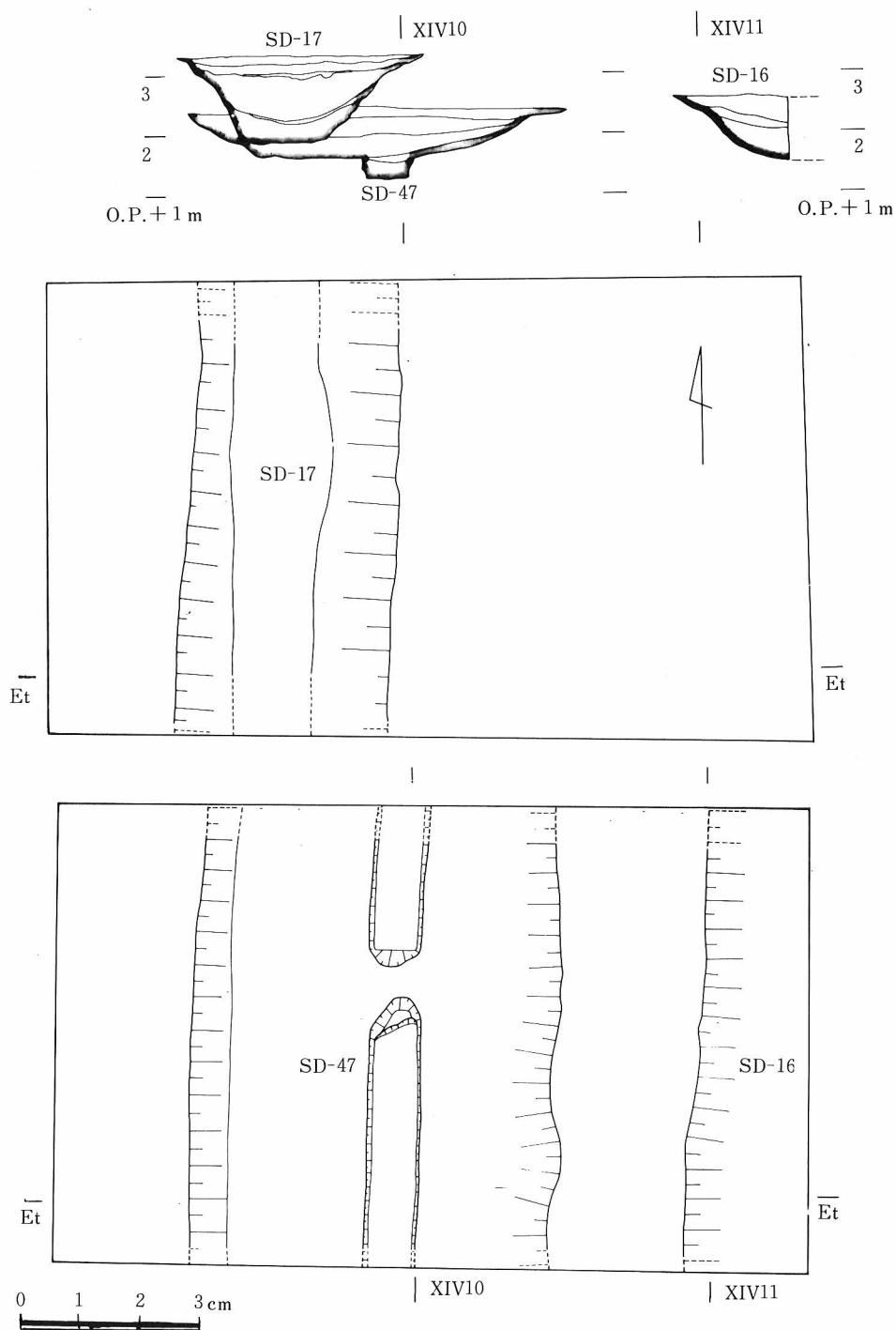
第1層 オリーブ黒(7.5 Y 3/1)シルト質粘土、現在調査区付近に広がる耕作土。

第2層 暗緑灰色(10 G Y 4/1)シルト質粘土、現在の耕作土の床土

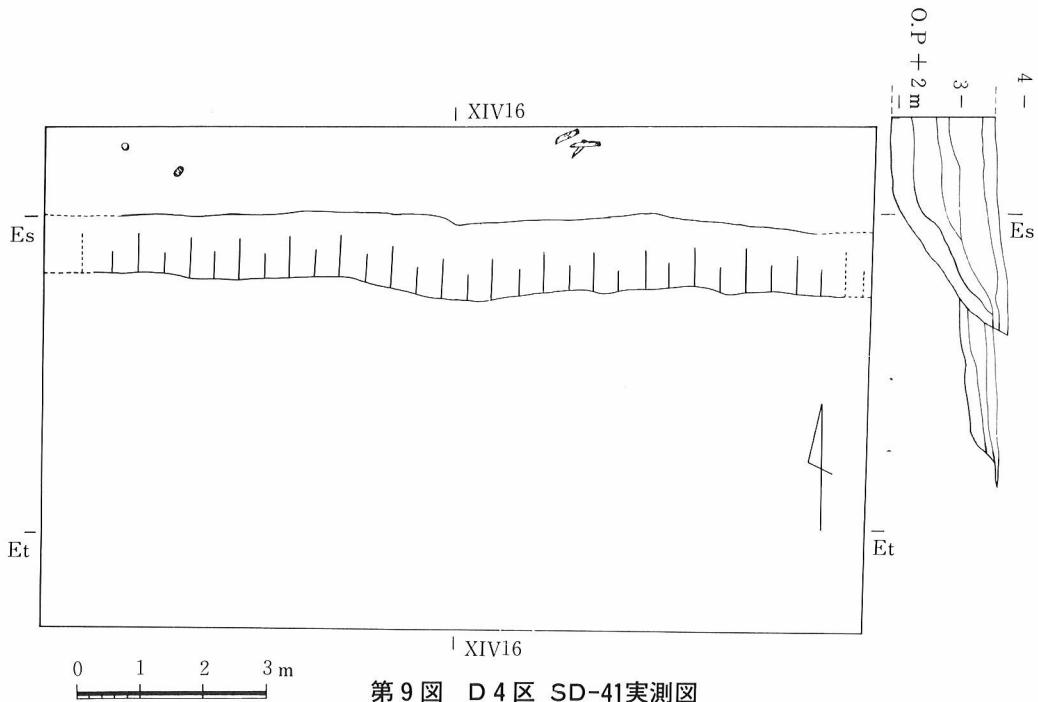
第3層 灰色(5Y 5/1)粘質シルト、植物遺体を多く含み、中粒砂及び粗砂を少量含む。



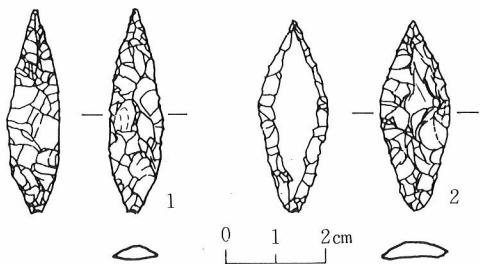
第7図 D 3区 SD-1実測図



第8図 D 3区 SD-16・17・47実測図



第9図 D 4区 SD-41実測図



第10図 D 4区出土石器実測図

第4層 暗緑灰色 (10 GY 45/1)粘土、認められない地点もあり、比較的不安定な層である。

第5層 黄橙色 (7.5 YR 7/8)及び場所によつて暗緑灰色 (7.5 GY 5/1)シルト・地点により異なるが、3～4層に分層できる。

第6層 暗緑灰色 (10 GY 4/1～7.5 GY 3/1)

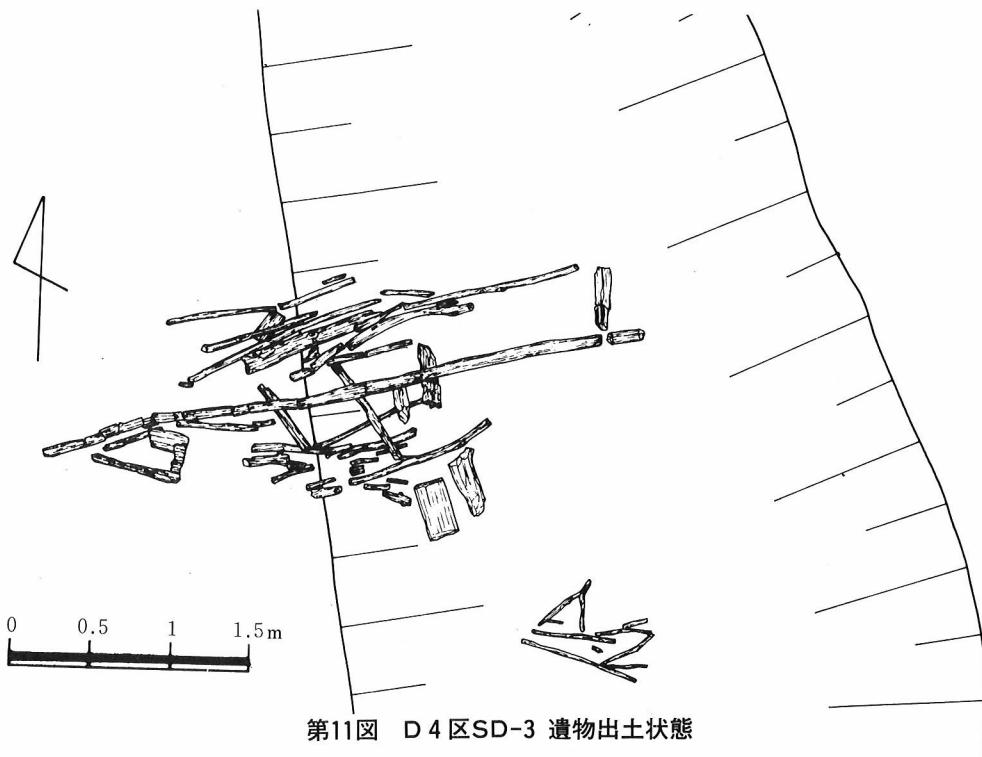
シルト質粘土、砂粒及び植物遺体を含む。

第7層 暗緑灰色 (10 GY 4/1)粘土、砂粒及び植物遺体を第6層よりも多く含み、地点によっては、砂がレンズ状に堆積していた。前回と同じく比較的しっかりとした遺構面を形成している。

第8層 暗オリーブ灰色 (5 GY 4/1)～暗青灰色 (5 B 4/1)粘土、D-4区付近では 10～20 cmの厚さで全域に、D-3区付近でも比較的厚く砂がレンズ状に堆積しており、不安定な堆積状況を示している。

第9層 暗オリーブ灰色 (5 GY 4/1)～オリーブ黒 (10 Y 3/1)粘土、植物遺体、炭を含む。

第10層 灰オリーブ (5 Y 4/2)～暗緑灰色 (7.5 GY 4/1)粘土、中粒～粗砂を多く含み、この砂がD-4区付近では、5～10 cmの厚さで粘土を多く含む砂のレンズ状堆積となつて弥生～平安にかけての遺物を包含して堆積している。遺物は砂の中に集中し



第11図 D 4 区SD-3 遺物出土状態

て含まれ、粘土の中にはほとんど含まれていない。

第11層 暗緑灰色 (7.5 GY 4/1~8 GY 3/1) 粘土、層の下部は第12層上部と接して複雑に乱れており非常に不安定な堆積である。

第12層 黒色 (10 YR 1.7/1) 粘土、非常に不安定な堆積で第11層や第13層との境が明瞭ではあるが大いに乱れている。

第13層 暗緑灰色 (7.5 G.Y 4/1) 粘土、第12層に比べると幾分安定した堆積であり、数ミリほどの厚さの縞を呈する板状構造である。

第14層 灰色 (10 Y 5/1) 粘土、地区によっては認められないところもある。黒色粘土がラミナー状に含まれる。

第15層 黒褐色 (2.5 Y 3/1~7.5 Y 3/1) 粘土、植物遺体を含み上下2層に分層可能である。若干土器片も含まれている。D-4区では、畿内第三様式に比定できる甕が出土した。

第16層 黒色 (7.5 YR 17/1) 粘土、上面より若干遺物が出土する。今回の調査での最終遺構面である。

暗緑灰色 (7.5 G Y 4/1) 粘土、今回の調査で遺構は確認できなかったが、鬼虎川遺跡の地山として考えられる。

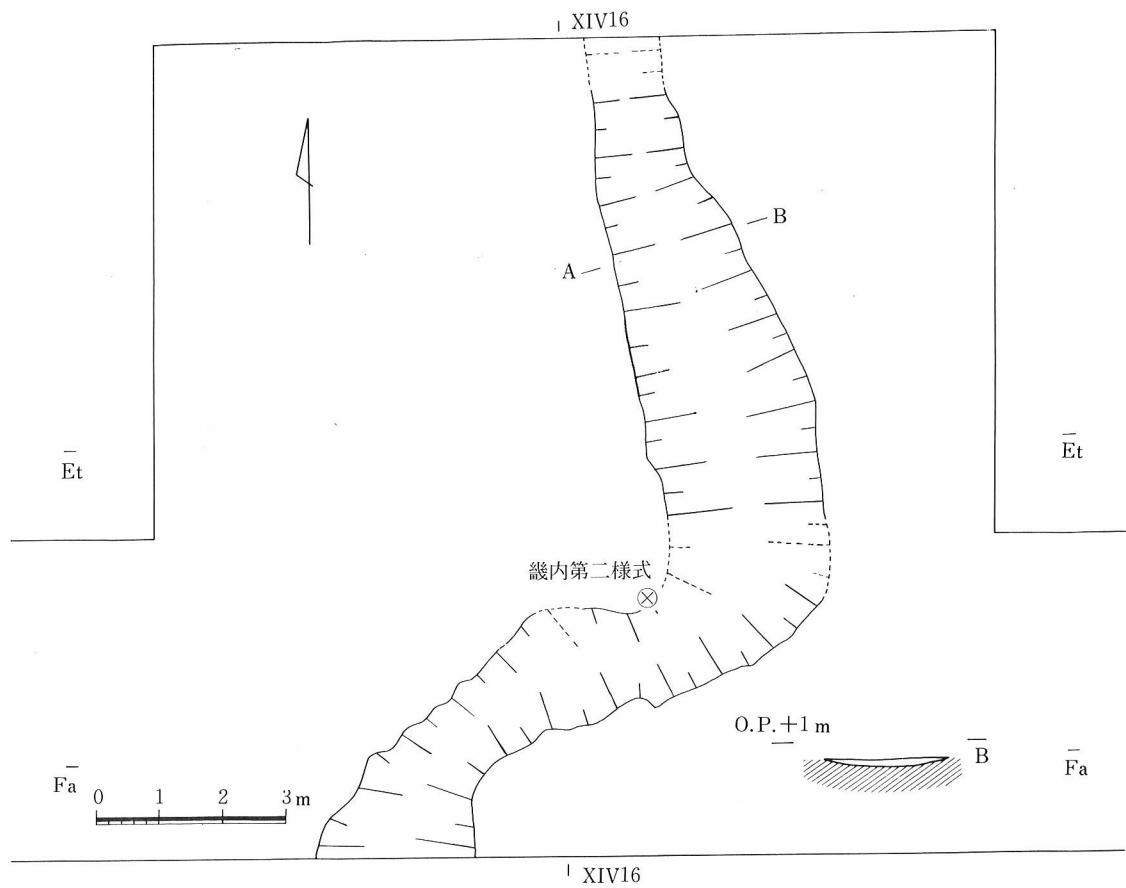
第18層 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 粘土

第19層 灰色 (10 Y 4.5/1) 粘土

(2) D 3 区の調査

SD-16 (挿図-第8図)

D-3区東側において第6層(暗緑灰色シルト質粘土)上面より検出した上部幅2.0m以上、



第12図 D 4 区 SD-3実測図

深さ 1.1 m、横断面が上部を大きく開いた逆台形に近いU字形を呈する南北方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、暗緑灰色粘土、暗緑灰色砂混じり粘土・暗オリーブ灰色粘土、の3層である。溝の時期を考察しうる遺物の出土は認められなかった。

SD-17 (挿図-第8図)

D-3区中央よりやや西側において第4層(暗緑灰色粘土)上面より検出した上部幅 4.0 m 深さ 1.3 m、横断面が逆台形を呈する南北方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、暗灰黄色シルト質粘土・灰色粘土・灰オリーブ色粘土・暗緑灰色粘土・灰色粘土・オリーブ黒色粘土の6層である堆積層に砂の堆積がみられないことや、周辺の土層は溝の影響でかなり激しく変化していることを考え合わせると、水が流れていたのではなく濁った状態であったと考えられる。遺物は、溝内最下層より漆器が2点出土しただけで、土器等の出土はなかった。

SD-47 (挿図-第8図)

D-3区中央において第7層(暗緑灰色粘土)上面より検出した上部幅 6.3 m、深さ 0.8 m、横断面は緩やかな弧を描き、底部中央で幅 0.9 m、深さ 0.3 m の垂直な落ち込みをもつ南北方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、暗緑灰色粘土、暗オリーブ灰色砂混じり粘土、暗緑灰色砂混じり粘土、暗オリーブ灰指粘土の4層であるが、上層部は先述した SD-17によって切

られている。この溝も時期を考察しうる遺物の出土はみられなかつたが、検出された層位関係からみると先述の SD-16 より少し古い時期に機能していたと考えられる。

SD-1 (挿図一第7図)

D-3区の東側、第16層（黒色粘土）上面で検出した深さ0.2~0.3mの深い谷状に広がる窪地である。前回の調査区では、幅3.1~4.5mの南北方向溝状遺構として報告したが、今回の調査では、南西から北東へ開口する自然地形として確認した。堆積土は、第15層（黒褐色粘土）と比べてやや植物遺体を多く含む程度の土質、色調であり、肉眼観察による第15層（黒褐色粘土）と比べてやや植物遺体を多く含む程度の土質、色調であり、肉眼観察による第15層との識別及び堆積を分層しうる差異は認められない。また砂の堆積もまったく認められず、深い谷状の灘みを想定させる遺構である。出土遺物としては、風化が激しく時期不明の土器片が数点と、石鏃が2点、自然木に混って枝を払っている可能性のある木片、細長い板材等が窪地全域に底よりやや浮いた状態で出土した。機能していた時期を直接推測しうる出土遺物はなかったが、D-4区で検出されたSD-3と層位関係から同時期と考えられる。

(3) D 4 区の調査

SD-41 (挿図一第9図)

D-4区北側において第4層（暗緑灰色粘土）上面より検出した上部幅3.4m、深さ1.8m、横断面が上部を大きく開いたU字形を呈する東西方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、暗緑灰色砂混じり粘土・暗オリーブ灰色礫混じり粘土・暗オリーブ灰色粘土・オリーブ黒色粘土の4層である。溝内に砂の堆積がみられないことや粘土の堆積状態からみて、この溝は水が流れ機能していたのではないと考えられる。溝の南肩には1~2mの間隔をおいて杭が検出されている。検出された遺物としては溝内最下層より漆器と子供用の下駄が出土しただけで、溝の時期は必ずしも明確にはできないが、層位の関係からみてD-3区におけるSD-47と同時期に機能していたと考えられる。

SD-46

D-4区南側において第7層（中粒砂～粗砂をレンズ状に含む暗緑灰色粘土）上面より検出した上部幅3.2m以上、深さ、1.2m、横断面が上部を大きく開いた逆台形に近いU字形を呈する東西方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、黒色粘土が斑点状に入った暗緑灰色砂混じり粘土・10mm程の礫が混入した暗緑灰色砂混じり粘土・植物遺体を含む暗緑灰色粘土の3層である。溝の時期を考察しうる遺物の出土はなかつたが、層位の関係からみてD-3区におけるSD-16と同時期の溝であると考えられる。

SD-3 (挿図一11・12図)

D-4区の中央第16層（黒色粘土）上面で検出した南から北へ流れる幅1.2~2.8m、深さ0.15~0.3mの自然流路である。横断面が深い窪み状で、堆積土が第15層（黒褐色粘土）と比べて植物遺体が幾分多い他は差異はみられず、砂の堆積がまったくみられないなどあまり水が流れていたとは推察できない。むしろ溝状の灘みを想定させる遺構である。出土遺物に土器、石器等はみられず、溝幅が最大となる調査区中央寄りで溝の方向に直交する形で溝肩から溝内に、

径数～十数cm、長さ0.5～2.5mの枝を払った木材及び少量の板材、棒材、これらと少し離れて枝の集積が認められた。溝が機能していた時期を推測しうる遺物は出土しなかつたが、第15層上面で畿内第三様式に比定できる甕が出土しており、以前の調査で畿内第二様式に比定される壺が1点出土していること、第17層は最近の調査では、鬼虎川遺跡の地山と認識されており、この層の上面で弥生時代前期及び中期初頭の遺構が検出された点などから、弥生時代中期前半を考えている。

（松岡良憲）

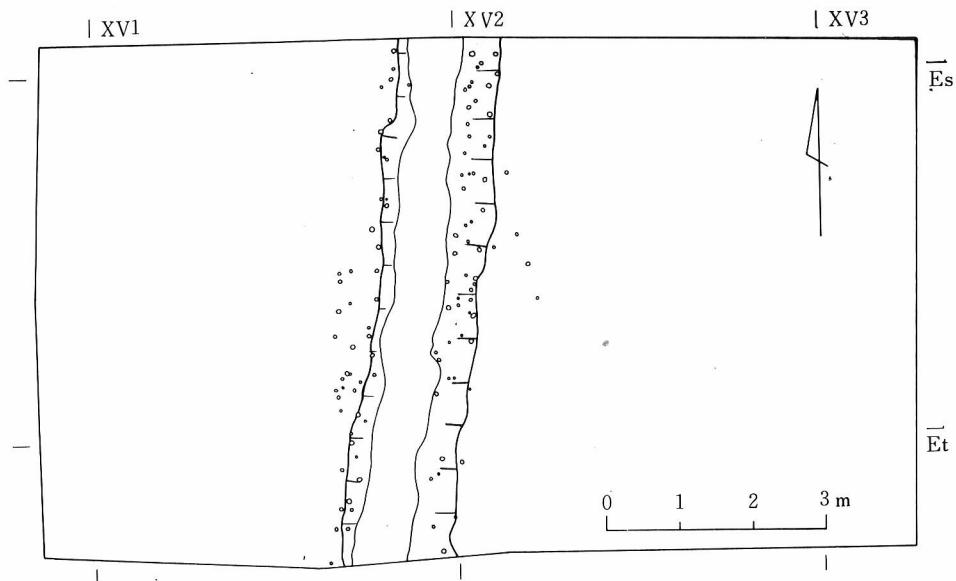
4) D5区の調査

D5区は、XVE3S、3t、XVF4a区までの13.3×8.0mの範囲で、前回調査のB-1区北西部に位置する。盛土を機械掘削後、人力掘削で精査を行い遺構、遺物の検出に努めた。土層観察用の断面は、排水坑の関係で北、西の2カ所に設定した。

(1) 基本層位

D5の基本層序は、上から

- 第1層 10cmの現耕作土である、近世陶磁器片、埴輪片が出土。
- 第2層 オリーブ黒色、淡青灰色粘質シルト層で、層中に5mm前後の円礫を多く含む。特に、東側は小砂が多く認められ、少量の近世陶磁器片が出土。SD-23を検出。
- 第3層 1cm前後の円礫を多く含む暗オリーブ褐色シルト層、10～12cm。特に、中央部より西側では、1cm前後の円礫混じりの層位が認められる。SK-1、凹地を検出。
- 第4層 暗オリーブ灰色、灰黄褐色粘質シルト層で、15cm。SK-2・3。SD-24・36・37杭列を検出。この層は、遺構の切り合い関係より2層に分層できる。下層より、SK-4・5。SD-41を検出。
- 第5層 上、下2層に分層できる。上層は、暗青灰色、灰オリーブ色粘質シルト層で、55cm。上層の北西部は、灰黄色シルト層、20cm。暗緑灰色粘砂土層、10cmに分層できる。下層は、暗青灰色粘土層、7cm。SD-39。SK-6・8・9を検出。遺構の切り合い関係より、SD-43を検出。
- 第6層 3mm前後で円形の暗青灰色粘土粒と1mm未満の円礫が混じる。暗オリーブ褐色、灰オリーブ色粘質シルト層で、5～10cm。層中より少量の瓦器片、瓦片が出土。SD-42・49、凹地、SK-7を検出。
- 第7層 暗青灰色、オリーブ黄褐色粘土層で、25cm。
- 第8層 西側は、1～5mm前後の円礫、3mm前後の炭化物混じり暗青灰色粘土層、東側は、炭が粗状に入る暗灰色粘土層で、5～7cm。
- 第9層 この層は、3層で、6～15cm。小砂がブロック状に混じる暗緑灰色粘土層、5cm。1mm前後の円礫混じり青黒色シルト層で、2～5cm。層中より、須恵器片、土師器片を出土。SD-50を検出。
- 第10層 オリーブ黒色、暗オリーブ灰色、暗緑灰色粘質シルト層で、29～32cm。
- 第11層 この層は2、3層に分層できる。上層より、7～12cmの灰色粘砂土層で、SD-51の西側肩部付近に認められる盛土である。白色微小砂の混じる暗緑灰色シルト層で、10



第13図 D 5 区 SD-23実測図

~ 20cm。白色微少砂の混じる緑黒色粘土層で、5cm。小砂混じり灰色粘土層で、調査区域の中央部より東側で認められた。5~10cm。SD-51 SK-10を検出。

第12層 中粒砂混じり緑灰色粘土層で、15~25cm。

第13層 この層は2, 4層に分層できる。上層は、調査区域の一部に認められる層で、北側は小砂層、東側は小砂混り淡灰色シルト層で、6cm。緑灰色、淡灰色粘砂土層で、4~10cm。中粒砂混じり緑灰色粘砂土層で、10~15cm。緑灰色粘土層、10~15cm。

第14層 黒色粘土層で、炭化物の堆積状態を示す、5~15cm。凹凸が著しい。

第15層 3~12cmの緑灰色粘砂土層である。

第16層 7~10cmの暗オリーブ灰色粘土層である。

第17層 オリーブ黒色粘土層で、17cm。

第18層 黒色粘土層、16cm。

第19層 地山を形成する淡灰色粘土層で、黑色粘土粒が混る。22~35cm。

第20層 腐植土、灰色粘土、黒色粘土粒が混じるオリーブ灰色粘土層で、15~24cm。

第21層 20~29cmの暗オリーブ灰色粘土層である。

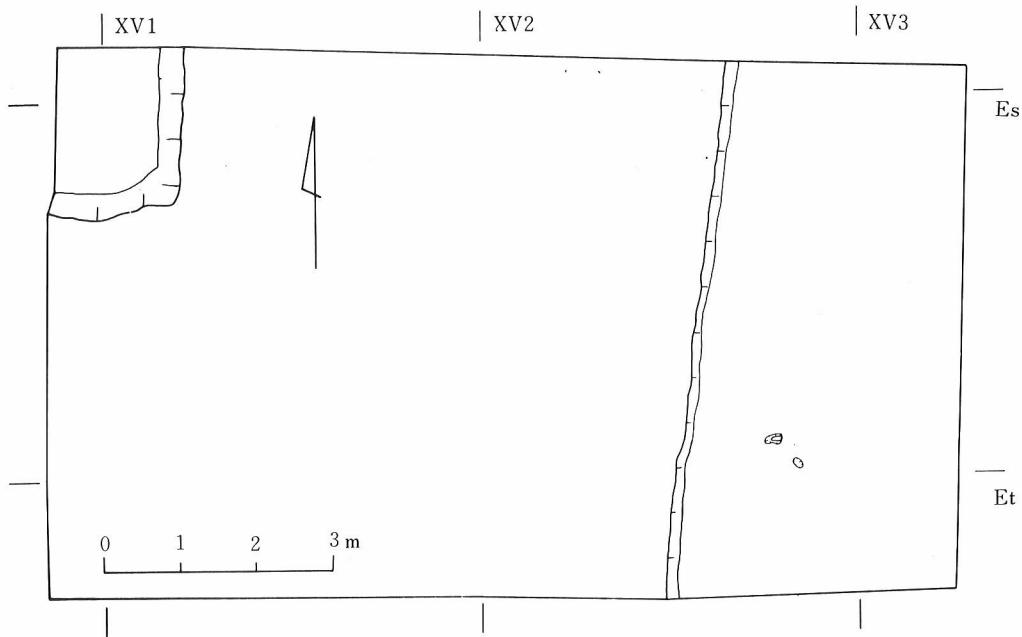
第22層 シルト質に近い暗緑灰色粘土層、30cm。層中に、枝状の自然木を含む。

(2) 遺構

D-5区における検出遺構は、上層で近世の溝、土壙、田跡、道路状遺構がみられ、下層では、前回の調査と同様に明確な遺構面を検出に至らなかった。以下、検出遺構面ごとに記す。

第2層上面での検出遺構

SD-23 調査区域の中央部(XVE3S, 4S~XVF3a, 4a)で北側から南西方向に流



第14図 D 5 区 SK-1・田跡実測図

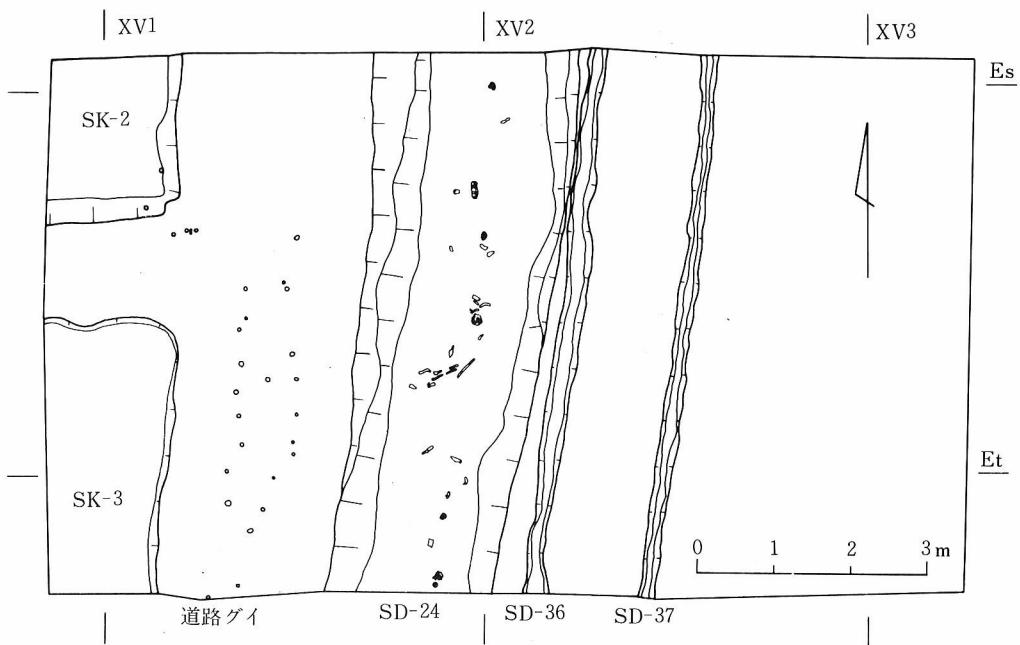
れる1条の溝を確認した。SD-23は上幅1.4~1.55m、下幅0.5~0.9m、深さ0.35~0.40mを測り、断面はU字形を呈し、溝の両岸には、多数の杭が打ち込まれている。溝内の堆積土層は、中粒砂層を主に所々で薄い腐植土層がみられた。中粒砂層中より、多くの近世陶磁器片、数点の縄文土器片、弥生土器片、石鏃が出土した。

杭列 SD-23における基本杭列の配置は、東岸で南北方向の1列に並ぶ杭列A、西岸でも南北方向の3列に並ぶ杭列B、C、Dを確認した。杭列Aは、溝23の東肩側で18本の丸杭が南北方向に打ち込まれ、約7.2m存在している。杭列Bは、溝23の西肩側で16本の杭が南北方向にみられ、北より南2.6mの所で7本、8本目より南側の杭列は、やや内側に位置し約4mの範囲に存在している。杭列C、Dは杭列Bの8~11本目の西側にみられ、杭列Cは、丸杭が10本で2mの範囲に、杭列Dは、丸杭4本で1mの範囲に存在している。杭列A、Bは、上記の基本杭列に対して、溝内傾斜面に沿って2, 3本を1対とする丸杭、角杭が打ち込まれている。杭列Aは、N-120°-Wの方向で44本、杭列Bは、N-140°-Eの方向で17本みられた。これらの杭は、径0.03~0.08mの丸杭で杭列Bにだけ0.05、0.07mの2本の角杭がみられた。各杭間は、0.1~1.0mのばらつきがみられるが、A、B間は、0.45m、C・D間は、0.31mを平均とする。これらの杭間には、所々で、小枝、草葉、茎などが置かれていた。

SD-23は、杭列の打ち込み方、堆積土層が中粒砂を主にする事より北から南への激しい流れが想定できる。両岸における多数の杭は、溝肩部補強を目的に常々行われ、特にC・D杭列は、下層の溝24肩部近付に位置し、杭列Bの補強の為後に打ち込まれたと考えられる。

第3層上面での検出遺構

SK1 調査区域北西壁面(XV E 2 S, 3 S, 2 t, 3 t)近くに位置する。長軸2.3m以上、



第15図 D 5 区 SK-2・3, SD-34・36・37 実測図

短軸 1.7 m 以上、深さ 0.20~0.28 m を測り、底面は凹凸の著しい土壌である。堆積土層は、1 cm 未満の円礫混じりオリーブ黒色シルト層で 0.10~0.15 m 、オリーブ黒色粘質シルト層で、0.05~0.10 m とつづく、上層のオリーブ黒色シルト層中より近世陶器片 1 点が出土した。

凹部 調査区域東側 (XV E 4 S, 5 S ~ XV F 4 a, 5 a) より、西へ 3.2~3.9 m の範囲に認められる凹地状遺構で長軸 7.2 m 以上、短軸 3.2 m 以上、深さ 0.10 m を測る。底面は青灰色粘土層で凹凸が著しく、所々で小砂の入った足跡を検出した。堆積土層は、淡青灰色粘質シルト・小砂の混った層相で、遺物は皆無であった。

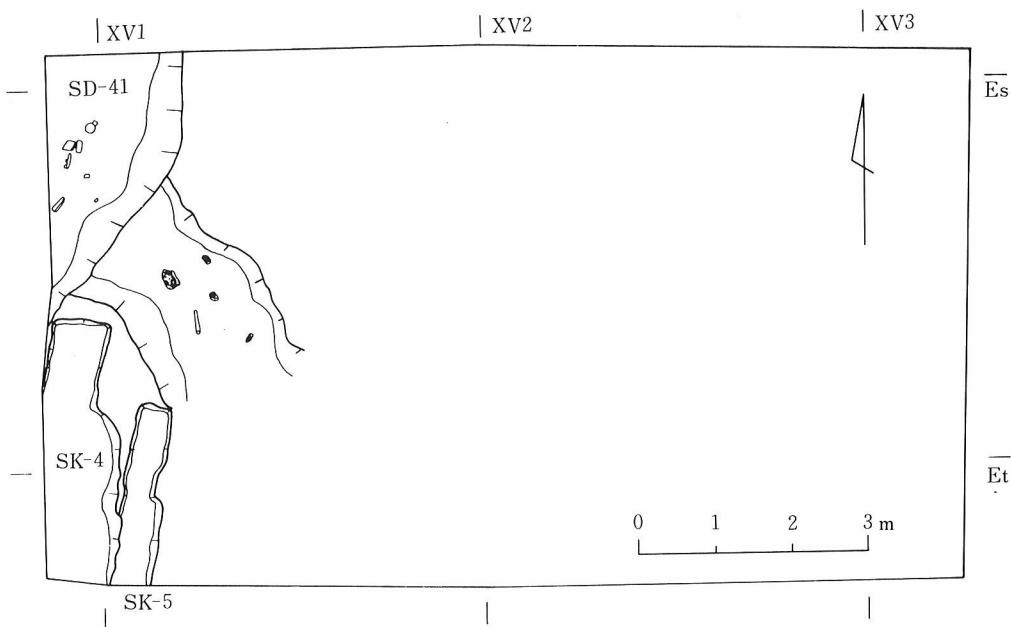
土壌1 凹地状遺構は、ともに堆積土層中に多くの小砂がみられるが、水田遺構と考えられる。

第4層上面での検出遺構

SK-2 調査区域北西部 (XV 2 S, 3 S, 2 t, 3 t 区) に位置する。土壌2は、長軸 2.2 m 以上、短軸 1.7 m 以上、深さ 0.25~0.3 m を測り、南東隅部は、0.15 m 正方形の入り込んだシルト層、0.10 m であった。遺物は、上層中より近世陶磁器片が出土。

SK-3 調査区域南西部 (XV E 2 t, 3 t, XV F 2 a, 3 a 区) に位置する。長軸 3.6 m 以上、短軸 1.5 m 以上、深さ 0.05~0.15 m を測る。堆積土層は、微少砂層に 1 mm 未満の円礫、3.5 cm のオリーブ黒色粘土粒が混じる。遺物は皆無であった。

SD-24 調査区域の中央部 (XV E 3 S, 4 S ~ XV F 3 a, 4 a 区) で、北側から南西方向に流れる。溝 24 は、上幅 2.2 ~ 2.7 m 、下幅 1.3 ~ 1.75 m 、深さ 0.2 ~ 0.4 m を測り、断面は U 字形を呈する。堆積土層は、東側肩部の上層で、青灰色シルト層の流れがみられ、下層は腐植土層中に中粒砂層がレンズ状に所々でみられた。SD-24 の底面において、木器および加工



第16図 D 5 区 SD-41・43, SK-45実測図

木材、下駄、漆器椀、仏具類、石などが出土した。

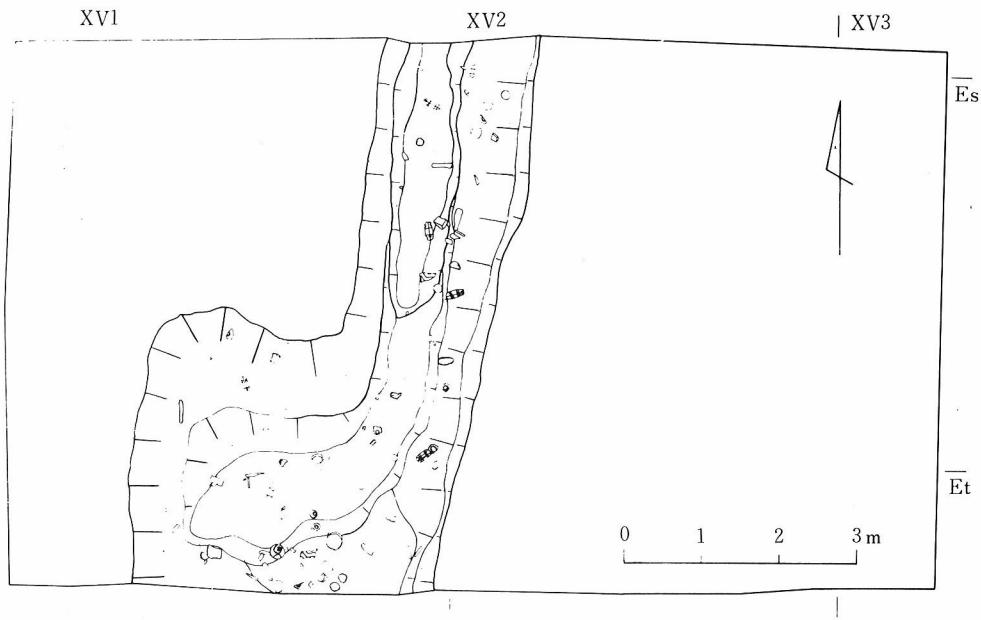
SD-36 S D-24 の東側(XV E 4 S ~ XV F 4 a区)の所で、南北方向の溝を検出した。

S D 36 は、北東肩部付近で S D-24 と接する様な状態を示す。上幅 0.28 m、下幅 0.15 m、深さ 0.08 m を測り断面は浅いU字形を呈する。堆積土層は、灰色シルト土が混る暗オリーブ褐色シルト層で、遺物は皆無であった。

SD-37 S D 36 の東側(XV E 4 S ~ XV F 4 a区) 1.25~1.35 m の所で、南北方向の溝を検出した。S D 37 は、上幅 0.25 m、下幅 0.08~0.10 m、深さ 0.06 m を測り、断面は浅いU字形を呈する。堆積土層は、灰色シルト土層で、遺物は皆無であった。

杭列 XV E 3 t、XV 3 a 区域において、南北方向の 2 列に並ぶ杭列 C、D と東西方向の 1 列に並ぶ杭列 E を確認した。杭列 C は、S D-24 の西約 0.7~1.0 m 側で平行に打ち込まれ、約 4.6 m 存在している。杭列 D は、杭列 C と平行に約 0.6~0.7 m の幅をもって打ち込まれ、約 4.2 m 存在している。杭列 C は、溝 24 の西側約 1.0~2.6 m の範囲で確認された。杭列方向は C・D とともに北側から 7.8 本目の杭でやや西側に方向を変える。杭列 C は、南側に角杭がみられ、他は 0.1 m 未満の丸杭である。杭間は、0.15~0.9 m までのばらつきがみられるが約 0.45 m を平均とする。杭列 D は、すべて 0.1 m 未満の丸杭である。杭間は、0.2~1.3 m までのばらつきがみられるが約 0.45 m を平均とする。杭列 E は、すべて丸杭で 0.04 m 未満である。杭は、東西方向の約 1.7 m の範囲に計 6 本確認され、東端部丸杭は、杭列 C と共に通杭をなす。

杭列 C・D は、杭列 E の北側に存在せず、S D-24、SK-3 の間にみられた。杭列 C、D の幅は、約 0.6~0.7 m でその間の土層は、暗オリーブ褐色粘質シルト層で盛土などは認めら



第17図 D 5 区 SD-39, SK-9実測図

れなかった。杭列 C、D の下層には SD-39・43、杭列 E の西側下層には、SD-41 が存在している。これらの杭列 C、D、E は、溝の縁に打ち込まれた杭ではなく、SD-39・41・43 の埋没後も湿地状態であったと思われる間に、道路状遺構として使用する為に打ち込まれた杭列と考えられる。

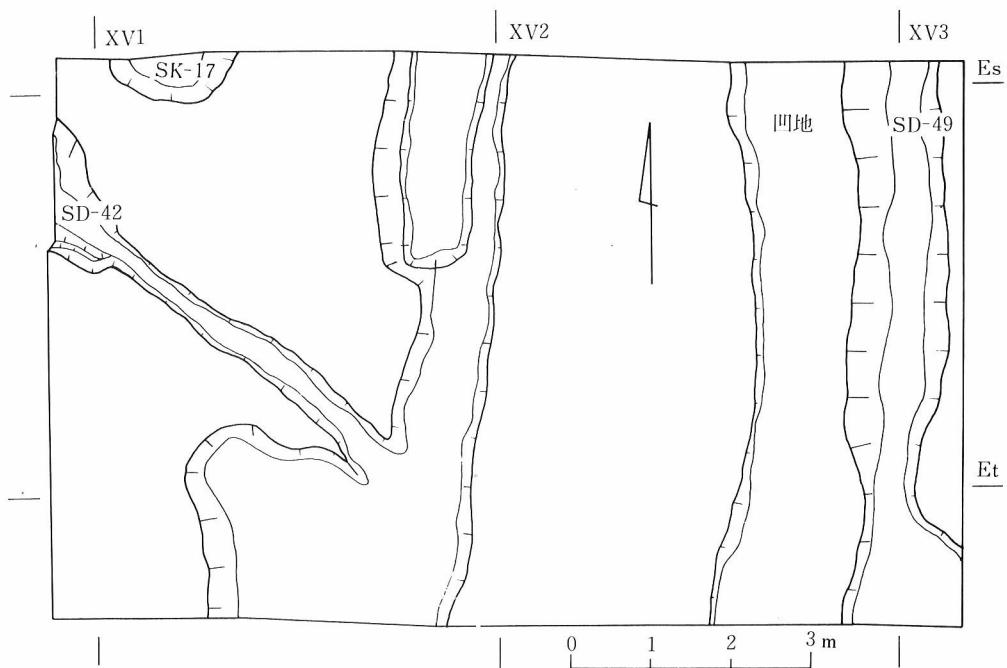
第4層下層での検出遺構

SK-4・5 調査区域の南西壁面(XVE2t、3t、XVF2a、3a区)近くに位置し、西側をSK-4、東側をSK-5と呼称する。SK-4・5は、SK-3の底面で検出したが、SK-5の東側肩部がSK-3の外側に位置する事より、層位的には、分層できなかったが、SK-3とSK-4・5は別の遺構と判断した。

SK-4 長軸3.4m以上、短軸0.7m、深さ0.05~0.1mを測り、平面形態は、ほぼ長方形を示すが東南部は東へ張りだす。土 中央部南側付近に上幅0.08m、高さ0.05mの台形状の畦が部分的に残存している。底面は暗緑灰色粘土層で凹凸が著しい。堆積土層は、暗緑灰色、明褐色、黒褐色シルト層が混じる層相を示した。遺物は須恵器片が出土した。

SK-5 SK-4の東側に接して、長軸2.4m以上、短軸0.4m、深さ0.08~0.16mを測り、東南部はSK-4と同様に東に少し張り出す。平面形態は、ほぼ長方形を示す土壙である。堆積土層は、小砂混じりオリーブ黒色シルト層で、所々に暗緑灰色シルト層がみられる。遺物は、砂層中より土師器小片、暗緑灰色シルト層中より土師器小片、瓦片が出土した。

SD-41 調査区北西部(XVE2S、3S、2t、3t区)隅に位置し、D4トレンチで、東

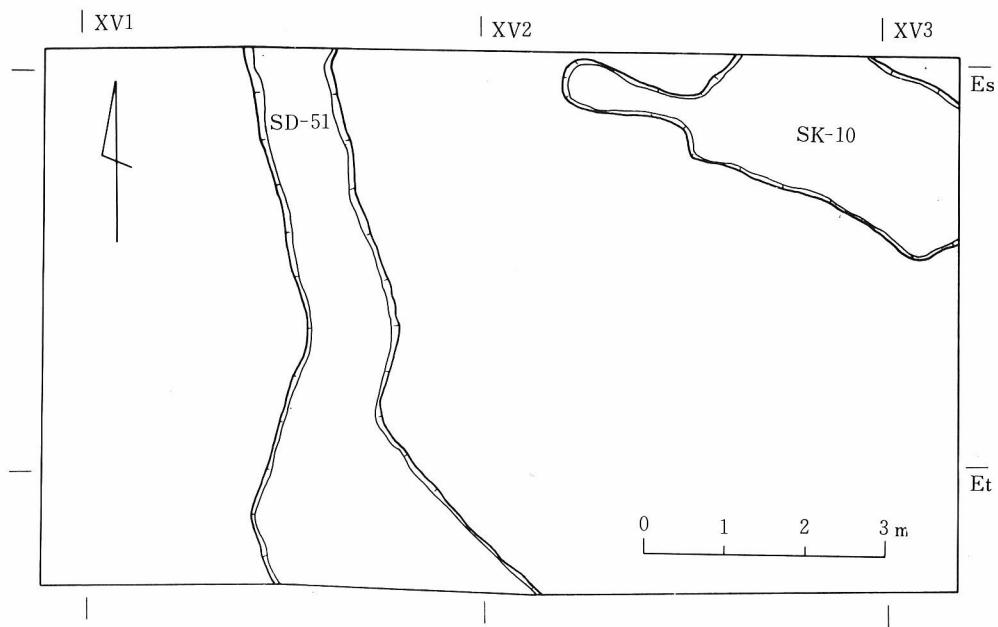


第18図 D 5 区 SD-42・49, SK-7, 凹地実測図

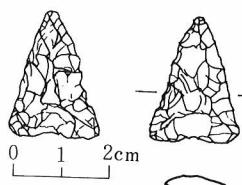
西方向に検出した S D 41 の東側コーナー部分に当る。S D - 41 の南肩部は S K - 3 、北肩部は S K - 2 で切られている。断面観察では、深さ 0.55 m である。堆積土層は、7 層確認され上層より暗オリーブ灰色粘質シルト層（上層はシルト、下層は粘質を帯びる）で、 14 cm 。炭混じり暗オリーブ灰色シルト層で、 8 cm 。 1 cm 前後の礫混じりオリーブ黒色粘質シルト層で、 5 ~ 23 cm 。 16 cm の暗オリーブ灰色シルト層で、下層には 1 cm 前後の円礫が混じり、一部に他の堆積土層、にがい黄褐色小砂層、 4 cm 。暗オリーブ灰色粘土層、 4 cm がみられる。 12 ~ 20 cm のオリーブ黒色シルト層（上層は小砂混じり層 10 cm 、下層は腐植土層 15 cm ）で、 25 cm がみられる。出土遺物は暗オリーブ灰色シルト層より下層で、加工木器 5 、下駄 3 、曲物 1 、曲物底板 1 などが出土した。

第 5 層上面での検出遺構

SD 39 調査区域の中央部 (XV E 3 S, 4 S ~ XV F 3a, 4a 区) で、北から南西方向に位置する溝で、西南部は大きく西側へ張り出す。上幅 2.0 ~ 4.2 m 、下幅 0.85 ~ 2.0 m 、深さ 0.95 m を測り、東側肩部から底面にかけての傾斜面は、するどいが底面は舟底形を示し、断面は U 字形を呈する。北側では、 S D - 39 の底面より切り込まれた S K - 9 を検出した。堆積土層は上層より、暗オリーブ灰色シルト、粘土層の基本土層で、この層は 3 層に分層できる、 (3 mm の角礫混じり灰オリーブ色粘土層で、 0.05 ~ 0.15 m) 黒色シルト層と暗オリーブ灰色シルト層の混じった層で、 0.1 ~ 0.2 m 。暗オリーブ灰色シルト層で、 0.05 ~ 0.1 m 。 1 mm 前後の円礫層で 0.05 ~ 0.1 m 。暗オリーブ灰色粘土層で、 0.04 ~ 0.15 m 。小砂と暗オリーブ灰色粘土層の互層で、



第19図 D 5 区 SD-51, SK-10実測図



第20図

D5区出土石器実測図

2層に分層できる、(1cmの円礫層、0.05~0.10m、暗オリーブ灰色粘土層、0.15~0.2m) 小砂混じり暗緑灰色シルト層、0.1~0.15m一部に他の堆積土層灰色シルト層がみられる。小砂混じり暗オリーブ灰色粘土層、0.1~0.2m、一部にオリーブ褐色中粒砂層の堆積土層がみられる。暗オリーブ灰色粘土層、0.05~0.2m。SD-39を形成するオリーブ灰色粘土層、緑灰色粘土層である。

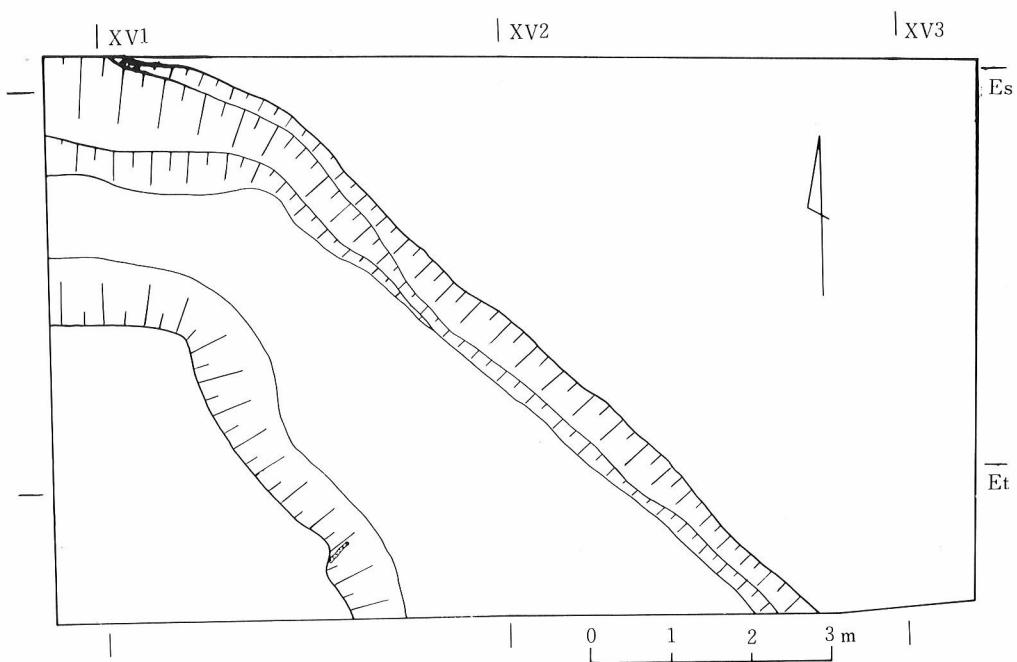
SD-39の堆積状態は、上記の様に7層に分層でき暗オリーブ灰色シルト(腐植土)層と砂層の互層としてとらえられ、腐植土層中には、葦、竹科の地下茎が多く認められた。

SD-39の木器出土状況は、底面、傾斜面において腐植土層、炭層などより木器、加工木材、下駄、漆器椀、曲物、仏具類等が出土し、特に南西部の張り出し部分では、遺物が集積した様な状態で出土したが、出土層位、出土状態より時間差が考えられる。

SK-6・8 SK-6・8は断面観察で確認した土壌である。

SK-6 調査区域の北壁面で確認した土で、SD-41で西側肩部は切られている。長軸2m以上、深さ0.3mで、堆積土層は1mm前後的小砂が混じる暗灰色シルト層であった。遺物は皆無であった。

SK-8 調査区域中央部北壁で、SD-39の西側に位置し東側は、SD-39によって切られている。上幅1.3m以上、深さ1.2mで断面はU字形を呈する。堆積土層は、上層で暗オリーブ灰色シルト層、0.6~1.0m。腐植土層、0.2mであった。遺物は皆無であった。



第21図 D 5 区 SD-50実測図

SK 9 調査区域の中央部(XV E 3 S、4 S、3 t、4 t区)に位置し、長軸 3.6 m以上、短軸 0.8~0.9 m、深さ 0.45 mを測り、南側はゆるやかに立ち上がる。堆積土層は、暗オリーブ灰色粘土層、青灰色粘土層が混じった土層で、灰色粘土層を切り込んでいる。遺物は皆無であった。

第5層下層での検出遺構

SD 43 調査区域中央部西側(XV E 2 t、3 t区)に位置し、北西側は SD-42、南東側は SD-39で切られている。上幅 1.5~1.9 m、下幅 1.0 m、深さ 0.35 mを測り、断面は U字形を呈する。堆積土層は、暗黒褐色シルト、緑灰色シルト層であった。出土遺物は、棒状加工木 1、瓦器片 1、自然石であった。

第6層上面での検出遺構

SD-42 調査区域の西側(XV 2 t、3 t区)に位置し、東南側は、SD 39 の深い掘り方で削平されていた。上幅 0.3~1.65 m、深さ 0.35 mを測り、断面はU字形を呈する。堆積土層は、砂混じり暗緑灰色粘質シルト層、0.05~0.1 m。緑灰色粘土混じりシルト層、0.25 mであった。出土遺物は皆無であった。

SD-49 凹地 調査区域東側から西へ 3 mまで(XV 4 S、5 S~XVF 4 a、5 a区)に位置する。凹地面の一角に SD-49 はみられる。

凹地 西側から東へゆるやかに落ち込む凹地状の遺構である。長軸 7 m以上、短軸 2.6~2.9 m以上、深さ 0.05 mで、堆積土層は、暗オリーブ灰色粘砂土層がみられた。遺物は皆無であった。

SD-49 凹地面の底より掘り込まれた溝で、4ライン上に検出された。上幅1.2m、現長7m以上、深さ0.125mを測る。SD49は東南肩部は東へ拡がっていく。堆積土層は、灰オリーブ色粘砂土層、腐植土層が混じる。遺物は皆無であった。

SK-7 調査区域北壁面西側(XVE3t)で一部分を検出した。長軸1.6m、深さ0.25~0.4mを測る円形土壙であった。堆積土層は、黒色粘土がブロック状に混じる青灰色粘土層で遺物は皆無であった。

第9層上面での検出遺構

SD-50 調査区域北西角(XVE2S、3S~XVF3a、4a区)より南東方向の溝を検出した。SD50は、上幅3.5m、下幅2.25m、深さ0.95mを測る。堆積土層は、上層より3cm程の円礫を含む暗緑灰色粘質シルト層、0.45m。暗オリーブ灰色粘土層、0.05~0.15m。暗緑灰色粘土層、0.30~0.35m。遺物は、暗オリーブ灰色粘土層中より、板状加工木片が出土した。

第11層上面での検出遺構

SD-51 3ラインの西約1mの所(XVE3S~XVF3a、4a区)で、南北方向の溝を検出した。SD-51は、上幅1.0~2.4m、下幅0.75~2.2m、深さ0.35mを測り、西肩部で灰色粘砂土層が0.1m盛り上げられていた。この灰色粘砂土層は、SD-51の掘削の盛土と考えられる。堆積土層は、小砂を主として灰色粘土がブロック状に混じる層相であった。遺物は土師器小片が数点出土した。

SK-10 調査区域の北東側(XVE4S、4t、5t区)に位置する。平面形態は、1.85×3.65m堅穴状長方形土壙の西南側に、長さ1.7m、幅0.35~0.6mの突出部を有する土壙である。堅穴状長方形土壙と突出部は、精査の結果同一時期と考えた。堆積土は、堅穴状長方形土壙では、小砂を主に、灰色粘土がブロック状に混じる層相であった。突出部は灰色粘土層であった。遺物は、堅穴状長方形土壙、突出部とともに、土師器の小片が数点出土した。(山本芳彦)

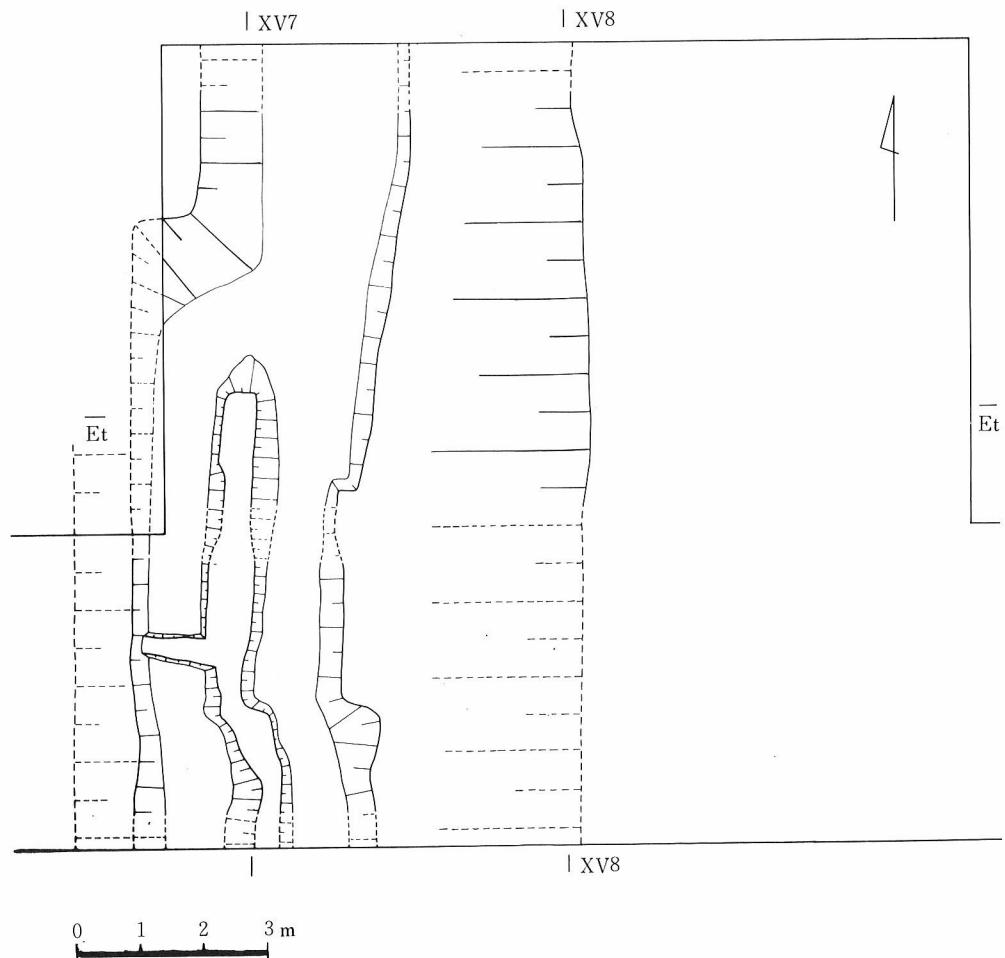
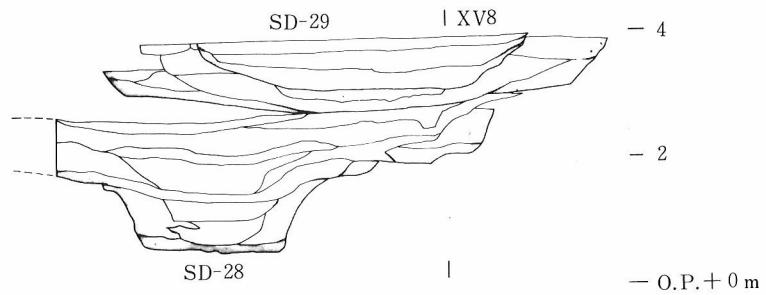
5) D6区調査

SD-29 (挿図-第22図)

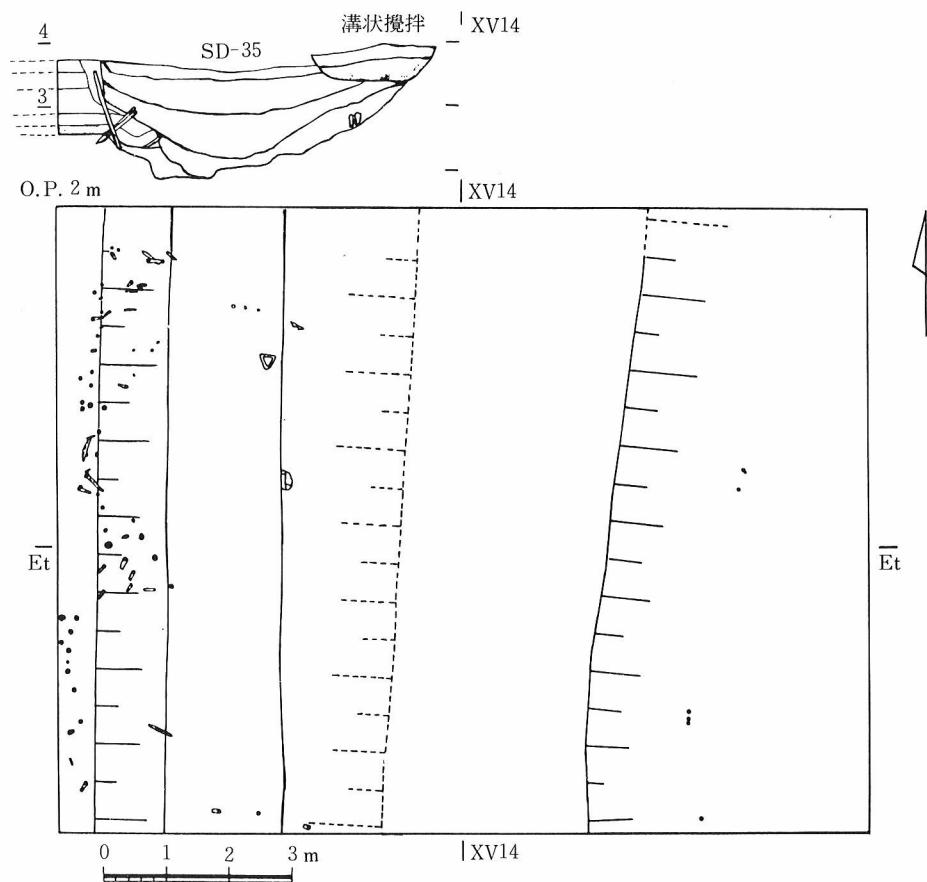
D-6区中央よりやや西側において第2層(暗緑灰色シルト質粘土)上面より検出した上部幅5.3m・深さ0.8mを呈する南北方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、暗灰黄色土・暗オリーブ灰色粘質シルト・オリーブ黒色微砂・オリーブ黒色微砂~礫の互層・オリーブ黒色粘土、暗緑灰色粘土がブロック状に入った暗オリーブ灰色粘土の4層である。溝内第2・第3層から多数の漆器、加工木(板材、杓子)、曲物、下駄、塔婆等が出土している。

SD-30 (挿図-第32図)

D-6区中央において第3層(灰色粘質シルト)上面より検出した南北方向の溝である。上層部は先述のSD-29によって切られているが、上部幅5.9m、深さ1.1mを計る。SD-29との時期差はほとんどないと考えられ、むしろSD-29はこの溝の掘り直しであろうと考える。



第22図 D 6 区 SD-28実測図



第23図 D 7 区 SD-35 東側落ち込み実測図

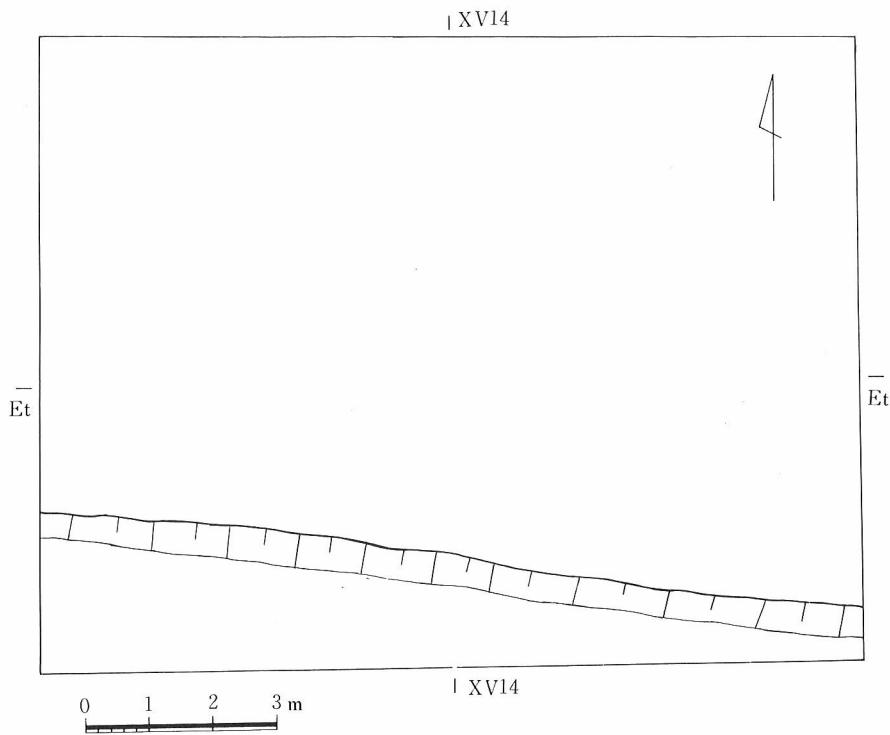
SD-28 (挿図-第22図)

D-6区中央より西側において第7層(暗緑灰色粘土)上面より検出した上部幅7.3m以上・深さ2.2m・横断面は逆台形の二段掘りを呈する南北方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、暗緑灰色粘土・中粒砂～粗砂を少量含む暗緑灰色粘土・小礫を含む暗緑灰色粘土・灰色粘土・暗オリーブ灰色粘土・緑灰色粘土・黒色粘土がブロック状に入った暗緑灰色砂混じり粘土・黒色粘土が斑点状に入った暗オリーブ灰色粘土・暗オリーブ灰色粘土の12層である。この溝は地山と考えられる第17層(暗緑灰色粘土)を掘り込んでおり、前回の調査においては、溝の中央部を南北方向に堤状に掘り残していたが、今回の調査では、調査区中央付近で堤状に掘り残しがなくなり、最も深くなる部分が東側によった形で一本化している。つまり前回の調査区における2つの流れがここで東側の流れに合流したことになる。

6) D 7 区の調査

SD-35 (挿図-第23図)

D-7区西側において第3層(粘質シルト)上面より検出した南北方向の溝である。攪乱に



第24図 D 7 区 SD-37実測図

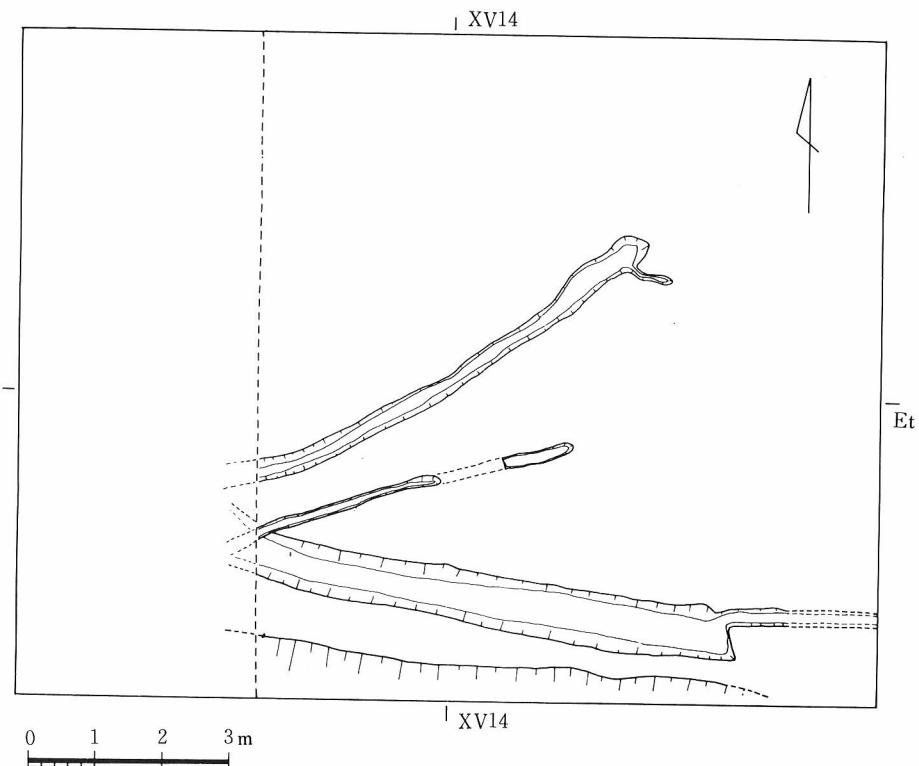
よって東肩は検出できなかったが、上部幅 5.7 m、深さ 1.7 m、横断面は上部を大きく開いたU字形であったと考えられている。溝内の堆積土は上層より、暗青灰色シルト質粘土・礫を少量含む暗緑灰色粘土・暗緑灰色粘土・オリーブ黒色粘土・暗オリーブ灰色粘質シルト・暗緑灰色シルト質粘土の6層である。溝の西肩において、30~50cmの間隔で2列に打たれた杭を検出した。杭のほとんどは径 5~10 cm、長さ 1.5~2.0 m で枝を払い、先を尖らせただけの丸太材であった。さらに、西肩を掘り下げる時点で、先述の杭列とは時期を別にする杭列の残存があり、これらは先の杭列に先行してのものと推察でき、西肩の護岸については1回以上の改修工事が考えられる。溝内からの出土遺物は、土器片、竹籠、下駄等であった。

SD-37 (挿図—第 24 図)

D-7区南側において第5層（暗緑灰色粘土）より検出した上部幅 2.0 m 以上、深さ 1.2 m、横断面が逆台形を呈する東西方向の溝である。溝内の堆積土は上層より、細～中粒砂を多量に含む暗緑灰色シルト質粘土・中粒～粗砂を多量に含み黒色粘土が斑点状に入った緑灰色粘土・暗オリーブ灰色粘土・細～中粒砂、細～中礫を多量に含み黒色粘土がブロック状に入った暗オリーブ灰色粘土・植物遺体を多量に含み黒色粘土がブロック状に入った暗オリーブ灰色粘土の4層である。溝内からの出土遺物は皆無であった。

SD-49 (挿図—第 33 図)

D-7区 S D-35 の東側において第4層（青灰色粘土、青黒色粘土、微砂の互層）より検



第25図 D7区 SD-37・52・53・54実測図

出した南北方向の溝である。上部幅 1.2 m、深さ 0.3 m。溝内の堆積土は暗青灰色粘土の単層で、遺物の出土はなかった。

SD-52, 53, 54 (挿図—第25図)

D-7区において共に第9層(暗緑灰色粘土)上面で検出した溝であるが、いずれも堆積土の状況から長時間機能していたものとは考えられない。おそらく上層部で検出した水田に伴う溝であったと考えられる。

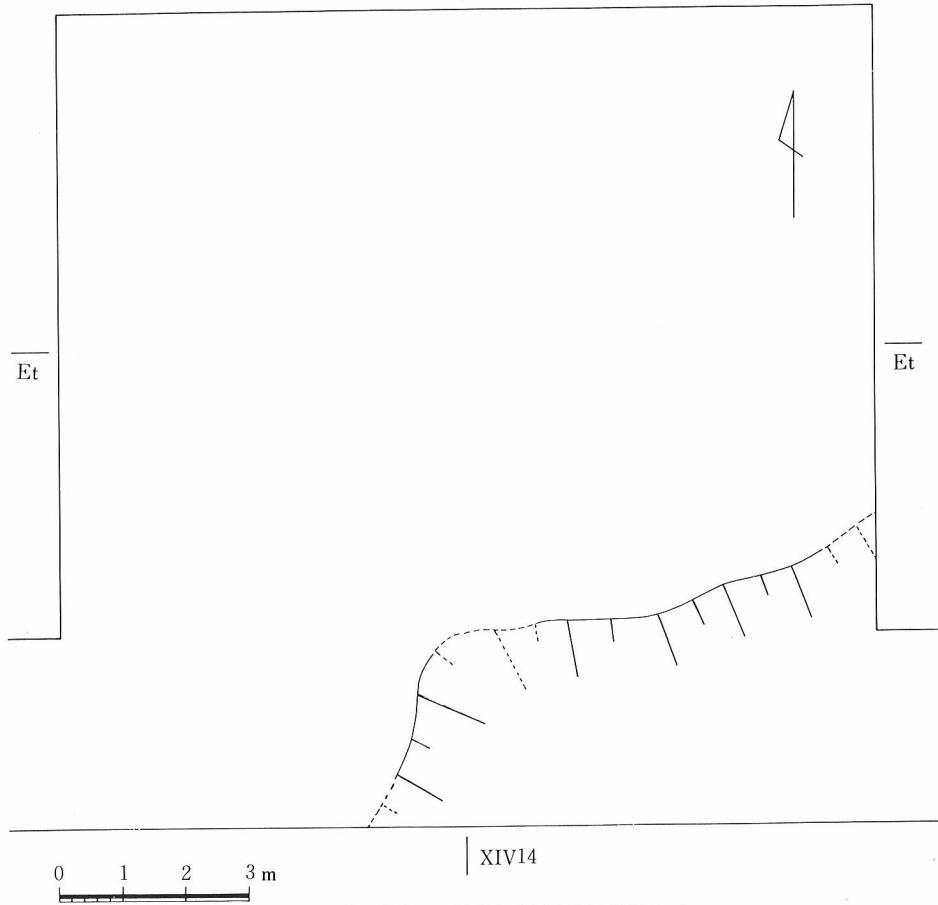
落ち込み1・2・3 (挿図—第33図)

D-7区東側において第2層(灰オリーブ粘質土)上面より検出した緩やかな傾きをもって底部に達する落ち込みである。その堆積の大部分は植物遺体を含む湿潤な粘土であり、4~5 cmほどの厚さで複雑な堆積を示しているが、水田の耕作土と考えられなくもない。さらにこの遺構は断面でもわかるように、3時期の水田面が想定できる。

埋没谷-1 (挿図—第26-33図)

D-7区の南東隅第12層上面でわずかに検出した遺構で、前回南北方向の谷状地形として報告したものと同一と考えられる。今回の調査では、肩が南西から北東方向に検出され、SD-1と併行の谷状の窪地と確認された。谷状地形の堆積土は北の一部が調査区内にかかっただけで3層の堆積が認められたが、基本層位に言及できるものではない。堆積土をみると多量

XIV14



第26図 D7区 埋没谷実測図

の植物遺体が層を成しており、砂層がみられないなど S D - 1 同様、灘みを想定させるものである。遺物の出土は前回の調査では、比較的多かったが、今回は、検出面積が狭いためか、全くなかった。時期的には、前回の調査成果から、S D - 1、S D - 3 よりも新しく、弥生時代の中期中頃から後半と考えられる。

(松岡良憲)

3. 出 土 遺 物

出土した遺物の量は、コンテナ ($53\text{cm} \times 33\text{cm} \times 15\text{cm}$) に約 160 箱と、コンテナに入らないもの（杭）が水槽 ($210\text{cm} \times 95\text{cm} \times 60\text{cm}$) に約 1 杯分ある。遺物は各トレンチの溝から出土したものが多く、縄文時代から近世に至るまでみられ、大半は近世のものである。

遺物の中では、木製品・自然木が圧倒的に多く、コンテナに約 150 箱と水槽に一杯分出土している。この他に、近世陶磁器・瓦がコンテナに 1 箱ずつと、土師器・須恵器・瓦器・弥生土器・土製品が少量ずつあり、緑釉陶器・縄文土器・石器・銭貨などが数点みられる。

以下、簡単にそれぞれの主な遺物について記す。なお法量などの詳細は観察表に示す。

1) 土器・土製品

縄文土器

縄文土器は、D 5 トレンチの S D 23 から 1 点出土している。風化が著しく不明瞭であるが、4 ~ 5 単位の波状口縁をもつ深鉢の頂部で、沈線文をもつ。色調は、褐灰色を呈し、長石・角閃石・雲母・石英など粗い砂粒を多量に含む。縄文時代中期末のものと考えられる。

弥生土器

弥生土器は、D 2 トレンチの第 16 層、D 4 トレンチの第 15 層上面、D 5 トレンチの S D 23、D 7 トレンチの第 15 層から少量出土している。壺、甕などがみられ、いずれも弥生時代中期のもので、生駒西麓産のものが多い。

土師器

土師器は、各トレンチから出土しているが、細片のものがほとんどである。皿、黒色土器、甕、高杯、炮烙、土管などがみられる。皿は口径 10cm のものが多い。いずれも完形品になるものはなく、時期も、平安時代から江戸時代末まで多岐にわたる。

須恵器

須恵器は、各トレンチから出土しているが、細片ばかりで量もわずかである。甕などの体部片がみられる。

緑釉・灰釉陶器

緑釉陶器は、D 3 トレンチの第 2 層、D 4 トレンチの第 10 層から、灰釉陶器、は D 4 トレンチの第 10 層から出土している。いずれも底部のみである。

瓦器

瓦器は、D 1 トレンチの第 9 層、D 5 トレンチの S D 23、D 6 トレンチの第 10 層から小量出土している。D 1・D 6 トレンチからは椀が出土している。いずれも 12 世紀後半のものと考えられる。

近世陶磁器

近世陶磁器は、D 6 トレンチをのぞく各トレンチから出土している。出土量の大半は D 5 トレンチの S D 23 からのもので、他地区のトレンチの出土量は少ない。

陶器は美濃、瀬戸系、唐津系、備前系、京焼系などの各地方のものがみられる。いずれも小片であるが、急須、土瓶、擂鉢、椀などがある。

磁器は染付、白磁、色絵がある。いずれも小片で完形のものはない。染付は磁器全体の9割以上を占め、器形には、椀、椀蓋、猪口、皿、鉢がある。椀は俗に「くらわんか茶椀」と呼ばれるもので、染付の約9割を占め、大部分は伊万里の製品である。手法には江戸時代初期から中期にかけて栄えた印判手や、明治時代になってから出現する銅版手がみられる。他に外面は青磁で、内面は伊万里染付を模倣した三田青磁もみられる。色絵では椀、皿、猪口、白磁では紅入れ、小皿などがある。

土製品

土製品としては土錘、土鈴、人形、円板（方板）状のものなどがみられる。土錘はD4トレンチ、D6トレンチ、D7トレンチの各々第10層から4個出土している。土錘以外はD5トレンチのSD23から出土したものである。円板は土器の二次加工品かもしれない。

2) 瓦

瓦はD5トレンチのSD23からコンテナ1箱分出土しているが、その他のトレンチの出土量はわずかである。小片ばかりであるが、概ね近世のものである。

瓦製二次加工品

瓦の破片の周辺を円形もしくは方形に打ち欠いて成形したのち、周囲を磨いたものが、D5トレンチのSD23より多数出土している。用途は不明だが、冥錢もしくは泥面子と呼ばれているものかもしれない。

3) 木 器

木器は本調査では自然木とともに各トレンチから多量に出土しているが、大半は歴史時代のもので、わずかに弥生時代の遺物がみられる。また近世の竹製の編物も数点出土している。

弥生時代の木器としてはD1・D2トレンチから刺突具状木製品が5本出土している。いずれも先端を尖らせたものだが、その中の1本は柄部になるところを桜の樹皮で巻いている。

歴史時代の木器は、D1~D7トレンチにわたってみられ、杭材、容器（漆器、曲物、桶など）履物（下駄）、紡織具の部材、工具の柄、卒塔婆、形代、その他加工痕をもつ各部材などの木製品が出土している。その中でも量的に多いものは杭材、容器、履物である。

杭材

杭材はD3トレンチをのぞくD1トレンチからD7トレンチにわたって各溝から出土している。いずれも、小枝をはらい、先端を3~5方向から削って尖らせたものである。D5トレンチから一番多く出土している。他地区の杭は近代の護岸工事の時のものと考えられる。

漆器

漆器は、ほとんどが椀であり、他に重箱の底板、お櫃の蓋などが若干みられる。D3トレンチのSD17、D5トレンチのSD23, SD39, D6トレンチのSD28から多く出土している。椀は保存状態の悪いものが多く、斜め上方から圧力を加えられた形で押しつぶされているも

のもある。高台は低いものが多いが、高台の高いものの中には高台裏の削り込みの深いものと浅いものがあり、前者の方がやや多い。漆は内面が朱漆で外面が黒漆のものと、内外面ともに朱漆のものが多く、内面が黒漆で外面が朱漆のものも若干みられる。外面に文様や絵を描いたものの多くは、内面が朱漆で外面が黒漆で、朱漆によって描いている。見込部に文様を描いたものもある。生産地は不明。

曲物

曲物は、杉などのやわらかい材質の木を柾目にそって薄く削ったものを曲げて、合わせ目をカンバ(桜などの樹皮)で縫い合わせたものに、底板をはめ込んだものである。側板はD5トレンチのSD39から、底板はD5トレンチのSD24、SD39、SD50、D6トレンチのSD28から各々数点ずつ出土している。SD39から出土した曲物の側板は、二重になっているものもあり、更に底板をささえるために、内面の下方に二重にした輪をはめ込み、数ヶ所をカンバで留めている。全体に傷みが著しい。

履物

履物は、D2トレンチのSD14、D4トレンチのSD41、D5トレンチのSD23、SD24、SD39、SD42、D6トレンチのSD28、D7トレンチのSD35から出土している。種類は、連歯下駄、差歛下駄、畳下駄、ぱっくり、草履などがある。

連歛下駄には、前歯と後歯を削り出すのが普通であるが、更に前部にも歯を残したものがある。差歛下駄には、差歛の枘が台部の表面にあらわれる露卯下駄と、隠れている陰卯下駄がある。露卯下駄の枘は2個ずつものが多いが、1個あるいは3個ずつものもある。歯は台部より拡がる銀杏歯のものが多い。差歛は、現在も陰卯下駄のものがつくられており、露卯下駄の方が古い。溝のうち、D5トレンチのSD39・SD42には陰卯下駄がみられず、他の溝よりやや古いといえよう。

畠下駄は、SD14から出土しており、木の台部に畠状のものを貼付け、周囲を釘で打ちつけ、鼻緒を皮で巻いたもので、かなり新しい時期のものである。

その他漆塗りのぱっくりや連歛下駄の中に子供用のものもみられる。いずれも江戸時代中葉から大正時代ぐらいのものである。

4) 石 器

石器の出土は少量で、D3トレンチのSD01からサヌカイト製の石鏃2点とD5トレンチのSD23からサヌカイト製の石鏃・石槍それぞれ1点ずつ出土しただけである。いずれも弥生時代のもので、D3トレンチ出土の石鏃は弥生時代中期の土器と共に伴する。

5) 錢 貨

銭貨はD2トレンチから「和銅開珎」が2枚、D1トレンチから「元祐通宝」が2枚出土している。

(曾我恭子・小西優美)

第2表 土器・土製品観察表

D1区 図版一

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀	1	口径 14.7 器高 5.6 高台径 5.8 (径高指数 38.1)	●丸味のあるやや深手の器形。 ●口縁部はほぼ垂直に立ち上がり端部は丸い。 ●高台は断面三角形で、やや高い。 ●見込部に斜格子状暗文。	●口縁部内外面は横ナデ ●体部外面は指押えの後、口縁部から体部下方に及び粗い暗文。内面はナデの後、口縁部に至る19条の暗文。	胎土 精良 焼成 良 色調 灰黒色 楠葉産か (第9層出土)

D2区 図版一・三十七(2・3・4)

土師器	皿	2	口径 10.2 器高 1.2	●平坦な底部から屈曲して外反しながら外上方に伸びる口縁部。端部はさらに屈曲して上方につまみ上げている。	●口縁部内外面は横ナデ。 底部外面は指押えの後ナデ、内面はナデ。	胎土 精良 焼成 良 色調 淡黄色 (第9層出土)
		3	口径 9.0 器高 2.2	●丸味のある底部から内存弓しながら伸びる口縁部。端部は上方につまみ上げ、薄くなる。	●口縁部内外面は横ナデ。 ●底部外面は指押え、内面はナデ。	胎土 精良 焼成 良 色調 淡褐色 (第11層下部出土)
弥生土器	壺	4	口径 不明 器高 5.6 (現存値) 底径 7.4	●壺の底部のみ残存。 ●底部から底裏面にかけて黒斑をもつ。	●外面はヘラ磨き、底裏面に近い部分はナデの上にヘラ整形 ●内面は摩滅のため不明。	胎土 角閃石・くされ礫が多い。 焼成 良 色調 灰綠褐色 (第16層出土)

D3区 図版一

緑釉陶器	不明	5	口径 不明 器高 1.4 (現存値) 高台径 5.2	●高台は外方へ張り、端面に段をもつ。輪高台。	●内外面はナデ ●全面に施釉	胎土 精良 焼成 良 色調 緑灰色 釉調 暗灰綠色 (第2層出土)
------	----	---	-------------------------------------	------------------------	-------------------	---

D4区 図版一・三十七(6・9)

土師器	皿	6	口径 9.4 器高 1.1	●(2)と同じ形態であるが、口縁部は(2)に比べて強く外反する。	●口縁部内外面は横ナデ。 ●底部外面は不調整、内面はナデ。	胎土 精良 焼成 良 色調 乳褐色 (第10層出土)
緑釉陶器	不明	7	口径 不明 器高 1.1 (現存値) 底径 5.8	●高台は切り高台で、やや上げ底気味。	●全面に施釉	胎土 精良 焼成 良。軟質。 色調 淡黄色 釉調 淡灰綠色 (第10層出土)
灰釉陶器	椀	8	口径 不明 器高 1.6 (現存値) 高台径 6.8	●高台はほぼ垂直につき、端部はやや外方へ張り、断面三角形を呈する。輪高台。 ●内側面に稜を有する。	●内外面ロクロナデ ●貼付け高台	胎土 精良 焼成 良 色調 灰白色 (第10層出土)
土師器	高杯	9	口径 不明 器高 6.6 (現存値)	●脚柱部は八面に面取り。 ●中空部は円形状を呈する。	●全面摩滅のため調整不明	胎土 精良 焼成 良 色調 乳赤褐色 (第10層出土)
	甕	10	口径 26.0 器高 3.4 (現存値)	●体部はほぼまっすぐに立ち上がり「く」の字状に屈曲して口縁部となる。 ●口縁端部は内側にわずかに肥厚し、外傾する面をもつ。	●口縁部・頸部は内外面ともに横ナデ ●体部外面はナデ、体部内面は摩滅のため調整不明。	胎土 精良 焼成 良 色調 黄橙～淡灰褐色 (第10層上層出土)

D 4区 図版一

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	土 錐	11	長さ 4.5 (現存値) 最大径 1.2 孔径 0.25	●両端が細くなる管形状。	●外面ナデ。平滑だが、わずかに指頭圧痕が残っている。	胎土 精良 焼成 良 色調 (1)黄灰褐色 (2)暗黃灰色 (第10層出土)
		12	長さ 4.4 (現存値) 最大径 1.25 孔径 0.3			
弥生土器	甕	13	口径 14.5 高 22.5 (現存値)	●口縁部はゆるやかに外反し、端部は面をもつ。 ●胴部はふくらみをもち、口径より大きくなる。 ●底部は欠損。	●口縁部内外面は横ナデ。 ●胴部外面下半部をヘラ削りの後全体にヘラ磨き。内面は全体にハケ目調整。 ●内面胴部上位に指頭圧痕が残る。	胎土 雲母・角閃石を含む。 焼成 良 色調 黒褐色～赤褐色 全面に煤が付着。 (第15層上面出土)

D 5区 図版二・四十(15・18・19・20)

近世	白磁紅入れ	14	口径 4.6 器高 1.4 高台径 1.1	●浅い椀形を呈す。 ●口縁部は肥厚し、端部は水平な面をなす。 ●高台は小さく、断面三角形。	●外面は貝殻状の凹凸をつける。 ●外面体部中位以下無釉	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、白色。 (SD 23出土)
	白磁盃	15	口径 5.4 器高 1.55 高台径 3.4	●体部は外上方へ直線的に開く。 ●口縁端部は薄くなる。 ●底部は平坦 ●高台は体部の直下にはば垂直につく。断面四角形	●内面が平滑であるのに対し、 ●外面はやや凹凸が見られる。 ●口縁部を中心に粗い貫入。 ●高台・高台内に釉がけむら。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、白色。 (SD 23出土)
	白磁紅入れ	16	口径 6.2 器高 1.6 高台径 1.6	●14と同じ形態であるが、口径が大きい。	●外面に蛸唐草文の凹凸をつけ る。 ●外面体部中位以下は無釉	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、白色。 (SD 23出土)
陶磁器	染付猪口	17	口径 5.8 器高 2.1 高台径 2.6	●浅い椀形 ●口縁端部は薄くなる。 ●高台は小さく、断面三角形。	●口縁部外面に呉須にて筆文を施す。 ●脣付のみ無釉で橙色を呈す。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、褐緑色～灰青色 (SD 23出土)
	陶器猪口	18	口径 6.6 器高 2.7 高台径 3.0	●浅い椀形。 ●口縁部はやや内傾し、端部は丸い。 ●高台は断面三角形。	●底部外面はロクロ削り。 ●外面口縁部と内面全体に施釉。	胎土 やや粗 焼成 良 色調 素地、灰色。 釉、緑灰色。 (SD 23出土)
染付	19	口径 8.6 器高 2.9 つまみ径 3.45	●口縁部と天井部の境界に棱をもち口縁部は外下方に直線的に伸びる。 ●つまみ部は上方に垂直に立ち上がり、端部は薄くなる。	●呉須にて施文。外面は麻葉文。 口縁部内面は幾可文。見込部は井桁文。 ●つまみ部端は無釉	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、淡青色～褐緑色 (SD 23出土)	
	椀蓋	20	口径 9.8 器高 3.1 つまみ径 4.2	●平坦な天井部から丸味をもって下方に短く伸びる口縁部。 ●つまみ部は外上方に開く。	●呉須にて施文。外面は草花文。 口縁部内面は花菱格子文。呉須の発色はにぶい。 ●つまみ部端部は無釉	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、褐緑色～灰青色 (SD 23出土)

D5区 図版二・四十(25・26)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
近世付陶碗	染付	21	口径 10.4 器高 5.2 高台径 2.8	●腰部から内彎して立ち上がる体部、口縁部。口縁部はわずかに外反する。 ●高台はほぼ垂直につく。	●呉須にて施文。外面は秋草文。口縁部内面は幾可文。見込部は界線文の中に右寄りに縦に『大化』の二文字が見える。 ●疊付のみ無釉	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、鮮かな 藍青色。 (SD23出土)
		22	口径 不明 器高 3.1 (現存値) 高台径 4.2	●口縁部を欠損 ●高台はやや外方に開く。	●呉須にて施文。外面は雲状の文様。見込はすみれ文。 ●疊付のみ無釉	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、淡青色 ~暗緑色。 (SD23出土)
	付	23	口径 10.4 器高 5.2 (現存値) 高台径 不明	●厚手で、丸味のある器形。 ●口縁部は垂直に立ち上がる。	●呉須にて施文。外面は雲状の文様。見込部は五弁花文。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、淡青色 ~暗青色。 (SD23出土)
		24	口径 不明 器高 2.0 (現存値) 高台径 3.6	●口縁部・体部を欠損。 ●かなり薄手で、高台内は特に薄く削り込んでいる。 ●高台はほぼ垂直につく。	●呉須にて施文。見込部はアルファベットのAとTを組み合わせた様な文様。 ●高台に釉がけむら。 ●他のもののように透明感がなく、全体に白くにぎっている。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、白色。 呉須、青色。 (SD23出土)
	碗	25	口径 不明 器高 2.7 (現存値) 高台径 4.1	●口縁部・体部を欠損。 ●底部はかなり厚手である。 ●高台は垂直につく。	●呉須にて施文。外面は網目文。内面は二重丸の中に九弁の菊文。高台内に花押状の記号。 ●疊付は無釉で淡褐色を呈し、一部に砂が付着。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、青色。 (SD23出土)
		26	口径 不明 器高 3.7 (現存値) 高台径 4.3	●口縁部を欠損。 ●薄手でやや大ぶりの碗。 ●高台は外方へ開く。	●呉須にて施文。外面は雪輪連鎖文。 ●疊付のみ無釉	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、青色。 (SD23出土)
磁器	白磁皿	27	口径 9.7 器高 2.3 (現存値)	●底部を欠損。 ●直線的に外上方へひろがる体部、口縁部。	●釉がけした後、口縁部内面に釉を削り取って文様(アヤメ科の花)を描いている。 ●内面下方は無釉。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、白地。 (SD23出土)
	白磁皿	28	口径 10.4 器高 2.4	●直線的に外上方へひろがる体部、口縁部。 ●底部は平坦。	●外面は口縁部をクロコナデ、体部・底部をロクロ削り。 ●内面のみ施釉。貫入が見られる。 ●底部内面にめあとが残る。 ●口縁部外面の釉と素地の境界が橙色を呈す。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、緑白色。 (SD23出土)
	青磁碗	29	口径 不明 器高 2.6 高台径 4.6	●口縁部・体部を欠損。 ●高台は高く、やや外方にひろがる。 ●底部は厚手である。	●外面ロクロ削り。 ●高台内は無釉で、高台に釉がけむら。	胎土 やや粗 焼成 良 色調 素地、灰白色 釉、明緑灰色 (SD23出土)
	陶器茶碗	30	口径 残存高 12.7 3.8	●底部を欠損。 ●浅い円筒状の馬蓋形の茶碗。	●内面と口縁部外面に天目釉を施釉。(美濃・瀬戸系)	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、灰色。 釉、黒褐色。 (SD23出土)

D5区 図版二・三十七(31)・四十(42)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土師器	甕	31	口径 残存高 4.0	●肩部で屈曲して、外反しながら外上方へ伸びる口縁部。 ●胸部以下を欠損。	●口縁部内外面は横ナデ。 ●体部外面は調整不明、内面は指押え。	胎土 砂粒が多い。 焼成 良 色調 赤褐色～暗褐色。 (SD23出土)
	大甕	32	口径 残存高 底径 29.8 21.0	●肩部より上を欠損。 ●体部は球形状。 ●底部径は大きく安定した器形。 ●器壁は厚い。	●体部外面は上半部をハケ目調整、下半部をヘラ削り。 ●体部内面は上半部を板ナデ、下半部を強い横ナデ。	胎土 砂粒が多い。 焼成 良 色調 橙褐色。 (SD23出土)
瓦質土器	炮	33	口径 残存高 2.5	●浅いレンズ状の体部から屈曲して上方へ伸びる口縁部。外面の体部と口縁部の境界に稜をもつ。 ●内面にぶい稜をもつもの(33)ともないもの(34・35)がある。 ●34は口縁端部が外方に肥厚する。	●内外面ともに横ナデ。	胎土 精良、砂粒を少量含む。 焼成 良 色調 淡黄褐色。 小片の為、口径の計測は不可。 (SD23出土)
	焰	34	口径 残存高 2.7			
須恵製品	土管	35	口径 残存高 3.3			
	土管	36	口径 残存高 13.2 4.5	●現在の土管とはほぼ同形である。 ●体部の直径は10cm前後で、外方へひろがりながら口縁部へ続く。 ●体部と口縁部の境界は屈曲しており、内面は稜をもつ。 ●口縁部は内彎しながら外上方へ伸び、端部は内傾して凹みをもつもの(36)、平坦面をもち外傾するもの(37)・(38)がある。	●内外面ともに横ナデ。 ●(36)・(37)は外面にハケ目が残る。 ●内面に粘土の継目が残るもの(37)、強いナデを施しているもの(38)がある。	胎土 砂粒が多い。 焼成 良 色調 (36)灰白色 (37)乳褐色 (38)灰黒色 (SD23出土)
近世陶磁器	染付椀	37	口径 残存高 13.0 4.6			
	染付椀	38	口径 残存高 12.6 4.5			
	不眞	39	一辺 2.2 2.6 4.0 厚さ 1.7	●直角三角形の三角柱状を呈す。 ●五面とも平滑である。	●全面鋭利な刃による削り。	胎土 砂粒が多い。 焼成 良 色調 灰色。 (SD23出土)
近世陶磁器	青磁碗	40	口径 残存高 高台径 不明 3.7 4.3	●口縁部を欠損。 ●腰部から丸味をもって立ち上がり外上方へ伸びる体部。 ●高台はやや低く断面三角形。	●呉須にて施文。外面は柿の図。 ●高台外面に釉かけむら。 ●疊付のみ無釉。 ●底部内面はドーナツ状に釉をかき取っている。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、青黒色～暗青灰色。 (SD24出土)
	青磁碗	41	口径 残存高 高台径 11.6 4.5 不明	●やや大ぶりの茶碗 ●内彎しながら外上方へ立ち上がる体部・口縁部。	●外面に青磁釉を施釉 ●口縁部内面は呉須にて花菱格子文を施す。 ●三田育磁か。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、明綠灰色(外面) 青白色(内面) 呉須、暗青色 (SD39出土)
	染付椀	42	口径 残存高 高台径 不明 4.5 5.2	●口縁部欠損。 ●厚手の平坦な底部から屈曲して立ち上がり、内彎しながら伸びる体部。	●呉須にて施文。外面は波状の縦線で側面を三方に分割し、草文を描く。見込部は芝文。	胎土 精良 焼成 良 色調 素地、白色。 釉、青白色。 呉須、暗灰青色～淡灰青色。 (SD39出土)

D6区 図版三・三十七(43・45)

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
瓦器	椀	43	口径 15.4 器高 5.25 高台径 4.2 (径高指数 34.1)	●丸味のある底部から直線的に伸びる体部、口縁部。端部は丸い。 ●高台は低く、ナデにより外端部に凹みをもつ。断面四角形。 ●見込部にジグザグ状の暗文。	●口縁部内外面は横ナデ。 ●体部外面は指押えの後、口縁部から体部上位にかけて粗い暗文。内面はナデの後、口縁部に及ぶ19条の暗文。	胎土 精良 焼成 良 色調 黒灰色。 和泉産か。 (第10層出土)
土師器	土錐	44	長さ 4.3 最大径 1.15 孔径 0.2	●両端が細くなる管形状。 ●孔はまっすぐに通っている。	●外面はナデ。 ●平滑だが、指紋が残る。	胎土 精良。 焼成 良 色調 淡褐色。 (第10層出土)
	皿	45	口径 11.5 器高 2.15	●口縁部は直線的に外上方へ伸び、端部は上方につまみ上げ、薄くなる。 ●底部は平底。	●口縁部内外面は横ナデ。 ●底部外面は不調整。内面はナデ。	胎土 精良 焼成 良 色調 乳褐色。 (SD 28出土)

D7区 図版三・三十七(46・50)・三十八(52~54)

土師器	黑色土器椀	46	口径 14.4 残存高 4.7 高台径 不明	●直線的に外上方へ伸びる体部からやや立ち上がる口縁部。端部はわずかに外反し、内面に沈線をもつ。 ●底部を欠損。	●口縁部内面は横ナデ。 ●外面は口縁部から体部にかけてヘラ削りの後、粗いヘラミガキ。 ●体部内面ナデの後ヘラミガキ	胎土 砂粒が多い。 焼成 良 色調 黒色(外面) 灰褐色(内面) (SD 35出土)
土師器	土錐	47	長さ 3.4 最大径 0.9 孔径 0.2	●両端が細くなる管形状。 ●孔はまっすぐに通っている。	●外面はナデ、平滑である。	胎土 砂粒を少量含む。 焼成 良 色調 灰黄褐色。 (SD 10層出土)
	錐	48	長さ 3.6 最大径 1.0 孔径 0.2			
弥生土器	壺	49	口径 12.0 残存高 3.0 底径 不明	●口縁部はゆるやかにひろがり、端部は下方に肥厚する。下端部に不規則な刻み目文を施す。	●外面はナデ。 ●端面は強い横ナデ。 ●内面は摩滅のため不明。	胎土 角閃石・くさり礫を含む。 焼成 良 色調 暗褐色。 (第15層出土)
		50	口径 不明 残存高 8.3 底径 不明	●直線文と扇形文の組み合わせによる流水文を外面に描いている。	●外面は8条からなる櫛状工具による施文。 ●内面はナデ及び指押え。	胎土 角閃石・雲母を含む。 焼成 良 色調 褐灰色(外面) 暗黄灰色(内面) (第15層出土)
瓦	丸瓦	51	現存長 15.0 現存巾 10.5 厚さ 2.2	●破片のため、全体の形状は不明。 ●先端部は薄くなる。	●表面は縦方向の削り。 ●裏面は縦方向の粗い削りで、無調整に近く、先端部を周縁にそって削り込んでいる。	胎土 砂粒が多い。 焼成 良 色調 灰黒色 (断面灰色) (SD 35出土)
瓦製	冥	52	直径 6.2 孔径 0.8 厚さ 1.6	●(52)はドーナツ形状を呈するが、半分は欠損。 (53)は円形状を呈する。 ●(54)は長方形形状を呈する。	●瓦片の周辺を打ち欠いて成形した後、周囲を磨いている。 ●(48)の孔は錐状のもので、表裏両面から穿っている。 ●(50)の一側面はもとの面を利用している。	胎土 砂粒を含む。 焼成 良 色調 灰黒色 (表裏面) 灰色(側面) (SD 23出土)
		53	直径 4.15 × 3.85 厚さ 1.2			
	錢	54	一辺 3.8 × 3.4 厚さ 1.2			

第3表 木器観察表

D1区(1~4)・D2区(5~20) 図版四・四十一(1・2・4・5・10・11・14~17・19)

種類	番号	法量(cm)	形態の特徴	備考
刺突具	1 2 5 ※	長さ 22.6 最大幅 0.65 0.8	●全面を縦方向に削る。両端を徐々に細く尖らせ、先端部は下端に比べて鋭く削り出す。削りの工具痕が明瞭。 ●1~4の断面は、円形~楕円形で、5の断面は多面形。 ●2は柄部に桜の樹皮を三重に巻く。 ●1は先端に近い部分に、2は中央部に焼けたような痕跡がある。	D1トレンチ 第15層出土(1・2・3) 第16層出土(4) D2トレンチ 第15層出土(5)
食膳具	蓋	6 口 径 厚さ 1.3	●正円形で周縁から約1.8cm入ったところに、巾3mmを溝をもつ。受部がつくと考えられる。 ●両面共黒漆塗り。	S D14 第4層出土 ●6はお櫃の蓋か
容器	桶	7 長さ 幅 厚さ 44.0 8.1 1.6	●ほぼ均一の厚みをした内彎気味の側板の一部。下端部は腐蝕。 ●外面の上端部から8cm入った位置と、下端部から3cm入った位置にタガの痕がみられる。 ●上端部に近いところに鉄釘が遺存する。	
器	樽	8 長さ 最大幅 厚さ 33.0 4.0 1.0	●下方へ向って次第に巾狭になり、断面が内彎する側板の一部 ●内面上方には蓋のあたりの痕が、下方には底板をはめ込む痕がみられる。 ●外面上方には3本、下方には1本のタガの痕が残る。	●8の内面に有機物が付着
部材	楔(?)	9 長さ 幅 8.8 1.6	●断面が方形をした頭部から、断面が円形のつくり出し部をつくり、先端まで徐々に尖り気味に削り出す。 ●削りの工具痕が明瞭に残る。	
紡織具(?)	布巻具	10 長さ 幅 厚さ 35.6 2.1 1.8	●断面がかまぼこ形をした布巻具。 ●表面の両端から1.2cm入った位置に「く」の字形の抉り込み、他面は一端の1.4cm残した位置に表面より深く、更に6.6cm入った位置と他端から8cm入った位置に「く」の字形の抉り込みを入れる。 ●表面は丸く、他面は平らに削り出す。	第8層出土
履物	下駄	11 長さ 台幅 高さ(現1.8)	●隅切りした長方形の子供用の連歯下駄。台裏は平坦。 ●歯は両歯共、内側を花形に削り出す。 ●台部は大人用の下駄に比べると厚みが薄い。前アゴはやや厚い。 ●前壺はほぼ垂直に、後壺は外上方から内下方へ穿つ。裏面にワラを燃った緒と釘が遺存する。	SD14 植物遺体層出土
		12 長さ 台幅(現4.0) 高さ(現2.2)	●長円形をした子供用のぼっくり下駄。前部は前のめり気味につくる。後部は欠損。 ●台裏を隅丸方形に削り、後壺をほぼ垂直に穿つ。前壺は不明。	第2層出土
		13 長さ 台幅 高さ(現3.2)	●隅丸方形の連歯下駄。台裏は平坦。 ●台裏に歯を削り出した工具痕が残る。 ●前壺は垂直方向に、後壺は外上方から内方へ向けて穿つ。	(北壁)出土
	駄	14 長さ 台幅 高さ(現2.6)	●隅丸方形の連歯下駄(?)。前部は前のめり気味。 ●台裏は後壺を穿つため方形に削り抜いている。 ●前壺はほぼ垂直に穿つ。	第4層出土
		15 長さ 台幅 高さ(現2.9)	●長円形をした台表に畳を貼り付けた下駄。「U」字形の釘が残る。前部はやや前のめりになる。 ●台裏のやや後よりの位置を、15は両側を花形に16は前側を花形に後側をまっすぐに削る。	第3層出土
		16 長さ 台幅 高さ(現2.3)	●前壺は台裏の方を大きくあけ、後壺は台表と同じ大きさで、15はほぼ垂直に、16は外上方から内下方に穿つ。壺に繩を燃った緒や15は皮も遺存する。 ●15の台裏の後部は非常にすり減っている。	植物遺体層出土

* (1~5)は弥生時代出土遺物、(6~120)は歴史時代出土遺物。 (現)は現存値、(推)は推定値を表わす。

D 2 区 図版五・四十一(19)

種類	番号	法量(cm)	形態の特徴	備考
履物 駄	下	17 長さ 20.4 台幅 8.2 台の厚さ 1.9	● 開丸方形をした陰卯下駄。断面は舟形。 ● 台裏に差歎の溝をもつ。両歎とも欠く。 ● 前・後歎ともほぼ垂直に穿つ。 ● 長円形をした陰卯下駄。台裏は舟底形。18の底は稜が明瞭に残る。	SD 14 植物遺体層出土
		18 長さ 20.9 台幅 8.8 台厚 (現 2.6)	● 台裏に差歎の溝をもつ。18は後歎の一部が、台部に挿入した部分のみ遺存。19は前歎が台部近くまで残っている。20は両歎が下方で開き、台幅より広くなる。18・19も同じように考えられる。 ● 前歎を18・19は垂直に、20は内上方から外下方へ穿つ、後歎を18は歎の後側へ垂直に、19・20は前側に外上方から内下方へ穿つ。	
	19	長さ 18.0 台幅 8.0 高さ (現 3.0)	● 前歎を18・19は垂直に、20は内上方から外下方へ穿つ、後歎を18は歎の後側へ垂直に、19・20は前側に外上方から内下方へ穿つ。	第4層出土
	20	長さ 20.0 台幅 (推 8.8) 高さ (現 4.8)	● 前歎を18・19は垂直に、20は内上方から外下方へ穿つ、後歎を18は歎の後側へ垂直に、19・20は前側に外上方から内下方へ穿つ。	植物遺体層出土

D 3 区 図版六・四十二(23・25)

食膳具	漆器椀	21	21は計測不能	● 21は体部破片のみ遺存。22は一本からロクロ挽きした厚手の椀。	SD 17 植物遺体層出土
		22	口径 (現10.7) 器高 (現 5.2) 高台径 (後 5.4)	● 22の高台は高く削り出し、高台裏も深く(1.8cm)削り込む。 ● 内面は朱漆。 ● 外面は黒漆を塗布した後、朱漆で模様を描く。21は『丸に違い鷺の羽』様の模様を描く。	
容器	桶		長さ 25.4 最大幅 7.5 厚さ 1.1	● 直径が約34cmの円形容器の底板の組み合わせ部材の一部。 ● 周縁は丸味をもつ。	植物遺体層出土
組み合せ材		24	長さ 15 厚さ 17.3 1.7	● 上面が中央にむかうに従って高くなり、中央部に長方形の枘穴をもつ。下面是平ら。 ● 楠穴の周辺部は他材との摩擦痕か角がとれ、丸味をもつ。	
紡織具	刃木製形品	25	長さ 30.6 幅 4.3	● 断面がかまぼこ形をした部材。両端に近い位置にそれぞれ2孔1対を穿つ。 ● 両端を斜めに削ったノミの工具痕があり、釘のようなものを打ちつけている。	灰色中粒砂層出土
その他	ヘ木ラ製状品	26	長さ 14.6 幅 4.8 厚さ 1.1	● 両面を平滑に削り出した板材。一端はまっすぐ切断し、先端部の方は丸くヘラ状に両面から削り出す。 ● 先端部の工具痕が明瞭に残る。	SD 17 植物遺体層出土

D 4 区 図版六

容器	柄	27	長さ (現18.4) 幅 1.6 厚さ 1.3	● 断面がかまぼこ形をした棒状の柄。一端は折損するが、他端の方に相口の仕口を設ける。 ● 側面の一部に朱漆が残る。	SD 41 第4層出土 ● 27は手桶の柄か
その他	板材	28	長さ 33.8 幅 5.6 厚さ 0.8	● 表裏面を平滑に仕上げた板材。先端がやや薄くなる。 ● 一側面は「V」字形の溝をもつ。 ● 下端部に釘が遺存する。	
	棒材	29	長さ 9.2 最大幅 4.5	● 両端を切断し、下端は断面を六角形に面取りしているが、他端は断面を円形に削り出した棒材。	SD 03 出土
その他	板材	30	長さ 25.6 幅 11.7 厚さ 2.7	● 両端を切り折りした板材。 ● 一面は平らであるが、他面は不規則な溝状を呈す。	
	板材	31	長さ (現18.4) 幅 1.9 厚さ 0.8	● 両面を平滑に削った板材 ● 先端は折損。他端は薄く一面を剥ぐ。	SD 41 第4層出土

(現)は現存値、(推)は推定値を表わす。

D 4 区 図版六・四十二(32)

種類	番号	法量(cm)	形態の特徴	備考
履物	下駄	32 長さ 20.8 台幅 9.0 高さ(現 2.3)	●隅丸方形をした連歯下駄。33は子供用。 ●32は両歯を台部からなめらかに削り出す。33は両歯の外側をほぼ直角に、内側を花形に削り出す。 ●前縁はほぼ垂直に、後縁は外上方から内下方へ穿つ。	SD41 第4層出土
		33 長さ(推 13.4) 台幅 8.3 高さ(現 2.2)		
	駄	34 長さ(現 20.0) 台幅(現 7.8) 高さ(現 3.2)	●隅丸方形をした陰卯下駄、前後のアゴが割れているが、台裏は舟底形と推測される。 ●差歯を欠くが、差歯の溝はやや中央部が細くなる。	

D 5 区 図版七・四十二(40)・四十三(42)

食膳具	漆器碗	35 口径(現 12.0) 器高(現 5.2) 高台径(現 2.1)	●一本からロクロ挽きした薄手の椀。 ●高台裏は深く削り込む。 ●内外面に朱漆塗り。	SD23 中粒砂層出土
	漆器蓋	36 口径計測不能 器高厚さ 0.6	●薄い板。梢円形になると想られる。 ●黒漆塗り。	● 36 は曲物の蓋か
容器	桶	37 長さ 14.0 幅 7.0 厚さ 0.8~1.25	●下方に向って次第に巾が狭くなり、厚みも薄くなる側板。上端部は丸味をもつ。下端部は傷みが激しい。 ●横の断面は内弯する。	SD23 腐植土出土
		38 長さ(現 15.8) 幅(現 4.8) 厚さ 0.5~1.2		小砂層出土
	桶	39 長さ(現 25.1) 幅 7.7 厚さ 0.5	●薄い板材。両側面に目釘穴をもつ。底板の一部と考えられる。 ●一端は丸味をもつ。他端は傷みが激しい。	中粒砂層出土
工具	柄	40 長さ 15.2 幅 2.5 厚さ 2.0	●両端に工具を挿入する孔をもち、断面は方形。 ●一端は切断した面に $0.2 \times 0.9\text{cm}$ の方形の孔を斜めに深さ約 1cm まで穿つ。他端は表裏になる二面を少し尖らし気味に削り $0.7 \times 2.4\text{cm}$ の方形の孔を、徐々に狭く、深さ約 5.8cm まで穿つ。尖らし気味に削ったところは、工具をしめつけて固定させるものを探め込んだと考えられる。 ●柄の中央部には『×』印の刻印が三面にはっきり残り、他の一面には『/』のみが残る。	砂層出土
その他	円板状木製品	41 直径 4.5×5.1 厚さ 0.5~0.8	●厚みが不均等であるが、ほぼ円形をした板。 ●42は中央に方形の孔を穿つ。	腐植土層出土
		42 直径 6.7×6.4 厚さ 0.25~0.5		少砂層出土
		43 直径 7.6 厚さ 1.0		暗青灰色粘土層出土
	板材	44 長さ(現 21.2) 幅 2.9 厚さ 0.8	●表面を平滑に仕上げた板材。 ●両端の角がやや丸味をもつ。	SD23 中粒砂層出土
	角材	45 長さ(現 24.4) 幅 0.8×0.7	●断面が方形の角材。一端は丸味をもつが、他端は切損。	腐植土層出土
	板材	46 長さ(現 12.8) 幅(現 1.9) 厚さ 0.2~0.4	●薄い板材。3mm 前後の方形の孔を 1~15 cm 間隔に穿つ。両端、両側面とも切損し、厚みは不均一である。	
	角材	47 長さ 20.4 幅 2.0 厚さ 1.1	●断面が方形の角材。一端をまっすぐに、他端を斜めに切断している。	中粒砂層出土

(現)は現存値、(推)は推定値を表わす。

D5区 図版七~九・四十三 (55·69·74)

種類	番号	法量(cm)	形態の特徴	備考
履物	下駄	長さ 23.8 台幅 8.2 高さ (現 2.2)	<ul style="list-style-type: none"> 48は長円形。49は隅丸方形をした連歯下駄。台裏は平坦で、48の前部はやや尖り気味。 歯はそれぞれ台裏から直角に削り出す。歯はよくすり減っている。 前壺は垂直に穿つ。後壺は46が歯の内側の位置に、外上方から内下方へ、49が歯の外側にはば垂直に穿つ。48の壺は丸くて小さい。49の壺は台表を丸く、台裏を方形に穿つ。 	SD23 腐植土層出土
		長さ 21.2 台幅 (推 8.8) 高さ (現 2.4)		
	駄	長さ (現 13.8) 台幅 6.8 高さ (現 3.0)	<ul style="list-style-type: none"> 隅切りした長方形の陰卯下駄。台裏は舟底形。後部を欠く。 台裏に歯を差す溝をつくる。他の例に比べると溝の巾は広い。 前壺はほぼ垂直に穿つ。 	中粒砂層出土
食器	漆碗	口径 11.5 器高 4.0 高台径 5.6	<ul style="list-style-type: none"> 完形になるのが少ない。51は小椀 一本からロクロ挽き。54の厚手の椀の他は薄手。 高台は54の高台裏が深く削り込まれて高い。51·56·57は低い。 51~54·57は内面に朱漆、外面に黒漆を塗る。55·56は内外面に朱漆、58は内面に黒漆、外面に朱漆を塗る。 54の体部外面に暗文状に草花の文様、55は花文を描く。 	SD24 出土 ●漆器椀は横木取りが多い。
		口径 計測不能 器高 5.7 高台径 (54·56のみ)		
膳具	曲物	底径 13.9 厚さ 0.9	<ul style="list-style-type: none"> 円形をした薄い底板、周縁は面取りしている。 裏面に一定方向の削り痕があり、やや内巻気味。 	●60は鍋の蓋か。
	蓋	口径 17.0 厚さ 0.6	<ul style="list-style-type: none"> 円形をした薄い板。把手をつけるため、中心に巾0.7cm、深さ0.1cmの溝をつけ、不規則に穿孔している。 	
	柄杓	底径 5.7 厚さ 0.5	<ul style="list-style-type: none"> ほぼ正円形をなす底板。やや外側にそり気味。 表面は平滑に、裏面は割り裂いたままにしている。 周縁は面取りをした工具痕がみられる。 	
農具	砧状木製品	長さ (現 11.1) 槌部 最大径 5.4 握部 最大径 2.5	<ul style="list-style-type: none"> 断面がほぼ円形。槌部、握部の大部分は折損。 槌部から握部をつくりだすための鋸による切断痕が明瞭に残る。 	
履物	下駄	長さ 22.5 台幅 9.4 高さ (現 7.0)	<ul style="list-style-type: none"> 63·64は隅切りした長方形、65は長円形の露卯下駄。台裏は舟底形。 台裏に歯を差す溝と、台表まで貫通する枘穴を63·64は2個、65は3個ずつ穿つ。 歯は上部に出柄をもち、下方へ開いて台幅より広くなる。 前壺は、63·65はほぼ垂直に、64は内上方から外下方へ穿つ。 後壺は内上方から外下方へ穿つ。 	
		長さ 21.4 台幅 8.4 高さ (現 3.3)		
		長さ 21.0 台幅 8.1 高さ (現 6.0)		
	駄	長さ 13.4 台幅 5.6 高さ (現 3.3)	<ul style="list-style-type: none"> 隅切りした長方形の子供用の連歯下駄。台裏はほぼ平坦。 歯を台裏からほぼ直角に削り出す。工具痕が残る。 前・後の壺はほぼ垂直に穿つ。 	
膳具	漆器蓋	口径 10.5 器高 3.0 高台径 5.5	<ul style="list-style-type: none"> 一本からロクロ挽きした蓋。高台は低い(0.5cm)。 内外面朱漆塗り。 	SD39 腐植土層出土
		口径 計測できるものは少い。 高台径		
	漆器椀	口径 12.6 体部高 3.0	<ul style="list-style-type: none"> 完形のものが少ない。椀・小椀がある。 一本からロクロ挽きしており、薄手のもの、厚手のものがある。 高台は低いものが多いが、70·75·76は高台裏を深く削り込む。 71·74~76の底部は体部よりも分厚い。71は体部下位に棱をもつ。 68·70·74は内外面朱漆塗り。69·75·76は内面朱漆、外面黒漆塗り。74·76は黒漆の模様を外面に描く。71は外面に黒漆の上に赤漆。72は内面に黒漆の上に赤漆、見込み部に模様、外面は朱漆塗り。73は内面朱漆の上に黒漆、外面に朱漆を塗る。 	
		口径 15.2 体部高 5.4		
		口径 14.2 体部高 5.8		

(現)は現存値、(推)は推定値を表わす。

D 5 区 図版九・十・四十三(86)

種類	番号	法量(cm)	形態の特徴	備考
容器	漆器片 77	長さ(現2.5)	<ul style="list-style-type: none"> 一端に出納をもつ板材。他端は折損。 朱漆塗り 	SD39 出土 • 77は重箱の側板か • 78は重箱の底板か
	箱 78	長さ17.2×(現14.0) 厚さ0.4	<ul style="list-style-type: none"> 一辺を欠くが正方形になると考えられる薄板。 周囲に釘穴をもつ。釘穴は0.2cm角の四角形。一部、木釘が遺存。 内外面に不定方向の工具痕が残る。 黒漆がごくわずかに残る。 	
	曲物 79	底径10.8 厚さ0.7	<ul style="list-style-type: none"> 円形状の底板。 79は部分的に焼けた痕がある。 	
	80	底径12.1×11.1 厚さ0.9×1.3		
	81	直径19.5 高さ(現2.5)	<ul style="list-style-type: none"> 曲物の側板。板目に沿って、81は1.5cm前後に削った板を二重に、82は2mm前後の板を一重に円形に曲げ、桜皮で重なり部を縫合。 内面下部に、底板を受けるためか、1cm巾の板を二重にし、8カ所ほどを桜皮でとじ合わせる。 	
	82	直径19.7 高さ(現5.5)		
	蓋 83	口径18.5 厚さ0.2	<ul style="list-style-type: none"> 非常に薄い円形状の板。曲物の蓋。 周縁より約2cm入った位置に把手の痕か、釘穴が3カ所みられる。 	
	桶 84	長さ(現29.2) 幅(現5.0) 厚さ0.9	<ul style="list-style-type: none"> 下方へ向って徐々に巾狭になり、厚みも薄くなる側板。 上端部は丸味をもつ。下端部は傷みが激しい。 上端部から3cm入った両側面の位置に目釘穴をもつ。 	
	桶 85	長さ(現21.0) 幅(現5.4) 厚さ0.5	<ul style="list-style-type: none"> 隅丸方形か円形をした底板の一部。 周縁部はやや尖り気味 	
その他の器	柄杓 86	口径5.3 高さ5.7 底径5.8	<ul style="list-style-type: none"> 竹の節を利用した柄杓。柄は欠く。 口縁部から0.5cm下った位置と、反対側の3.1cm下った位置に径0.5cmの柄を挿入する孔をもつ。 	SD 23 腐植土層出土 • 88は先端にしつくい状のものが付着 • 89は歯のすり減り方から左足用か。
	板材 87	長さ(現10.0) 幅(現1.4) 厚さ0.4	<ul style="list-style-type: none"> 表裏を平滑にした板材。両側面と下端部は折損。 先端部に2個の穿孔をもつ。 	
	角材 88	長さ30.9 幅3.4 厚さ2.5	<ul style="list-style-type: none"> 全面を縦方向に削り、多角形に面取りした棒材。 両端を切断。 	
	履物 89	長さ23.6 台幅9.0 高さ(現2.0)	<ul style="list-style-type: none"> 隅切りした長方形の連歯下駄。台裏はほぼ平坦。 台裏からほぼ直角に歯を削り出す。鋸の痕が見られる。89の歯は台幅より広くなる。 前壺はほぼ垂直に、後壺は内上方から外下方へ、89は方形に90は円形に穿つ。 後歯がよくすり減っており、89は台部近くまですり減る。 	
履物	90	長さ22.0 台幅8.7 高さ(現1.5)		SD 42 腐植土層出土 淡青灰色粘砂土層出土
	91	長さ22.0 台幅7.0 高さ(現7.1)	<ul style="list-style-type: none"> 91は隅切りした長方形、92は長円形の露卯下駄。台裏は舟底形。 台裏に歯を差すための溝と、台表まで貫通する枘を1個ずつもつ。溝に工具痕を残す。 差歛は上部に出納を1個もち、下部に向って開き、台幅より広い。 前・後壺ともにほぼ垂直に穿つ。 	
	92	長さ21.2 台幅7.5 高さ7.2		
	93	長さ22.0 台幅6.4 高さ(現1.7)	<ul style="list-style-type: none"> 隅丸方形の連歯下駄。台裏はほぼ平坦。 台裏は、前・後のアゴと中央部を残して前は「□」形に、後は方形に削る。 前壺は外上方から内下方へ小孔を、後壺はほぼ垂直に穿つ。 	
容器	94	長さ12.5 幅3.9~4.8	<ul style="list-style-type: none"> 下方へ向って徐々に巾狭で薄くなる側板。 内面下部に底板をめ込んだ痕がある。 	腐植土層出土 暗青灰色粘砂土層出土
	95	底径13.4 厚さ1.0	<ul style="list-style-type: none"> 円形をした底板。 周縁は面取りをしている。 	

(現)は現存値、(推)は推定値を表わす。

D 5 区 図版十

種類	番号	法量(cm)	形態の特徴	備考
容器	曲物	96 底厚さ 12.2 0.7	●円形をした底板。 ●周縁は面取りをしている。	SD50 出土

D 6 区 図版十一・十二・四十二(116)・四十三(110)

食膳具	漆器椀(蓋)	97 105	口径 高台径 計測不能	<ul style="list-style-type: none"> 完形のものがない。小椀と普通の椀がある。97は蓋か(?) 一本からロクロ挽きした薄手の椀(97~100)とやや厚手の椀(101~105)がある。 高台は薄手のものは低く、やや厚手のものには高いもの(101~104)低いもの(105)がある。 101~104~105の底部は体部に比べると厚い。 99~102~105は内外面共朱漆塗り。105の外面は黒漆で鶴亀を描く。 99~103は内面を黒漆の地塗りの後、朱漆塗り。外面を98は朱漆、103は黒漆塗りの後、朱漆の模様を描く。 	SD28 第2層出土 (100) 第3層出土 (97~99) (101~105)
		97 105	高台径 5.2		
		101	高台径 5.5		
		106	底厚さ 6.8 0.5		
容器	曲物	107 108	底厚さ (現11.5) 0.8	<ul style="list-style-type: none"> 円形の薄板。柄杓の底板か(?) 表面を平滑に削る。 円形をした曲物の底板。周縁は破損部が多いが、面とりをする。 107の表面は凹凸が著しい。裏面には黒漆状のものが付着。 108は、別に側板と桜皮の一部も遺存するが接合不可。裏面には、木目に垂直に入る一定方向のキズが數カ所ある。 	第3層出土
		108	底厚さ 11.8 0.7~1.0		
	蓋	109	口径 厚さ 12.7 0.8		
		110	長身幅 (現20.5) 11.4		
器	杓子	111	長さ 最大幅 10.3 2.9	<ul style="list-style-type: none"> うちわ形の身に、細長い柄(巾2.3cm、厚み1.0cm)がつく。 身の外面は丸味をもつ。内面は平滑、周縁を1cm巾に削る。 	第2層出土
		112	長さ 幅 15.3 1.8		
その他	部材	113 114 115	長さ 台幅 高さ (現3.0) 22.6 8.8	<ul style="list-style-type: none"> 断面が長方形。上面の中央が丸く山形を呈し、その下部に軸棒を通すための円孔を穿つ。 断面が長方形。仕口をもつ組材。(木釘が遺存) 両端を鋸で切り込み、相欠きの仕口をつくり中央に釘穴をもつ。 	第2層出土
		116 117 118	長さ 台幅 高さ (現20.6) 9.9 (現2.2) 19.4 7.8 (現3.1) 22.0 8.0 長さ 台幅 高さ (現19.4) 9.9 (現2.1)		
履物	下駄	113 114 115	長さ 台幅 高さ (現6.4) 22.4 8.6	<ul style="list-style-type: none"> 隅切りした長方形の露卯下駄。台裏は舟底形。 台裏に歯を差すための溝と、台表まで貫通する枘を2個ずつもつ。 差歎は上部に出納をもち、下部に向って開く。113は台部まですり減る。 前・後壺とも、ほぼ垂直に穿つ。 	第2層出土
		116 117 118	長さ 台幅 高さ (現2.2) 9.9 (現3.1) 長さ 台幅 高さ (現3.1) 19.4 7.8 (現2.1)		
物駄	下駄	117 118	長さ 台幅 高さ (現3.1) 19.4 7.8 (現2.1)	<ul style="list-style-type: none"> 隅切りした長方形の連歎下駄。台裏は平滑。117は前部が折損。 台部からほぼ垂直に歯を削り出すための鋸の切り込み痕がある。 前・後壺ともにはほぼ垂直に穿つ。 両歎ともによくすり減っている。 	第3層出土
		119	長身幅 22.7 8.0		

D 7 区 図版十一・四十三(119)

容器	杓子	119	長身幅 22.7 8.0	●身の上面がわずかに凹面となっている。 ●現在のものとほとんど変わらない。(柄幅2.35cm, 厚み0.4~0.6cm)	SD35 出土
履物	下駄	120	長さ (現19.4) 9.9 高さ (現3.8)	●長方形をした陰卯下駄。台裏は舟底形。 ●台裏に歯を差す溝をもつ。差歎は下方に開き、台部より広い。 ●前壺の部分を欠く。後壺は外上方から内下方に穿つ。釘が遺存。	

(現)は現存値、(推)は推定値を表わす。

4. まとめ

今回の調査地区は、前回の調査地区に接続する位置にあり、前回の報告内容と変わることはない。^① ただ前回の調査では、機械掘削によって近世以降及び盛土を排除したために、近世以降の遺構は主に断面観察によって確認したのみであった。今回は、旧表土直下より人力掘削をおこない、近世以降の水路も調査対象として実施した。この点をふまえて今回の調査をまとめておきたい。

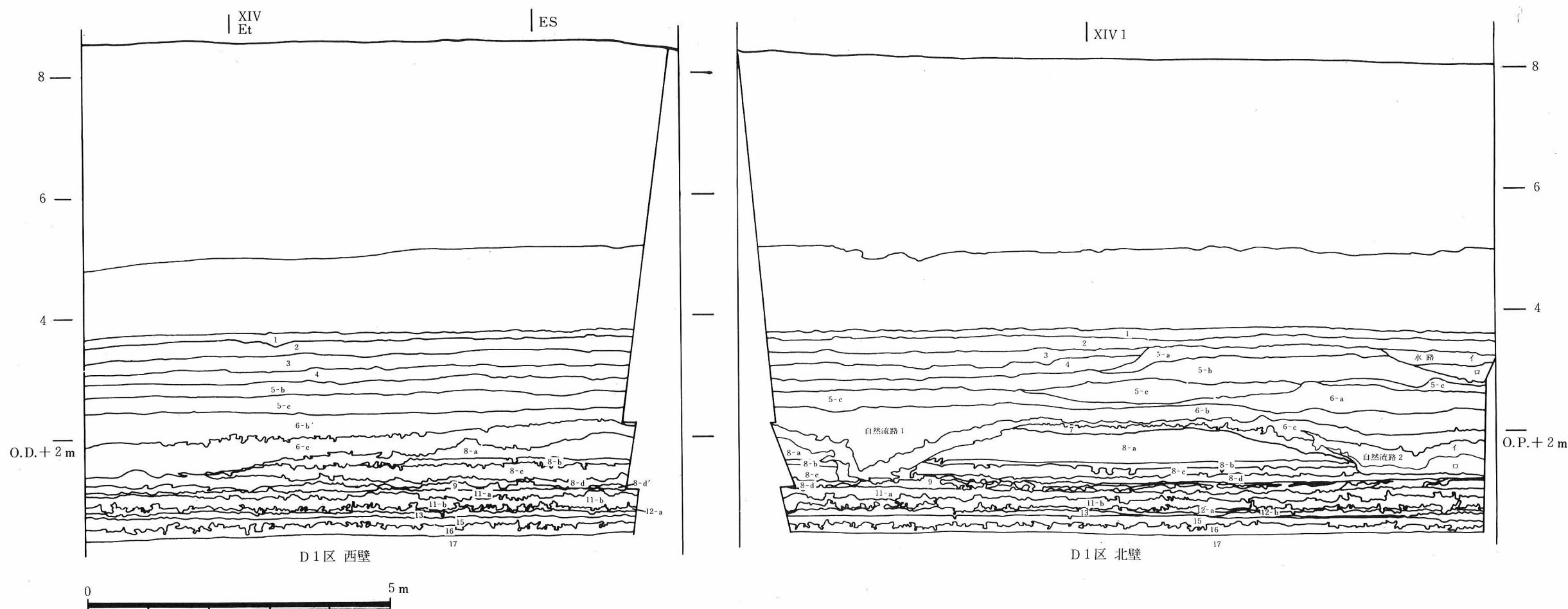
1) 近世以降の水路について

今回の調査で計24カ所の水路を確認した。中にはSD-14(D2区), SD-16・SD-17・SD-47(以上D3区), SD-41・SD-46(D4区), SD42・SD-50・SD-23(5区), SD-29・SD-28(D6区), SD-37・SD-57(D7区)など大規模なものが含まれている。これらの水路は、恩智川沿い一帯に認められる掘り上げ田に伴う水路と考えられる。特にSD-14, SD-23, SD-35は、肩に杭を打ち込んで補強工事が認められる。前回の報告でも指摘しておいたが、水路の掘削面が大きく分けて二面考えられる。第1面は、SD-14, SD-17, SD-41, SD-42, SD-23, SD-29, SD-57, SD-37などの水路掘削面であり、第1層の耕土ないし耕作土直下より掘り込まれている。第2面は、SD-16, SD-47, SD-46, SD-50, SD-28の水路掘削面で、D1区・D2区の第6層(他の地区的断面図でO.P.+2.5m前後)下部で掘削されていることがわかる。第1面は、現在も周辺に残っている掘り上げ田に伴う水路と同様のものと考えられる。第2面は、今回の調査でも5~6層の時期決定ができなかったので不明であるが、第9層より12世紀代の瓦器碗が出土している事実から、第6層は近世以降、江戸時代頃に比定できる掘り上げ田については、皿池遺跡の報告^②の中で、大和川付替工事(1704)以降急速につくられるようになったとあり、第2面が初期の頃の掘り上げ田に比定できるのではないかと思われる。

2) 弥生時代の遺構について

弥生時代の遺構は、SD-1, SD-3及び埋没谷がある。共に前回の調査で確認していたもので、今回はその延長部分を調査したことになる。SD-1, SD-3については、前回の調査では人為的なものか、自然流路か決定できずにいた。今回の調査でも20~30mの窪地程度の深さであり、人為的なものとは判断できなかった。しかし、鬼虎川遺跡第5次^③、第7次調査^④で確認されている水路の方向はすべて北へ向っており、これらの水路の末端が今回の調査地点まで達している可能性が考えられる。水路の末端における状況は、自然に河内潟の方向へ排水するのみであったとも判断できる。今後の調査例を待ちたいと考えている。埋没谷として報告されている遺構も、今回の調査ではあらたな事実はない。自然地形による起伏の可能性もあり今後周辺の調査結果を待って考えたい。

- 注 ① 国道 308 号線関係遺跡調査会『鬼虎川遺跡』1981年
② 芋本隆裕『皿池の調査報告』東大阪市遺跡保護調査会 1976年
③ 那須孝悌、樽野博幸、下村晴文、才原金弘『鬼虎川遺跡調査概要 I』東大阪市遺跡保護調査会 1980年
④ 芋本隆裕、松田順一郎『鬼虎川の銅鐸鋳型』東大阪市遺跡保護調査会 1981年

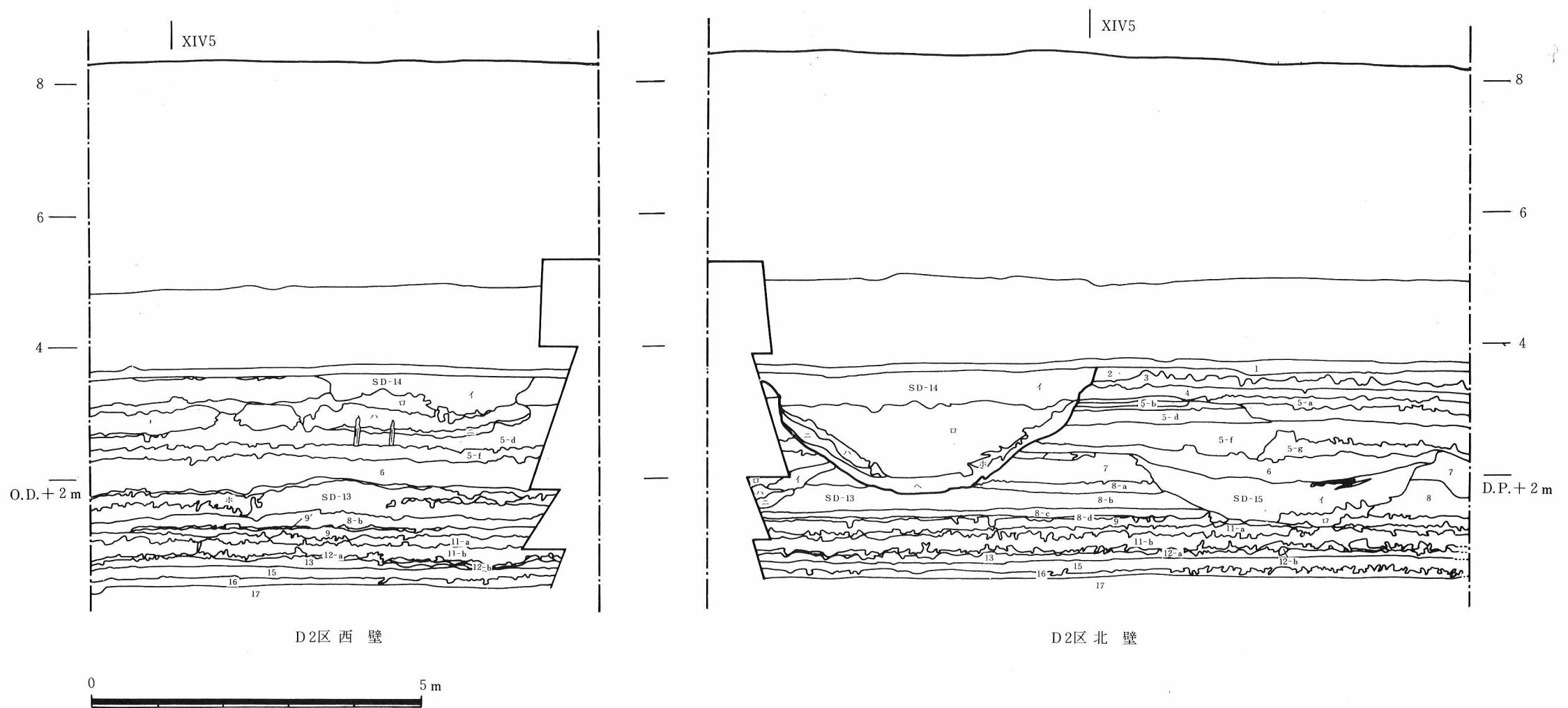


7. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土、植物遺体微量に含む
 8-a. 細~粗粒砂、細礫の互層、上部及び中部の一部に暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土~中粒砂の薄層有り
 8-b. 暗オリーブ灰色(5GY³%、5GY²%)シルト質粘土、極細粒砂の互層、植物遺体少量含む
 8-c. 暗オリーブ灰色(5GY³%)シルト質粘土、暗オリーブ灰色(5GY³%)シルト、オリーブ灰色(2.5GY³%)
 シルト質粘土(腐植土)のラミナ有り、植物遺体を少量含む
 8-d. (8-d')細~粗粒砂の互層
 9. 上部灰色(10Y⁴%)シルト質粘土、植物遺体やや多く含む
 下部暗オリーブ灰色(5GY³%)シルト質粘土、腐植物少量、中粒砂微量に含む
 11-a. 暗緑灰色(7.5GY³%~10GY³%)粘土
 11-b. オリーブ黒色(7.5Y³%)粘土、12-a. 層がブロック状で混る、植物遺体を少量含む
 12-a. 11-b. 層と12-b.層の混成の粘土、暗オリーブ灰色(5~7.5GY³%)粘土が細片ブロックで混る、
 植物遺体微量含む
 12-b. 腐植物と炭化物の互層、部分的に暗オリーブ灰色(5~7.5GY³%~3%)粘土のラミナ有り
 13. 暗オリーブ灰色(5GY³%~3%)粘土の互層、上部は1cm間隔、下部は2~3%間隔で、
 炭化物のラミナ有り

1. 旧表土、現在の水田耕土
 2. 暗緑灰色(10GY⁴)シルト質粘土、細礫微量に含む
 3. 橙色(7.5YR⁴)粘質シルト、細礫・中粒砂微量に含む
 4. 緑灰色(10GY⁴)シルト質粘土、明褐色(7.5YR⁴)シルト質粘土
 5-a. 橙色(7.5YR⁷%~6%)粘質シルト
 5-b. 橙色(7.5YR⁴%~5%)粘質シルト
 5-c. 明褐色(7.5YR⁴%~6%)シルト
 6-a. 暗緑灰色(5GY⁴)砂混じり粘土
 6-b. 暗緑灰色(5GY⁴)シルト質粘土、細~粗粒砂大量に含む
 6-c. 暗緑灰色(10GY³%~4%)シルト質粘土、中~粗粒砂、細礫不均一に多量に含む
 一部砂がブロック状で混る
 自然流路2 イ. オリーブ黒色(10Y³%)シルト質粘土(腐植土)暗緑灰色(7.5GY⁴)シルト質粘土が
 ブロック状で混る、下部に中粒砂を含む
 ロ. オリーブ黒色(10Y³%)シルト質粘土、暗緑灰色(7.5GY⁴)シルト質粘土が
 ブロック状で混る

13. 黒色(5Y²%)腐植土、植物遺体、炭化物を多量に含む
 下部に16層がブロック状で混る
 16. 黒色(5Y¹%)粘土、植物遺体を少量含む、上部には15層、下部には
 部分的に17層が混る
 17. 暗緑灰色(8GY⁴%~1%)粘土、亀裂部分に16層が入り込む
 水路1. イ. 暗灰色(10YR⁶%~5%)粘質シルト
 ロ. 緑灰色(10GY⁵%~4%)と橙(5YR⁶%~5%)が4:6に混入した粘質シルト

第27図 D1区 北・西壁断面実測図

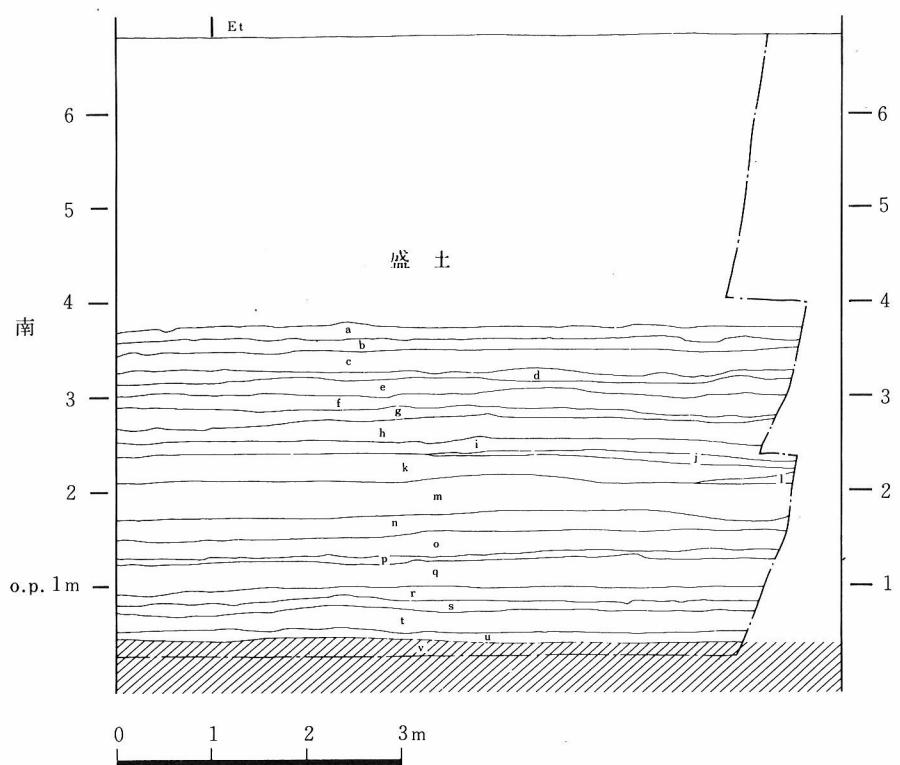
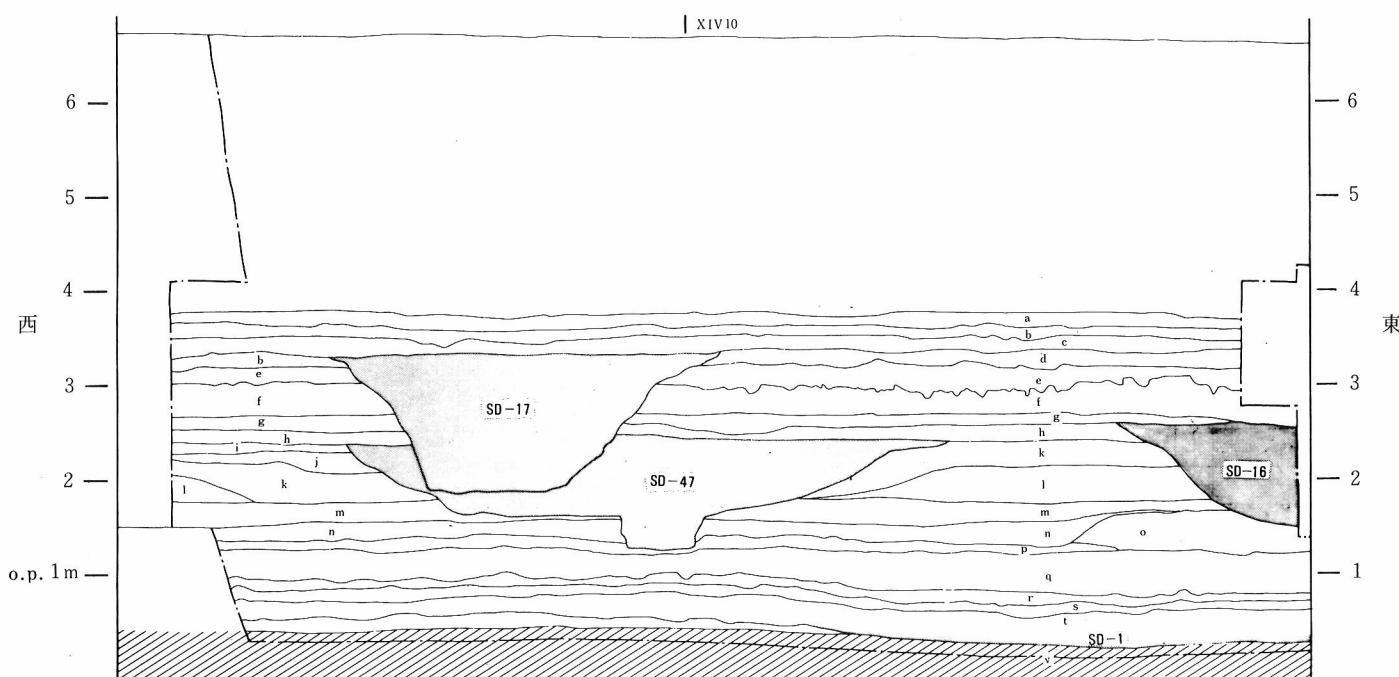


1. 旧表土、現在の水田耕土
2. 暗緑灰色(10G³%)シルト質粘土、細～粗粒砂、細礫不均一に多量に含む(酸化物15%)
3. 黄灰色(2.5Y³%)シルト質粘土、中粒砂少量含む(酸化物30%)
4. 灰色(5Y⁴%)シルト質粘土
5-a. 暗灰色(7.5GY⁴%)シルト質粘土、酸化が激しい
5-b. 緑灰色(10GY⁴%)シルト質粘土
5-c. 暗緑灰色(7.5GY⁴%)シルト質粘土とシルトの互層
5-d. 暗緑灰色(5G⁴%)シルト質粘土、やや明るい粘土とシルトのラミナ部分的に有り
5-e. 灰色(10Y⁴%)シルト質粘土(酸化物45%)
5-f. 暗緑灰色(10GY⁴%)シルト質粘土(酸化物20%)
5-g. 暗緑灰色(10G³%)シルト質粘土、細～粗粒砂、細礫を大量に含む
6. 暗緑灰色(5G³%)シルト質粘土、細～粗粒砂を不均一に少量含む
7. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土
8-a. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土と細砂の互層
8-b. シルト質粘土、細～粗粒砂の互層

8-c. 暗オリーブ灰色(2.5GY³%)シルト質粘土、中粒砂を多量に含む
8-d. 細～粗砂を互層
9'. オリーブ黒色(10Y³~2.5GY³)シルト質粘土(腐植土)
9. 灰色(10Y³%)シルト質粘土(腐植土)、植物遺体を少量含む、下部に中粒砂を少量含む
11-a. 暗緑灰色(7.5GY³~10GY³%)粘土
11-b. オリーブ黒色(7.5Y³%)粘土、12-a. 層がブロック状で混る、植物遺体を少量含む
12-a. 11-b. 層と12-b. 層の混成の粘土、暗オリーブ灰色(5~7.5GY³%)粘土が細片ブロックで混る
12-b. 植物遺体を少量含む
12-c. 腐植物と炭化物の互層、部分的に暗オリーブ灰色(5~7.5GY³%)粘土のラミナ有り
13. 暗オリーブ灰色(5GY³%~3%)粘土の互層、上部は1cm、下部は2~3%間隔で炭化物のラミナ有り
15. 黒色(5Y¹%)腐植土、植物遺体、炭化物を多量に含む、下部に16層がブロック状で混る
16. 黒色(5Y¹%)粘土、植物遺体を少量含む、上部には15層、下部には部分的に17層が混る
17. 暗緑灰色(8GY⁴%)粘土、亜鉛部分に16層が入り込む
SP-13. イ. 暗オリーブ灰色(5GY³%)シルト質粘土、植物遺体を多く含む
ロ. 暗オリーブ灰色(2.5GY³%)シルト質粘土、腐植土

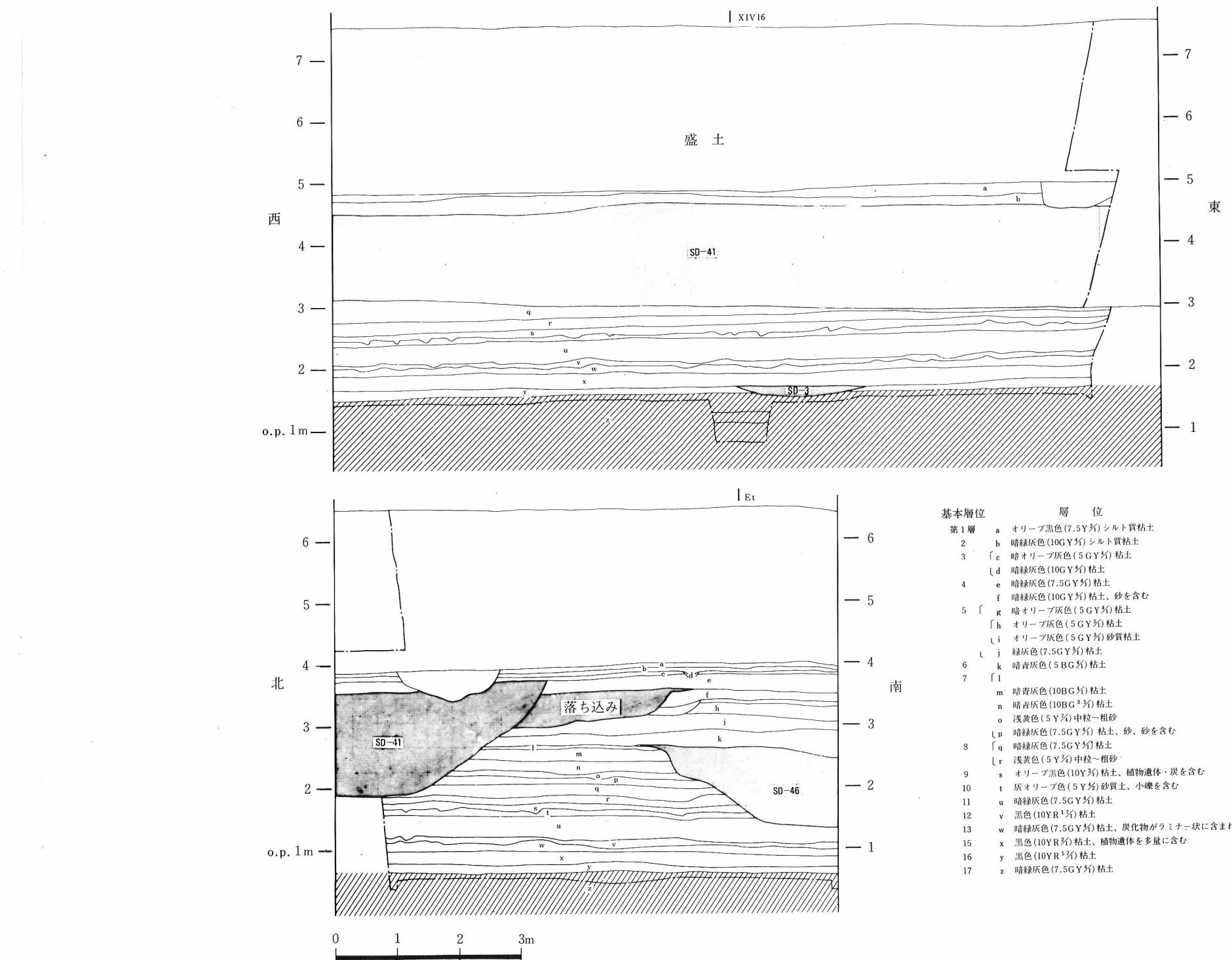
SD-13. ハ. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土、植物遺体を少量含む
二. 暗緑灰色(10GY³%)シルト質粘土、細～中粒砂多量に含む(下部は砂の割合が多くなる)
暗オリーブ灰色(5GY³%)シルト質粘土がブロック状で混る
植物遺体をやや多く含む
ホ. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土、細～中粒砂をやや多く含む、植物遺体を少量含む
SD-14. イ. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土、細～粗粒砂を不均一に多量に含む(砂が多い所は酸化が激しい、酸化物80%)
ロ. 暗緑灰色(5G³%)シルト質粘土、細～粗粒砂を不均一に多量に含む(酸化物50%)
ハ. 暗緑灰色(5G³%)シルト質粘土、細～粗粒砂を多量に含む
二. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土
ホ. 楊細～中粒砂の互層
ヘ. 黒色(7.5Y¹%)腐植土、暗緑灰色(10GY³%)シルト質粘土を細片ブロックで含む
ロ. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土、暗オリーブ灰色(2.5GY³%)腐植土のラミナ有り
ロ. 暗緑灰色(7.5GY³%)シルト質粘土、暗オリーブ灰色(5GY³%)シルト質粘土、中粒砂が乱れて混る

第28図 D2区 北・西壁断面実測図

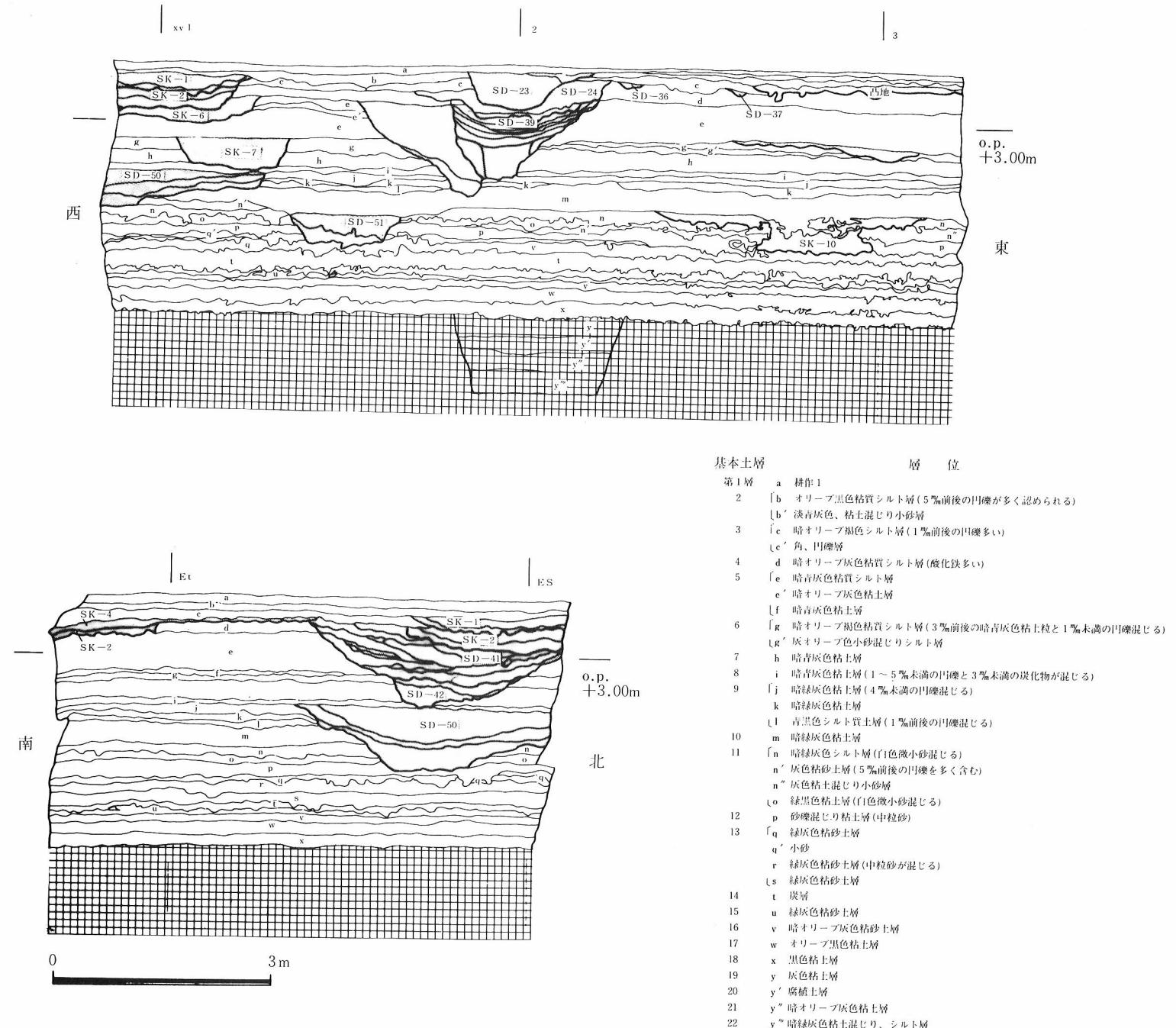


基本層位		層位
第1層	a	黒色(2.5G Y3/4)シルト質粘土
2	b	暗緑灰色(7.5G Y3/4)シルト質粘土
3	c	暗緑灰色(5G Y3/4)粘土
4	d	暗灰黄色(2.5Y R3/4)粘質シルト
5	e	灰黄褐色(7.5Y R3/4)シルト、灰黄色粘土が連鎖状に混じる 植物遺体を多量に含む
	f	明黄褐色(10Y R3/4)粘土、灰黄色粘土が斑点状に混じる
	g	灰色(7.5Y N3/4)シルト、極小砂～粗砂を含む
6	h	暗緑灰色(10G Y3/4)シルト
7	i	暗灰紫色(2.5G Y3/4)シルト質粘土、極小砂～小礫を含む
	j	灰色(7.5Y 4/5)粘土
	k	灰色(5 Y N3/4)粘土
	l	暗オリーブ色(5 Y N3/4)粘土
8	m	オリーブ黄色(5 Y N3/4)砂、暗青灰色粘土と砂の互層
9	n	オリーブ黒色(10Y N3/4)粘土、植物遺体、炭を含む
	o	灰オリーブ色(5 Y N3/4)砂質土
10	p	o層より砂が多く、礫を含む
11	q	暗緑灰色(7.5G Y3/4)粘土
12	r	黒色(10Y R1/2)粘土
13	s	暗緑灰色(7.5G Y3/4)粘土
15	t	黒色(10Y R1/2)粘土、植物遺体を多量に含む
16	u	黒色(10Y R1/2)粘土
17	v	暗緑灰色(7.5G Y3/4)粘土

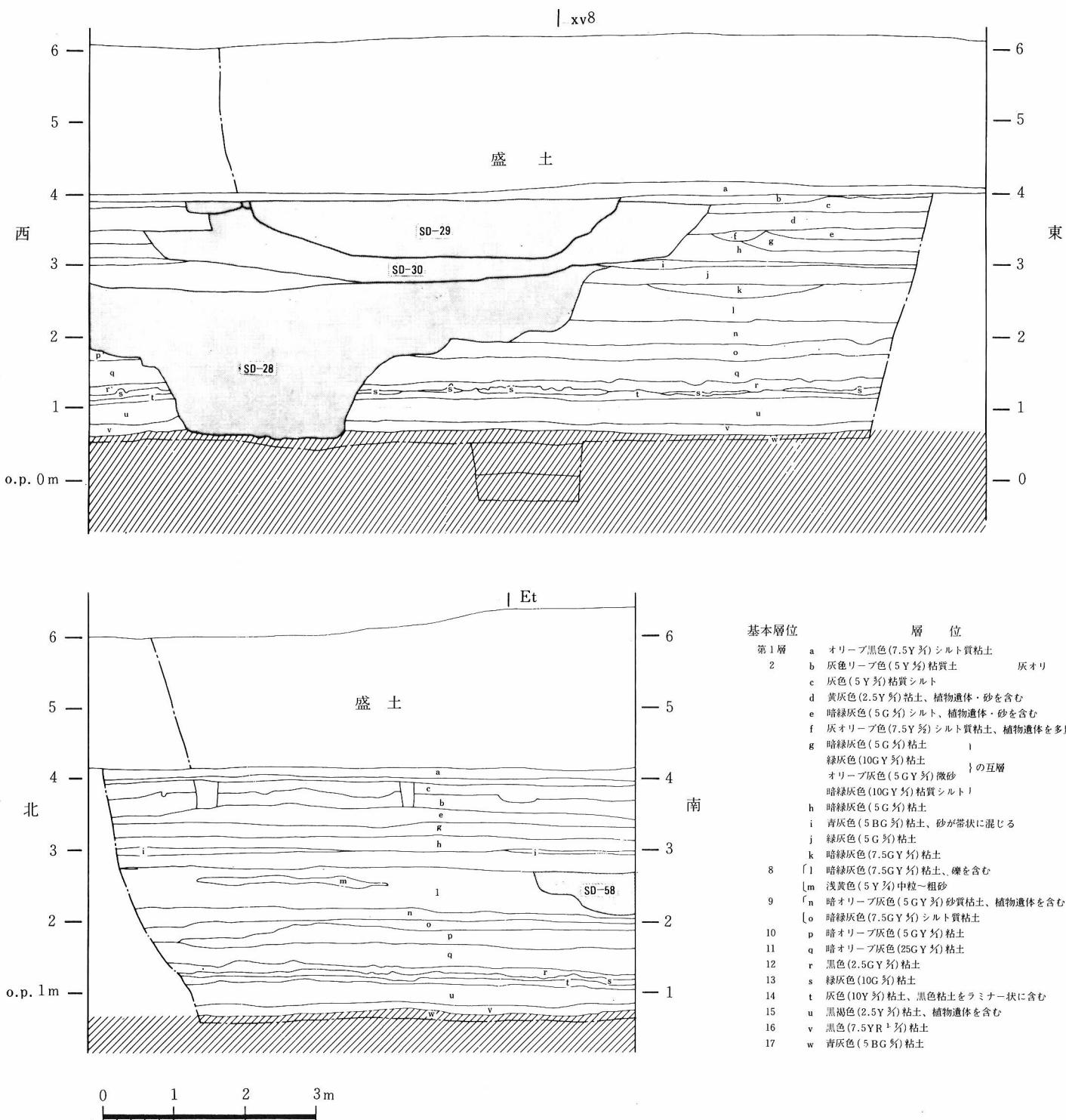
第29図 D 3 区 北・西壁断面実測図



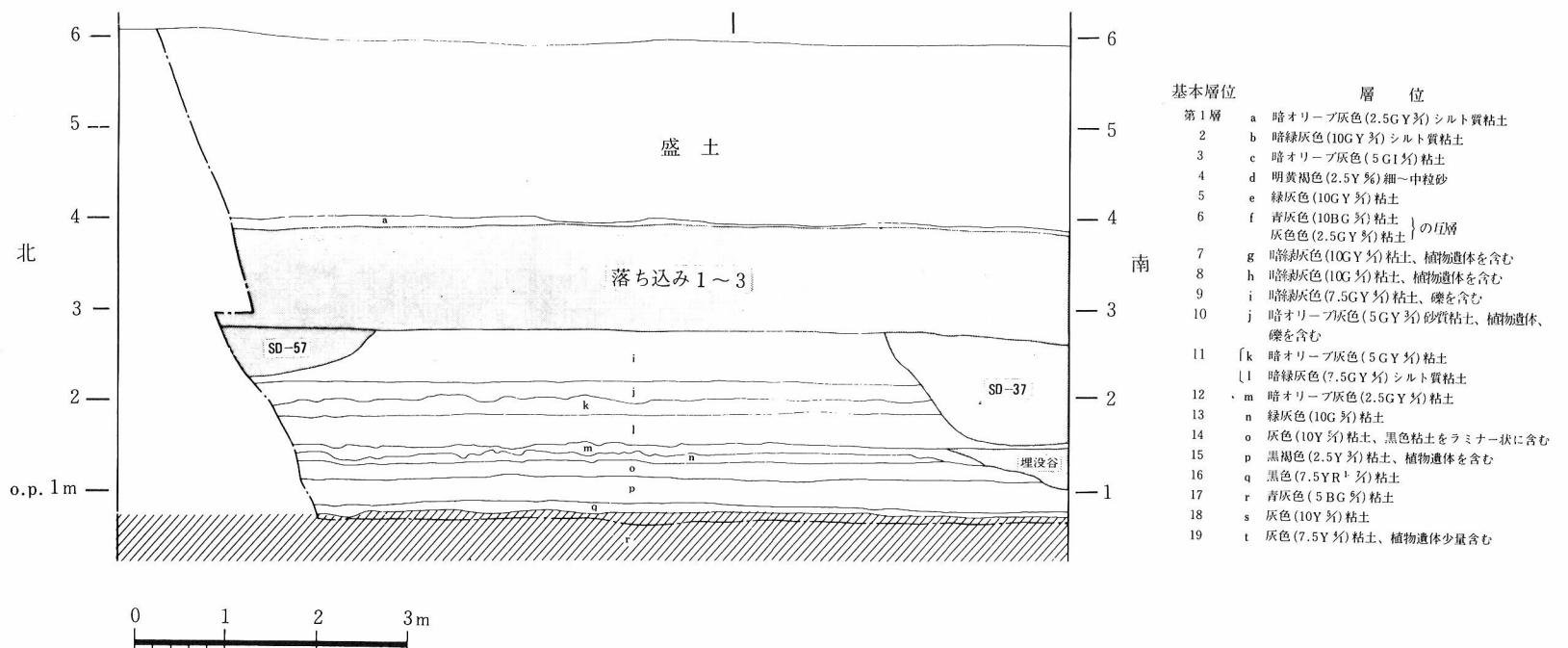
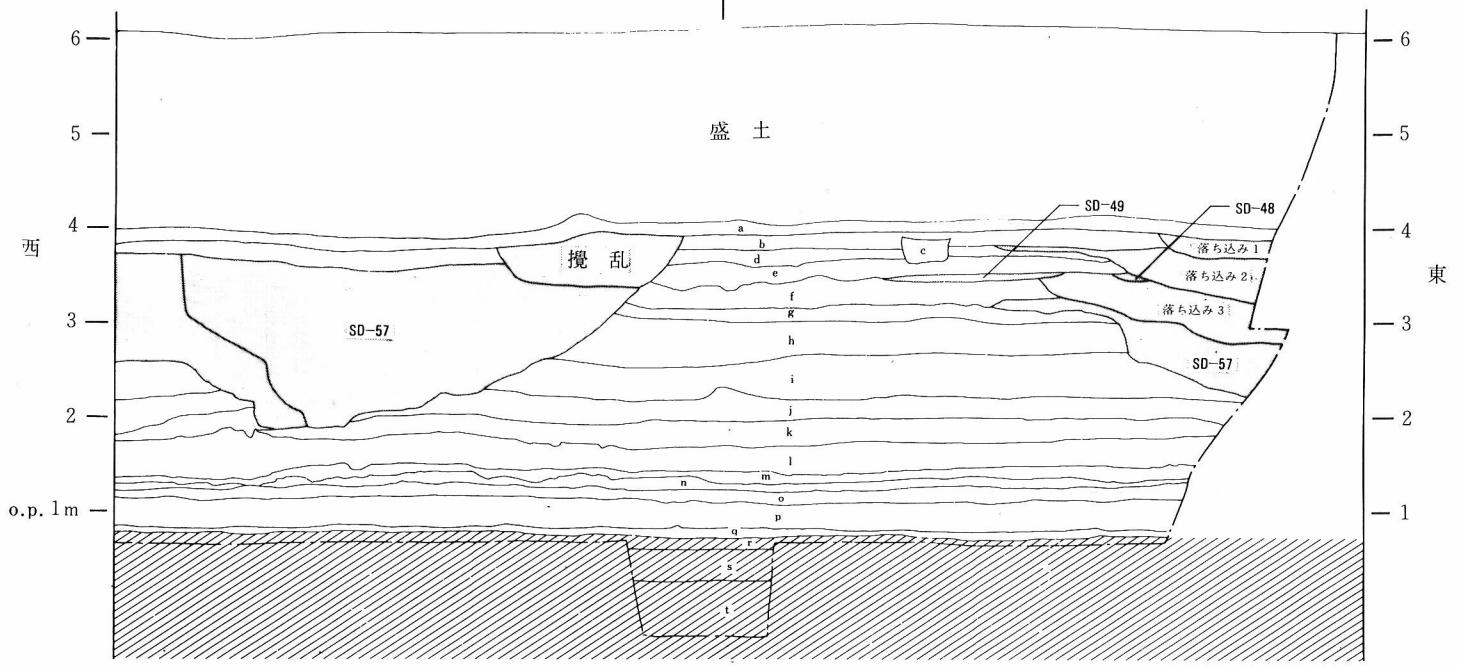
第30図 D 4 区 北・東壁断面実測図



第31図 D 5 区 北・西壁断面実測図



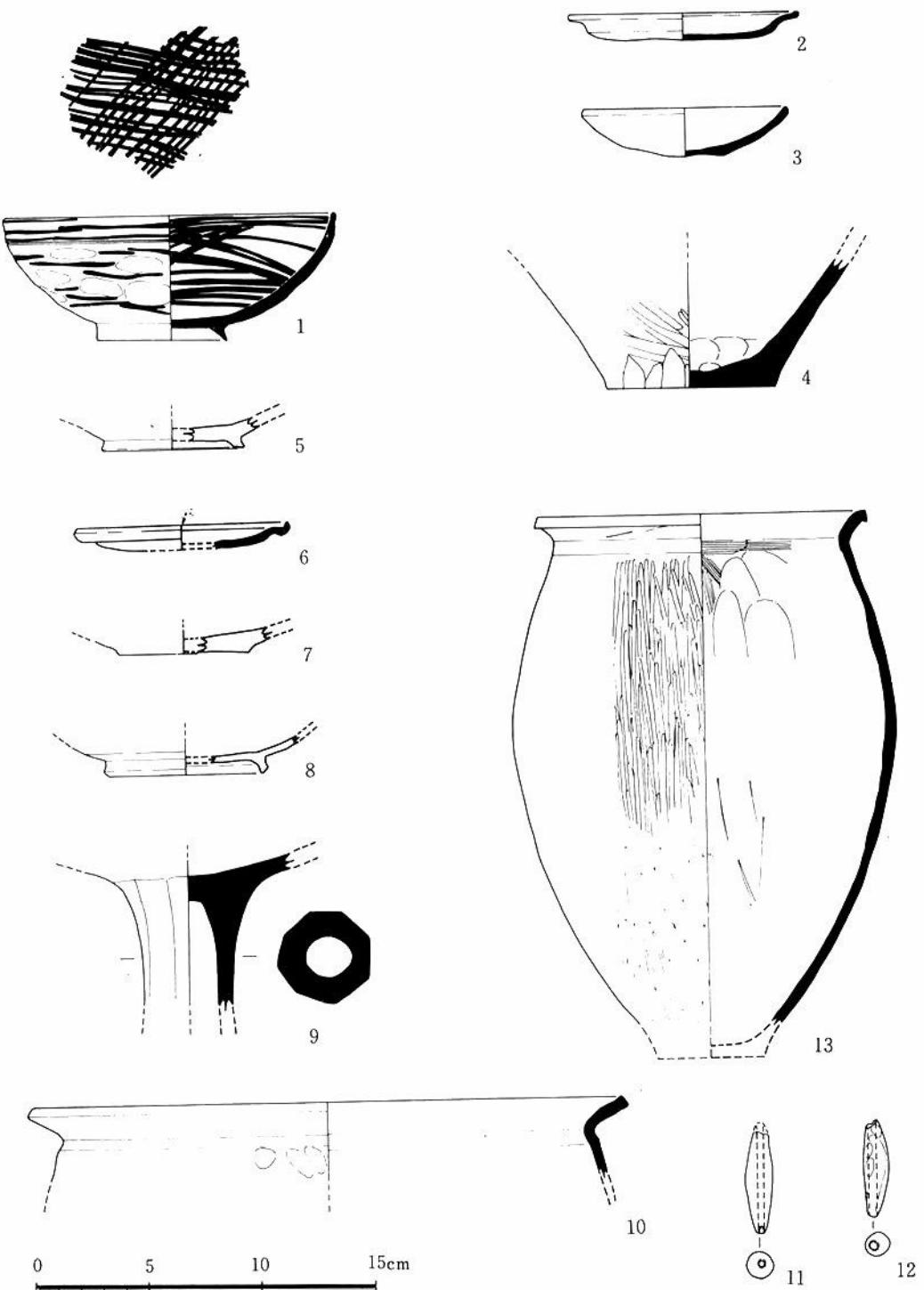
第32図 D 6 区 北・東壁断面実測図



第33図 D7区 北・東壁断面実測図

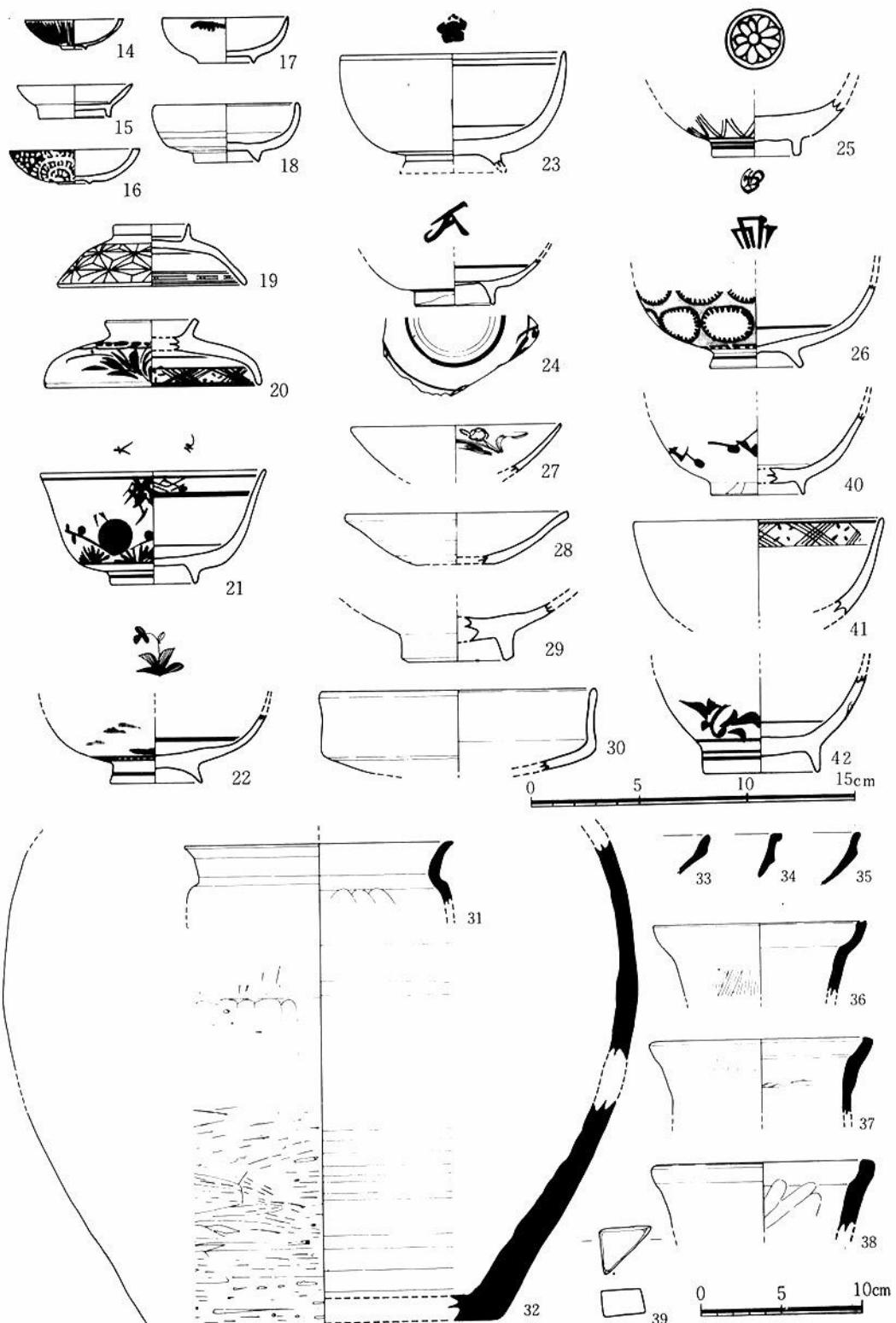
図 版

図版一 出土土器・土錐実測図



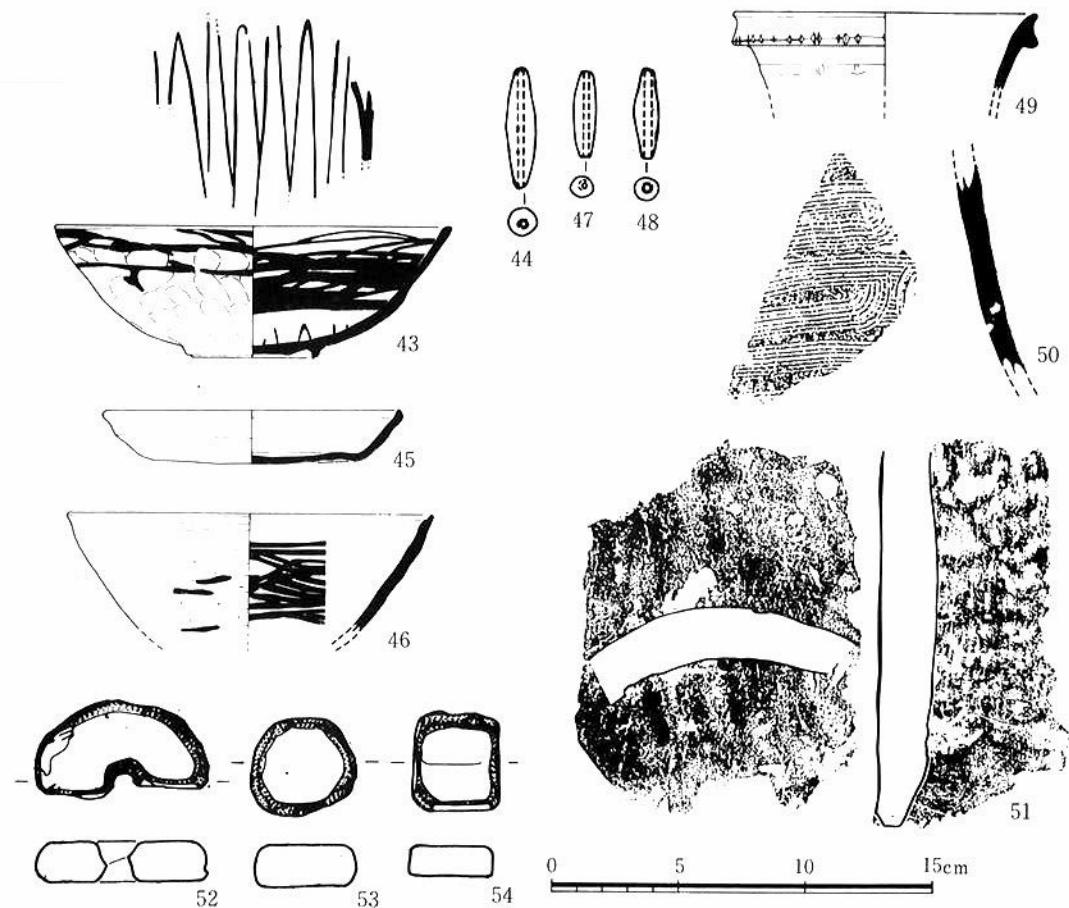
D 1区(1瓦器), D 2区(2・3土師器, 4弥生土器), D 3区(5緑釉陶器),
D 4区(6土師器, 7緑釉陶器, 8灰釉陶器, 9・10土師器, 11・12土錐, 13弥生土器)

図版二 出土土器・陶磁器実測図



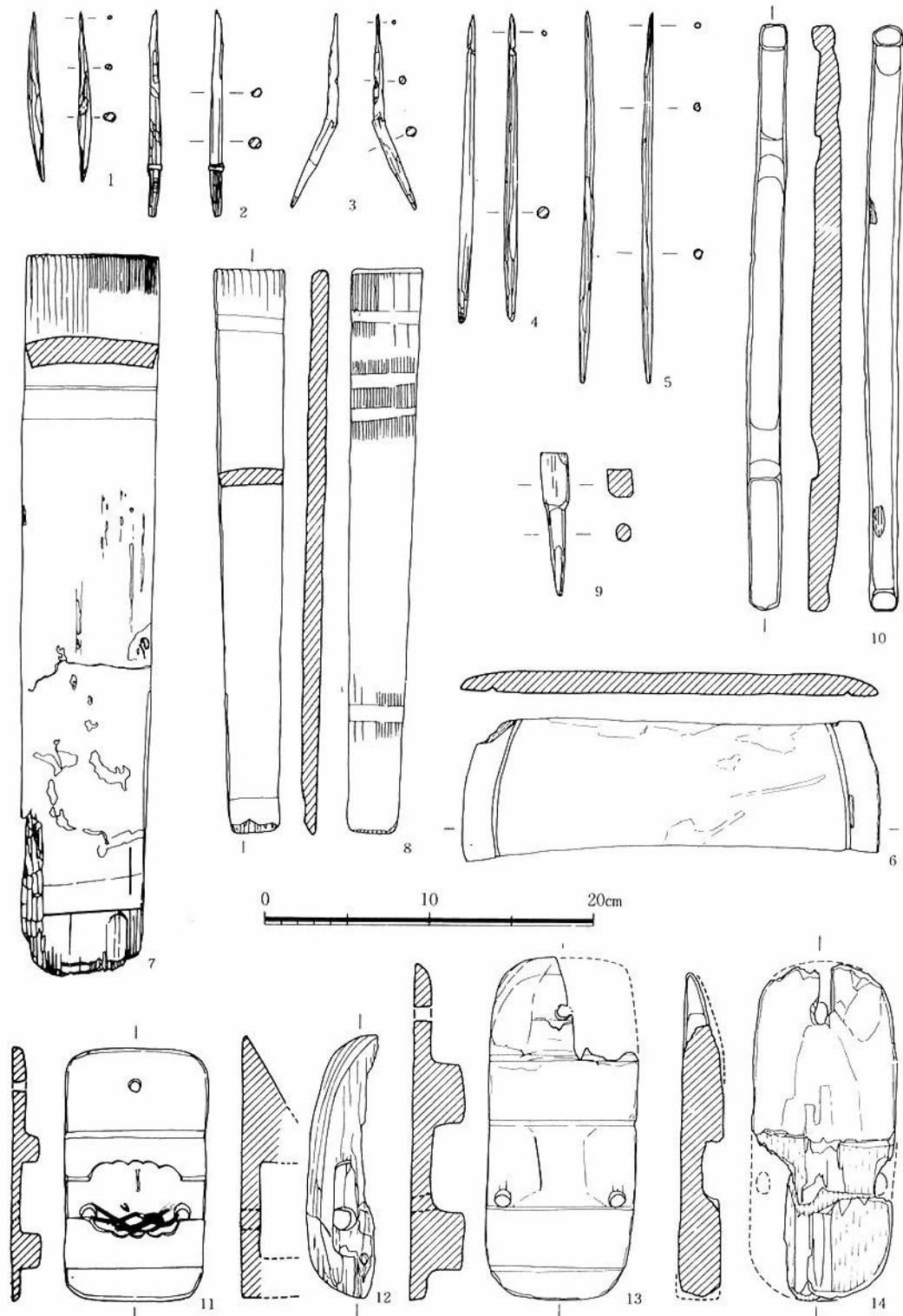
D 5 区 (SD23出土14~30近世陶磁器, 31~37土師器, 38瓦質土器, 39須恵質土製品,
SD24出土40近世陶磁器, SD39出土40・41近世陶磁器)

図版三 出土土器・瓦・土錘実測図



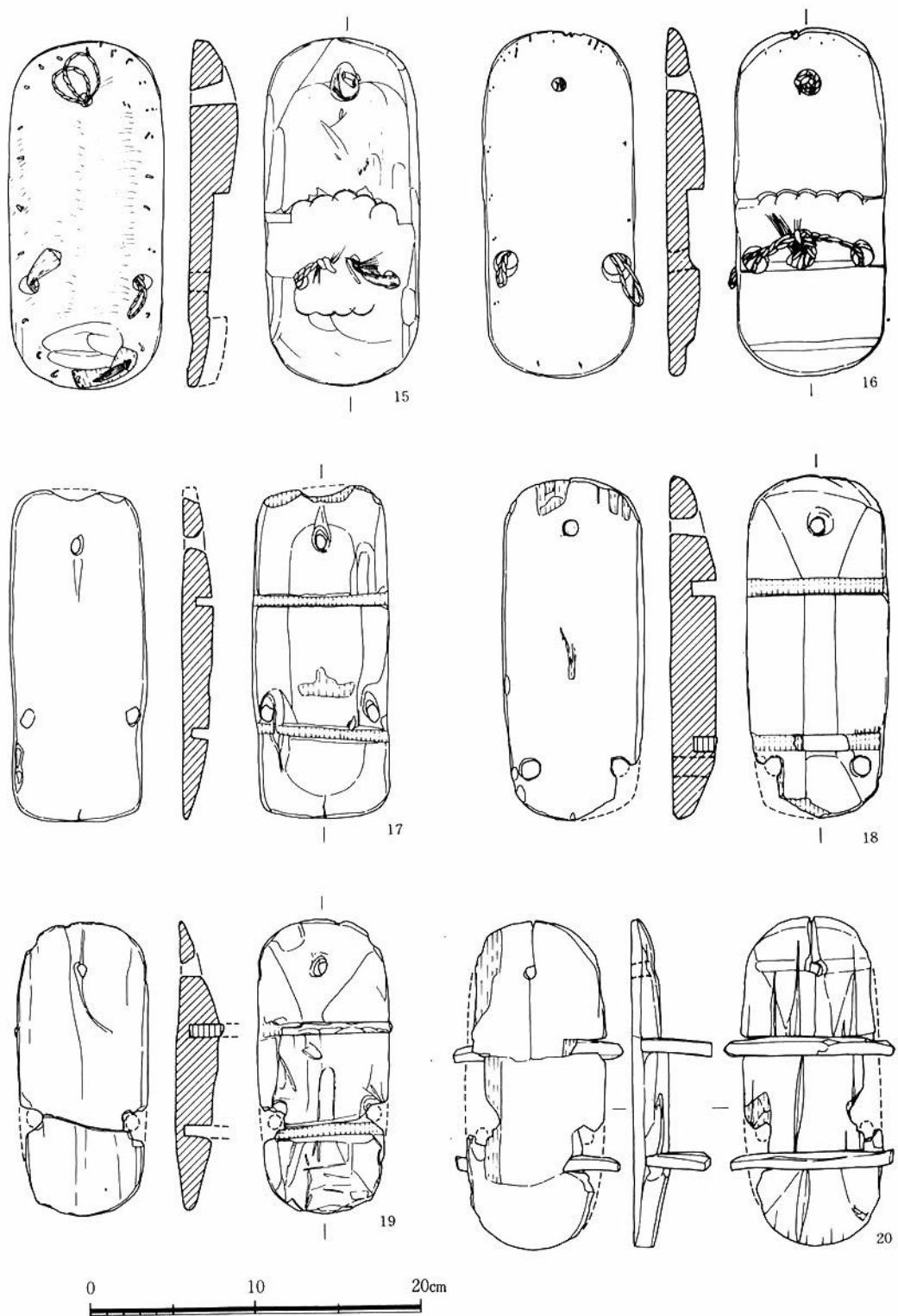
D 6 区(43瓦器, 44土錘, SD28出土45土師器), D 7 区(SD35出土46黒色土器・51丸瓦,
47・48土錘, 49・50弥生土器, SD23出土52~54瓦製二次加工品)

図版四 出土木器実測図



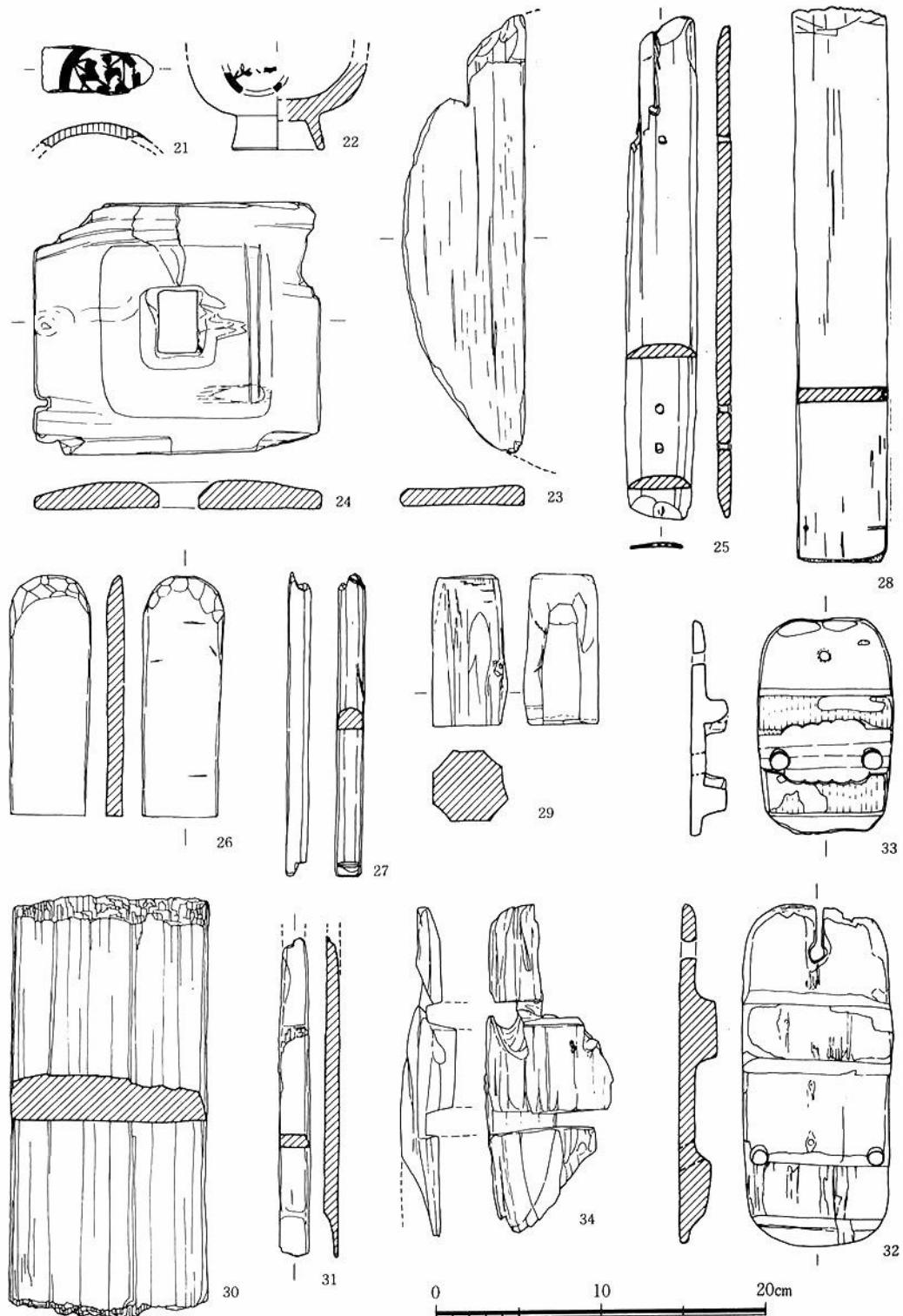
D 1 区(1~4), D 2 区(SD 14出土 6~9・11~14、包含層出土 5・8)

図版五 出土木器実測図



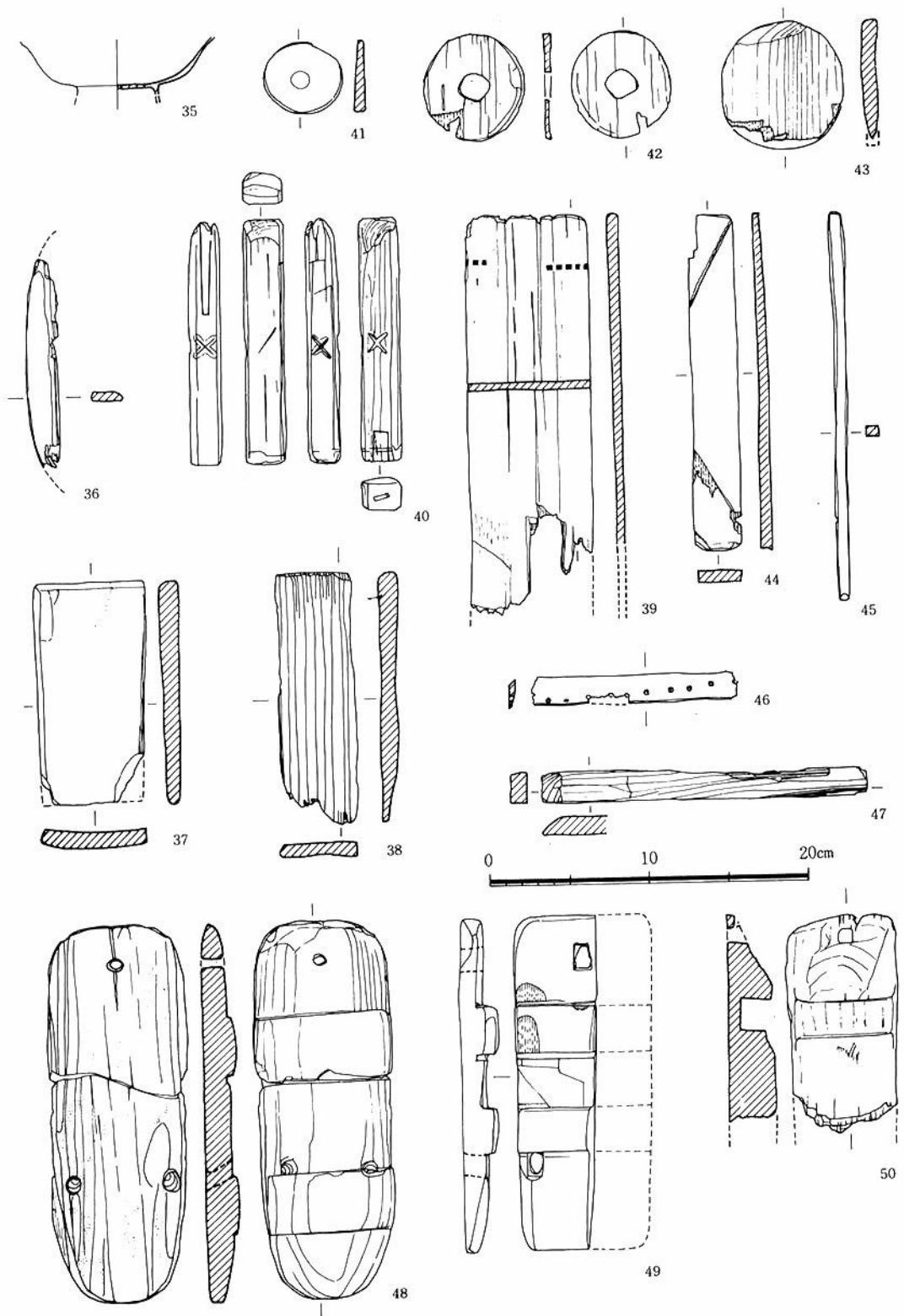
D 2区 (SD 14出土15~20)

図版六 出土木器実測図



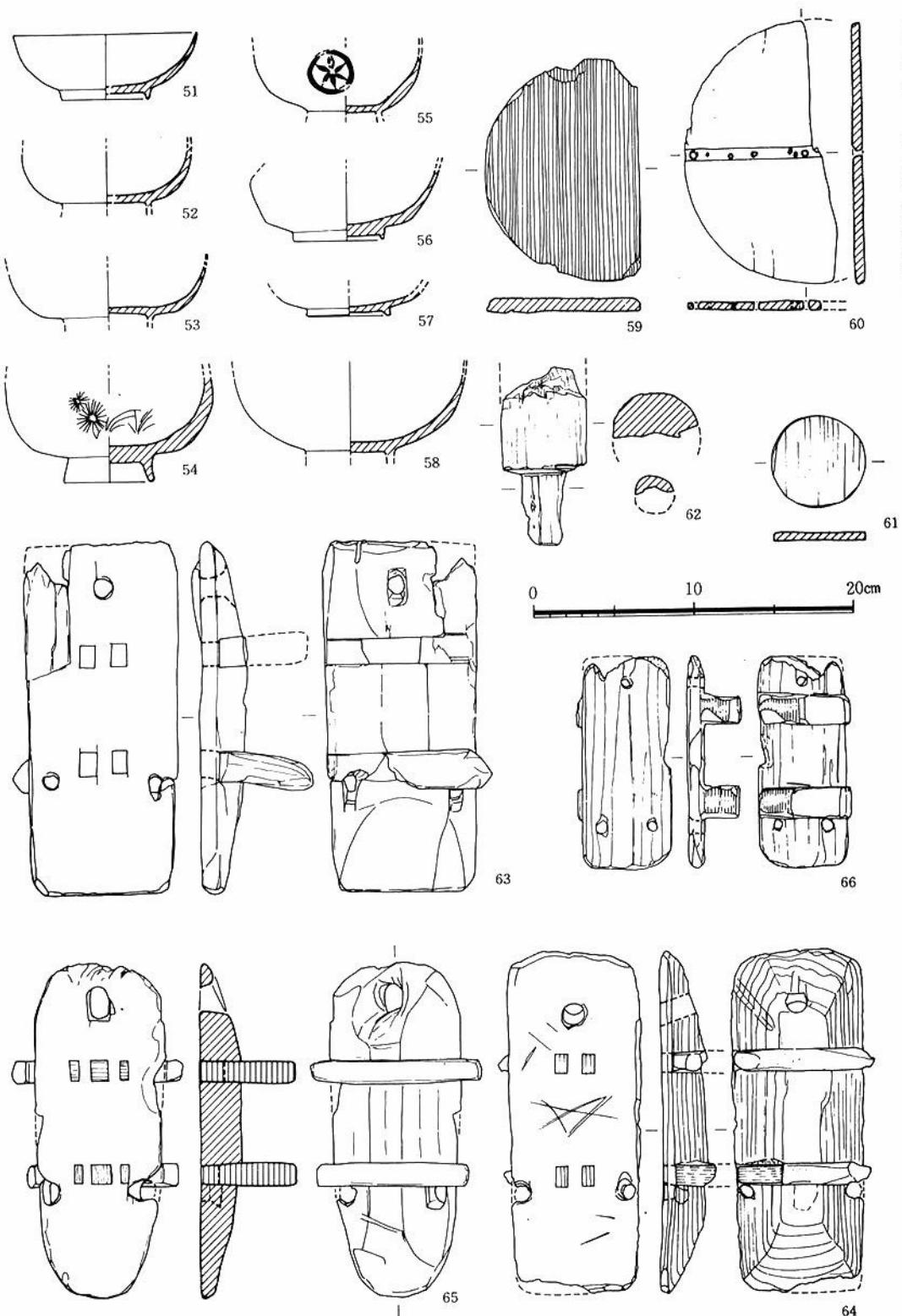
D 3 区(SD 17出土21~24・26, 包含層出土25). D 4 区(SD 41出土27・28・31~34, SD 03出土29・30)

図版七 出土木器実測図



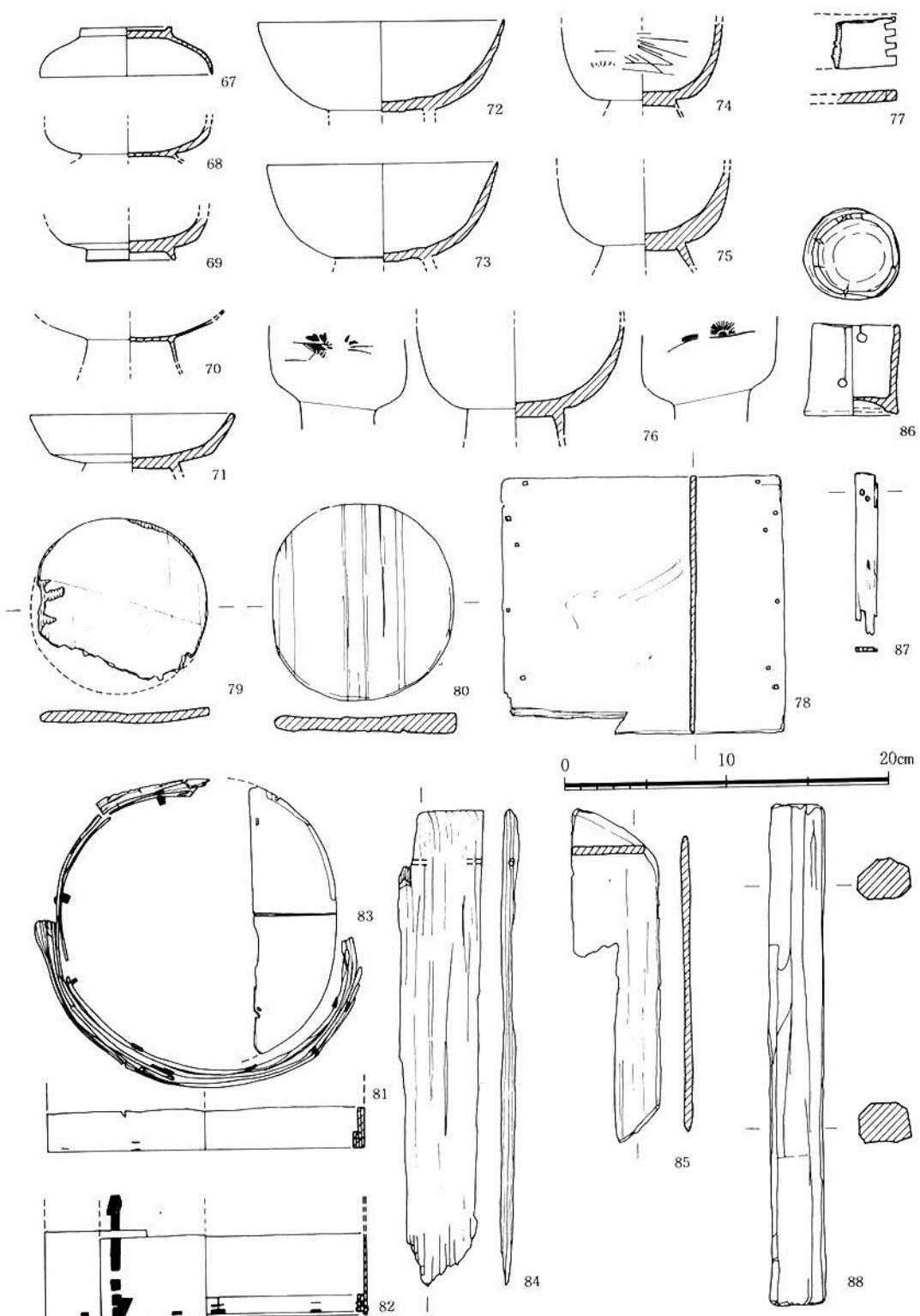
D 5区(SD 23出土35~42・44~50、包含層出土43)

図版八 出土木器実測図



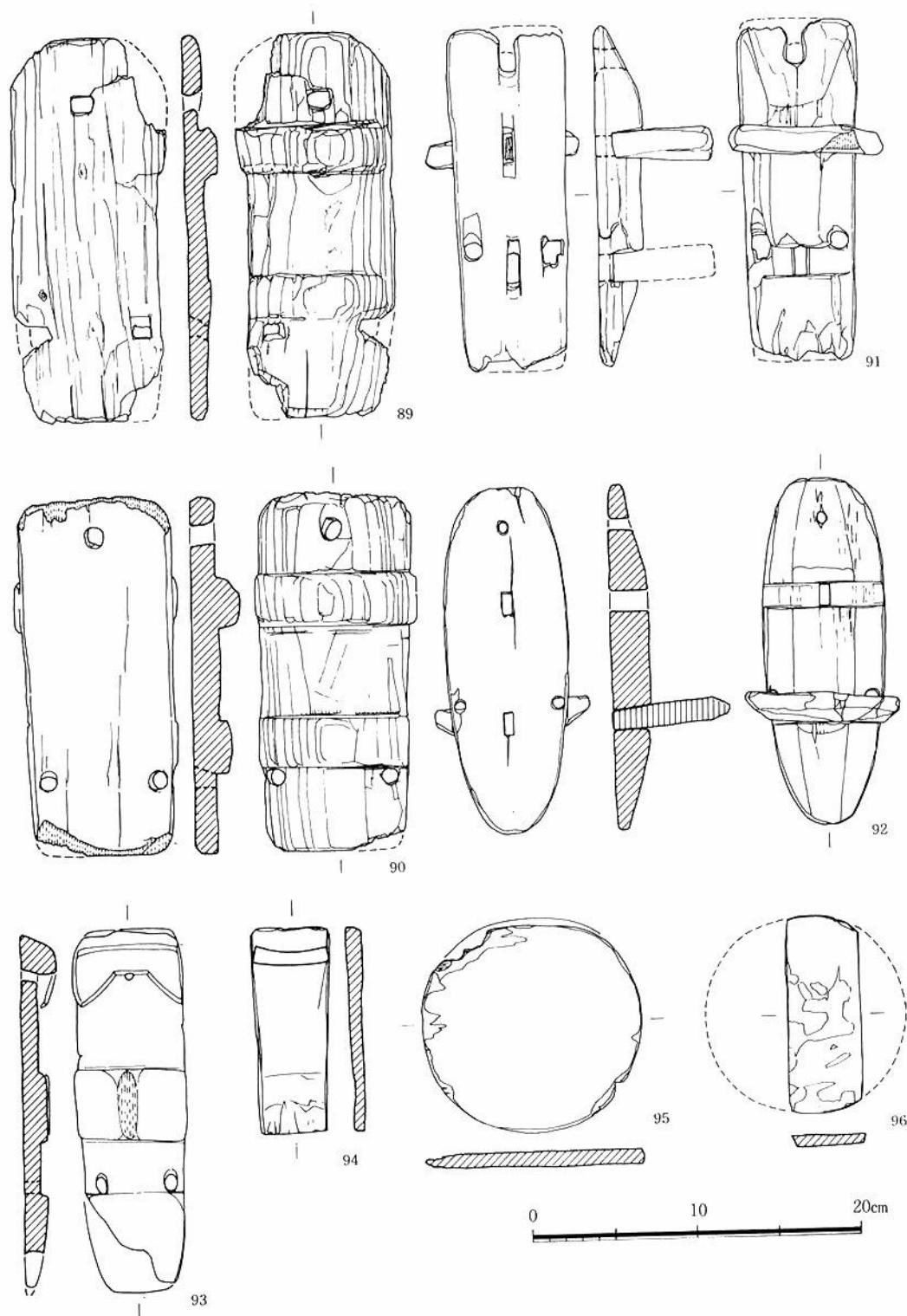
D 5 区 (SD 24出土51~66)

図版九 出土木器実測図



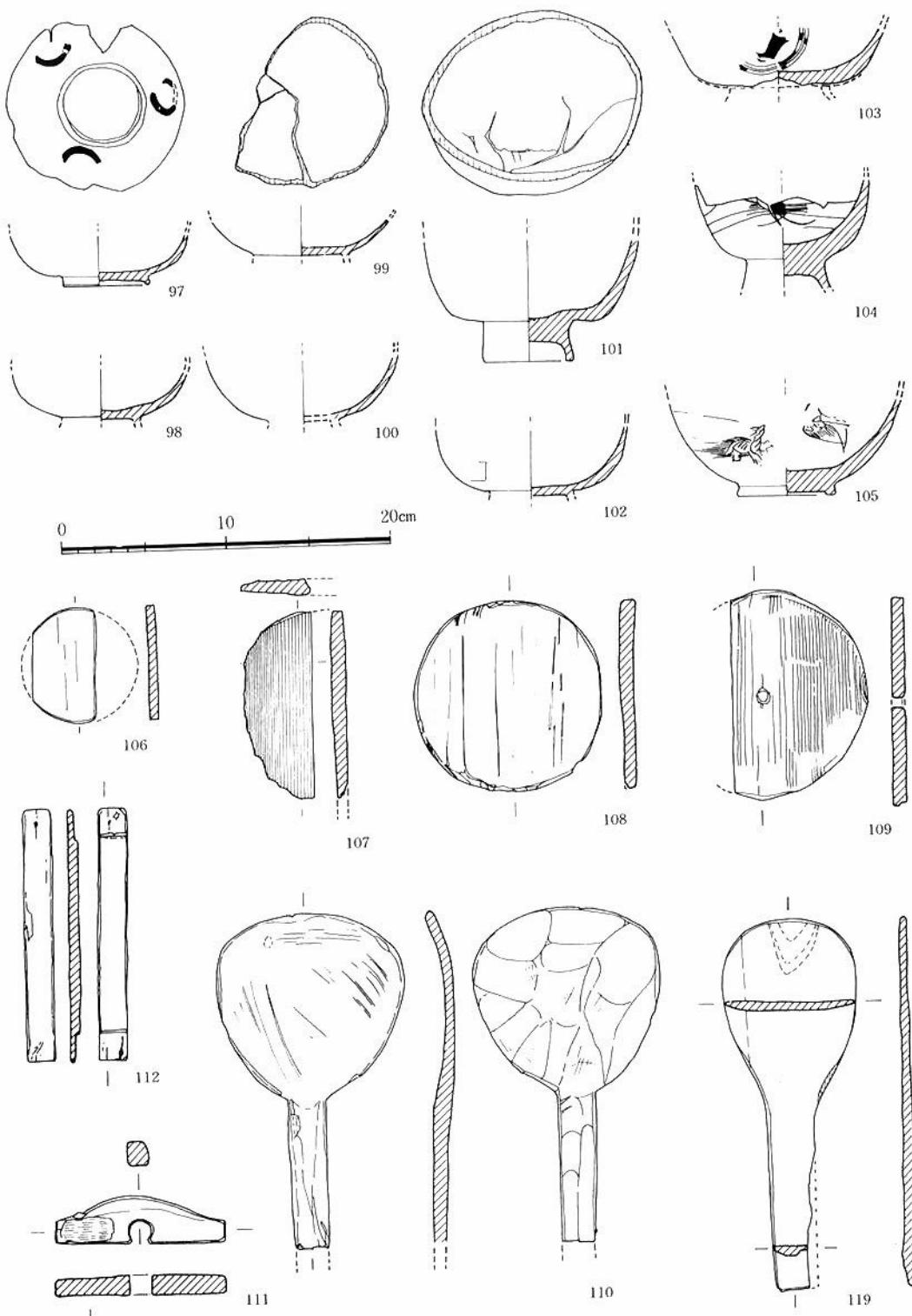
D 5 区 (SD 39出土67~82、SD23出土83~88)

図版十 出土木器実測図



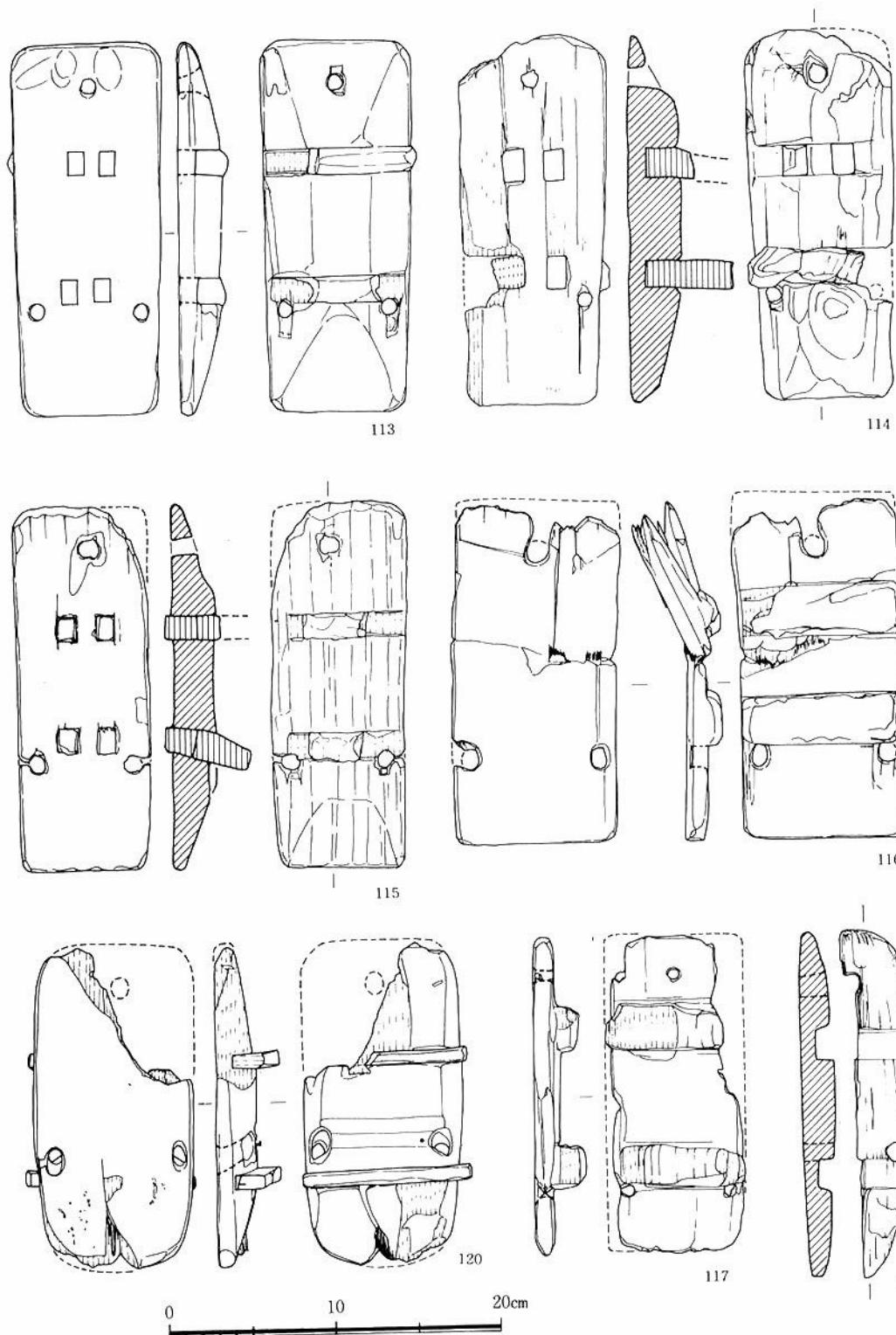
D 5 区 (SD 23出土89~90, SD 42出土91~95, SD 50出土96)

図版十一 出土木器実測図



D 6 区(SD 28出土97~112, D 7 区(SD 35出土119)

図版十二 出土木器実測図

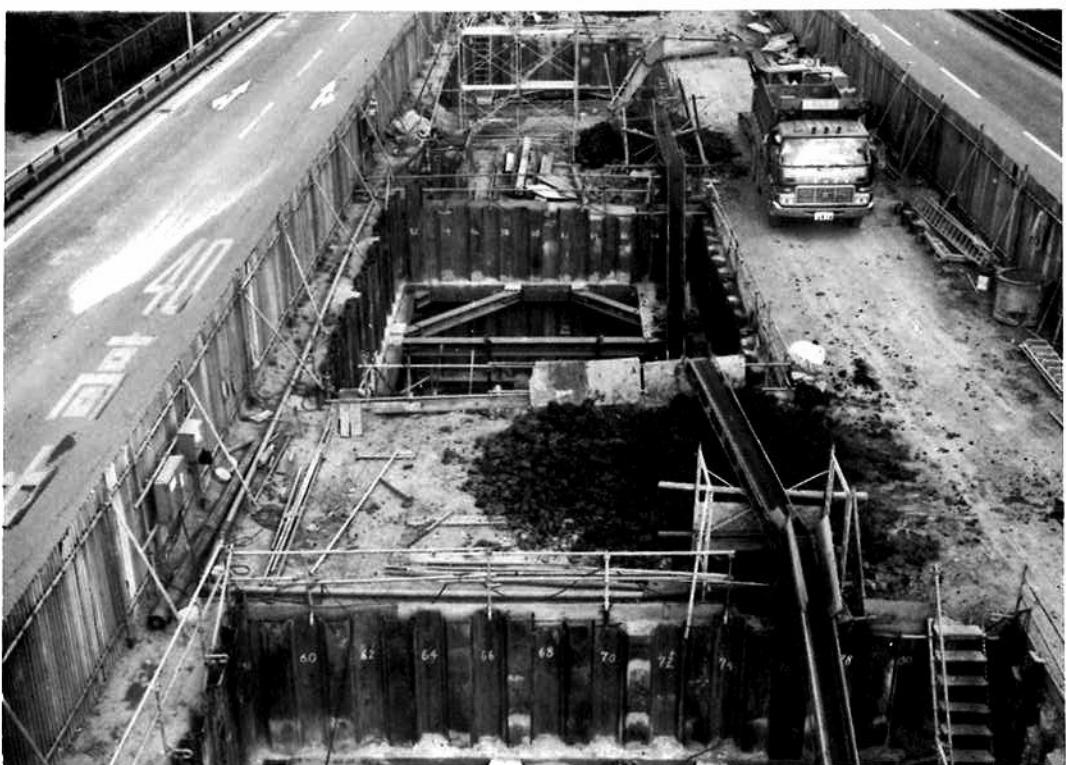


D 6 区 (SD 28出土113~118), D 7 区 (SD 35出土120)

図版十三 調査地全景

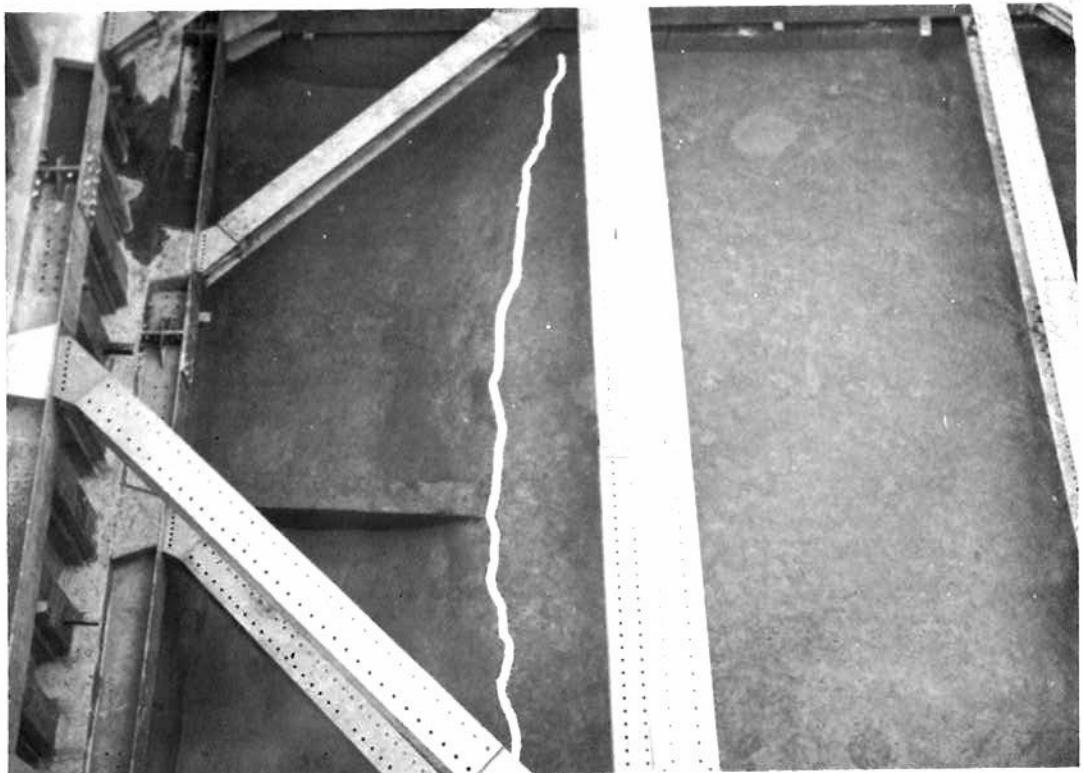


1. 調査地航空写真

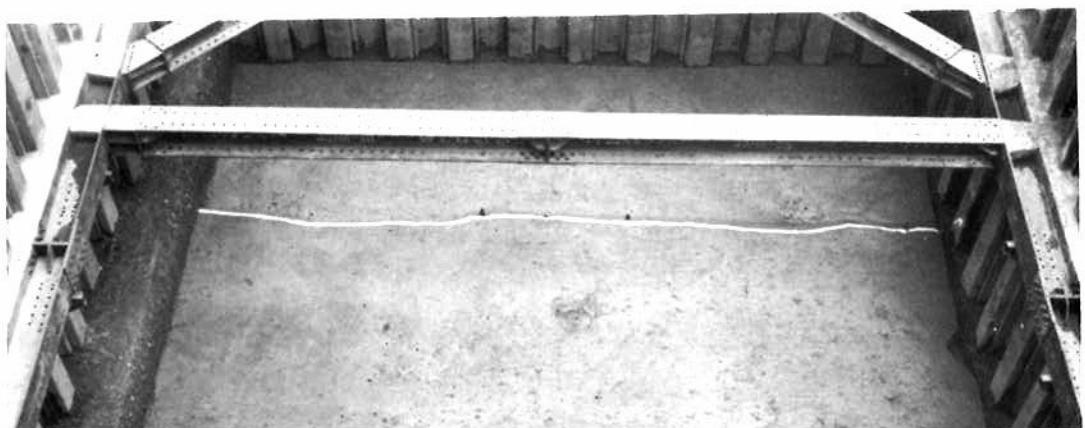


2. 調査風景

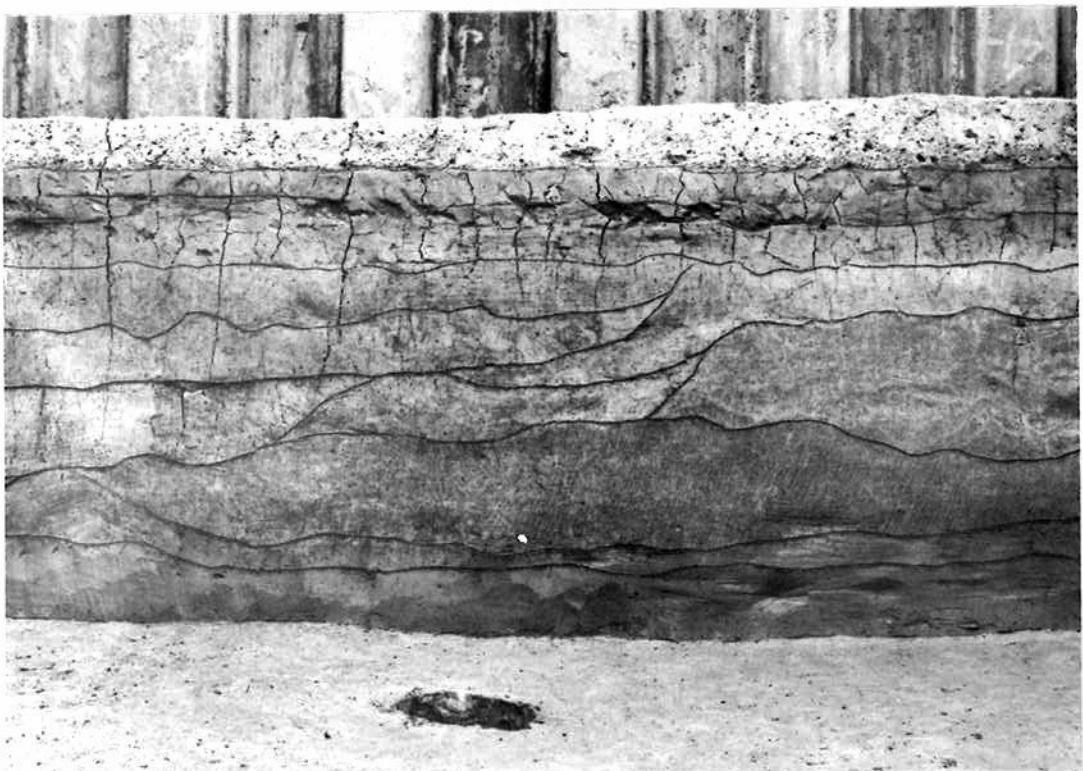
図版十四 D1区遺構



1. SD-11



2. SD-38

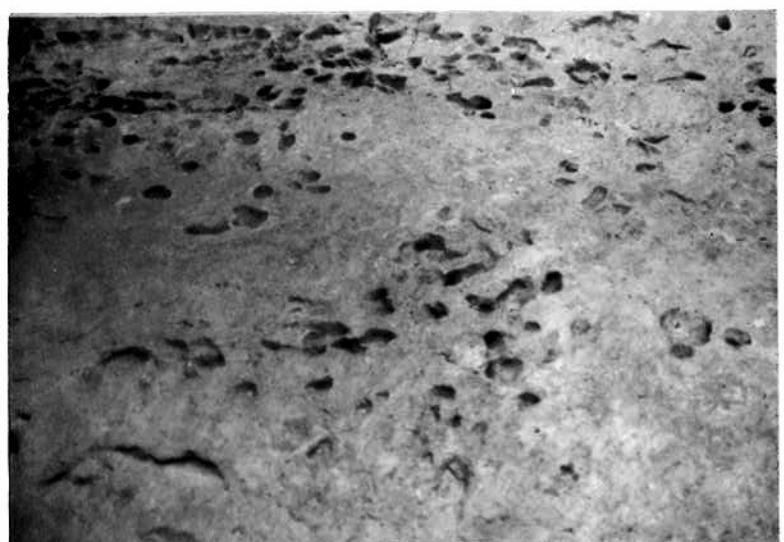


1. 北壁斷面上層



2. 北壁斷面下層

図版十六 D1区遺物出土状況



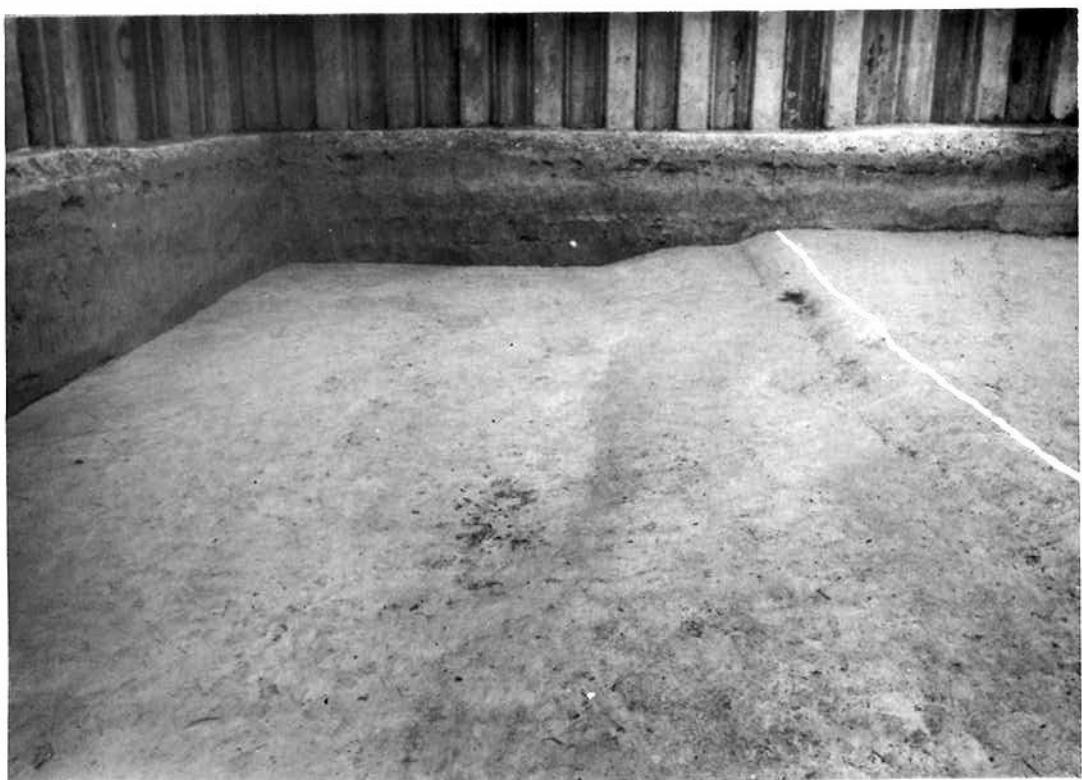
1. 9層上面足跡状遺構



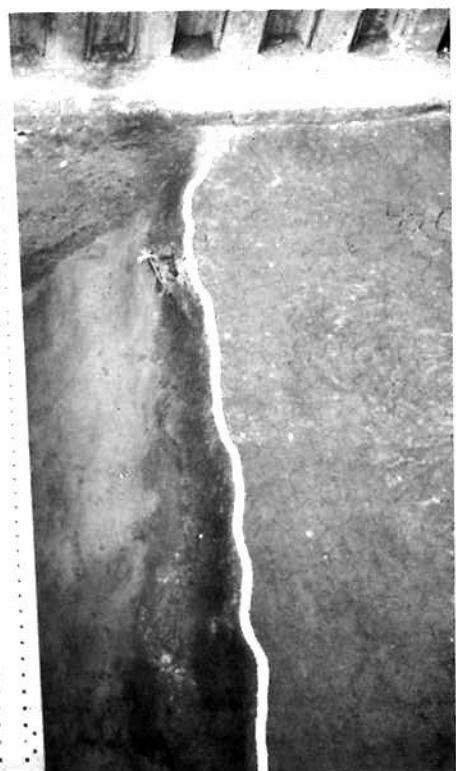
2. 錢貨出土状況



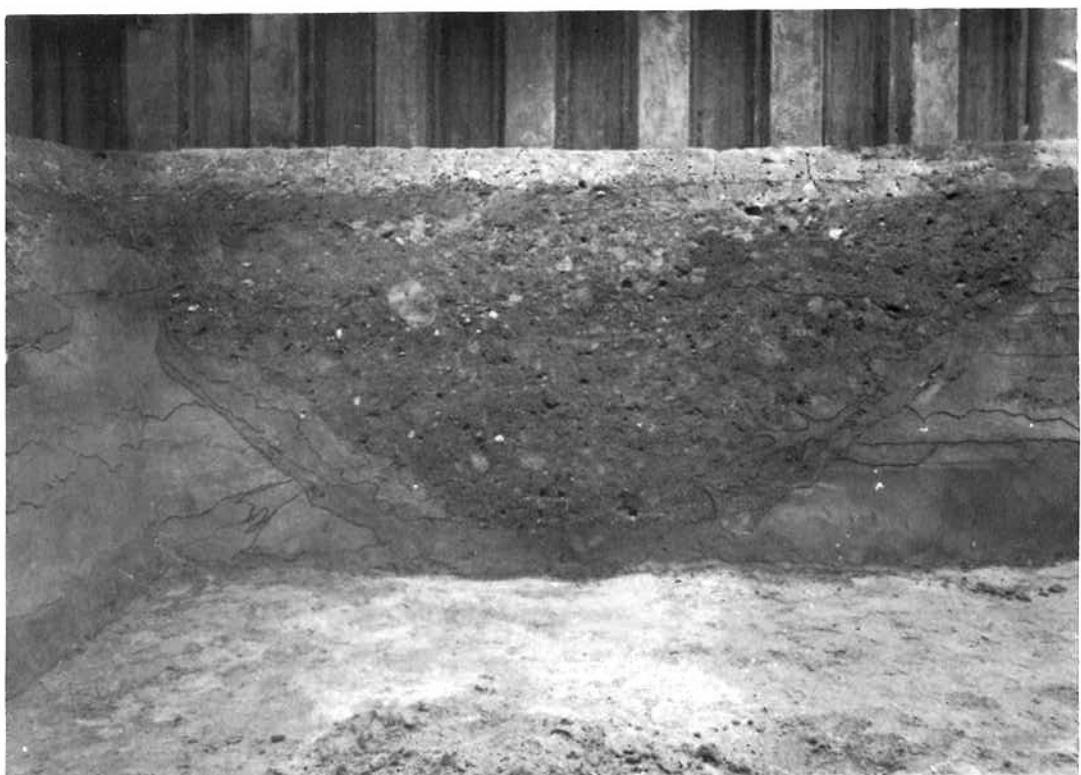
3. 刺突具出土状況



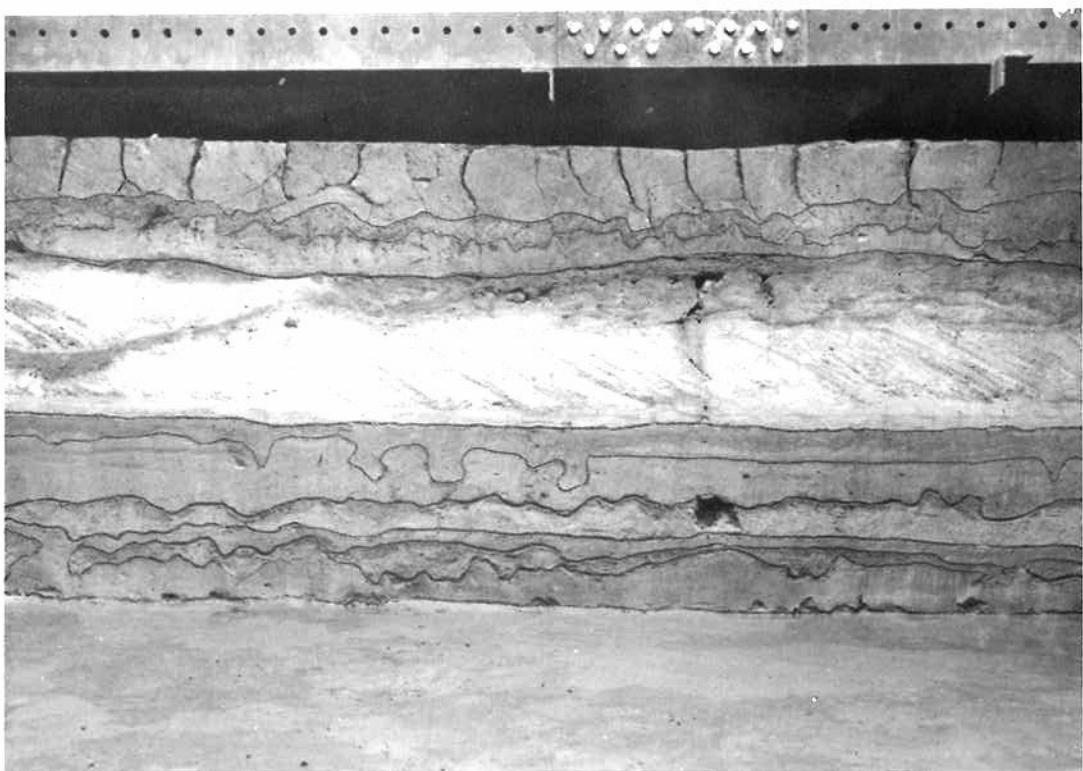
1. SD-14検出状況



2. SD-14掘削後の状況



1. SD-14北壁断面



2. 北壁断面下層

図版十九 D2区遺物出土状況



1. SD-14内 木器出土状況



2. SD-14内 杖列検出状況

圖版二十 D2區遺物出土狀況



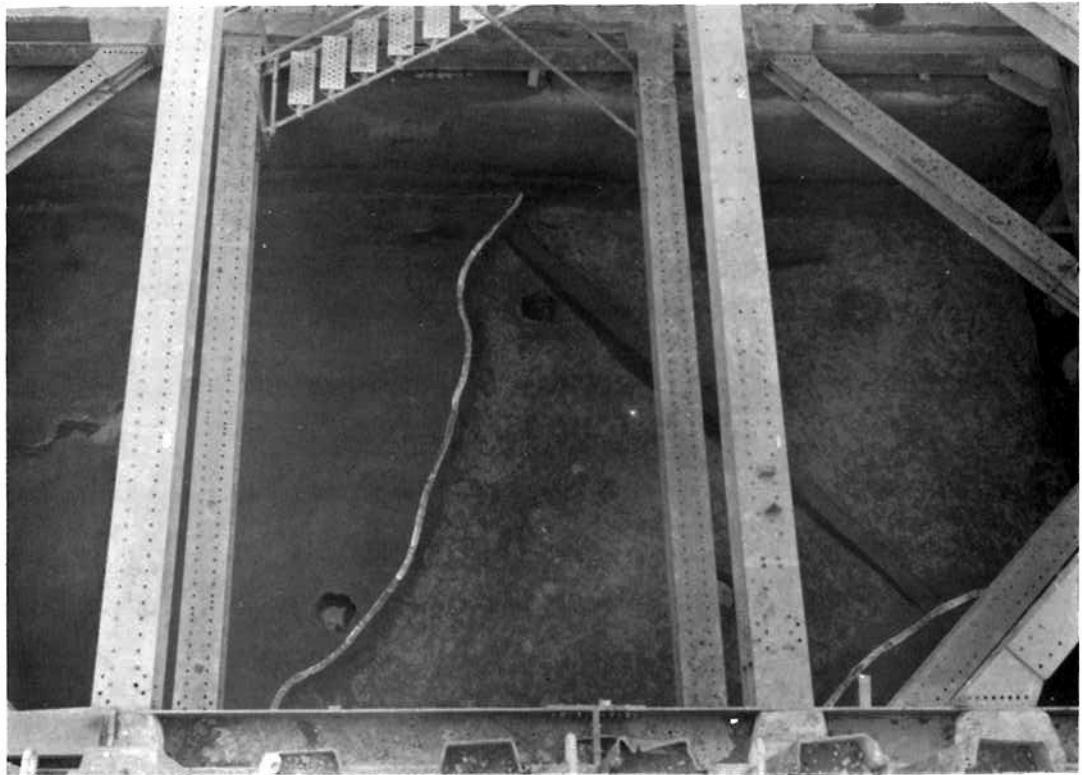
1. SD-14内 下駄出土状況



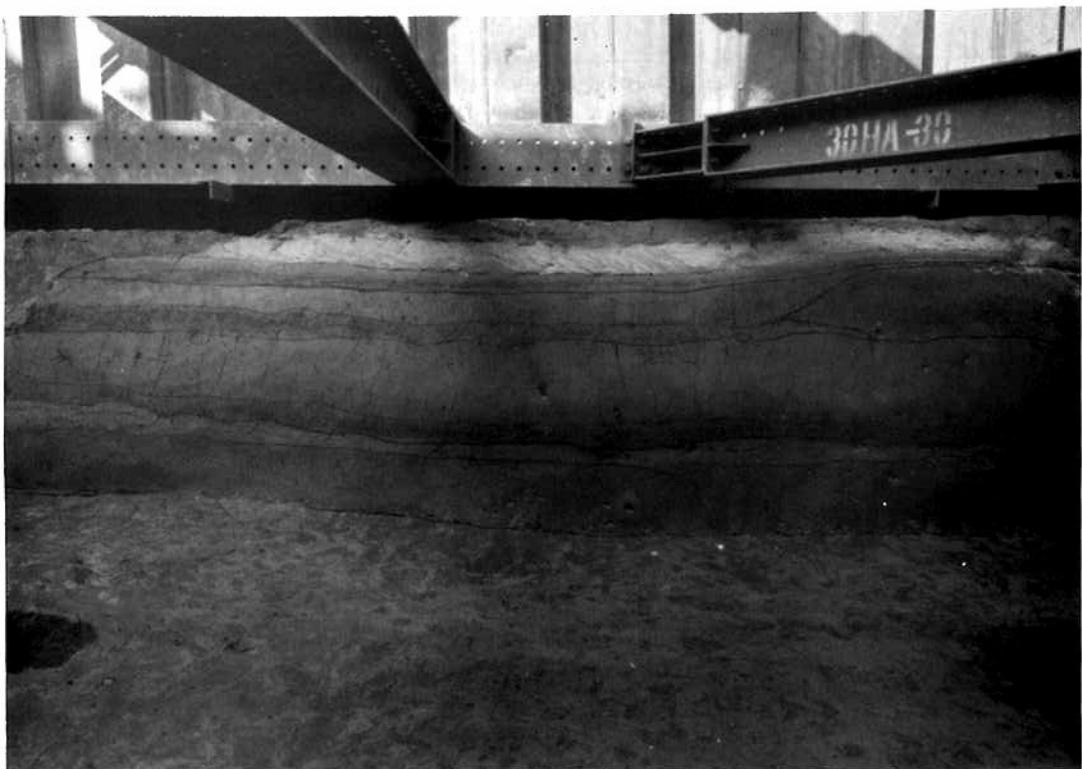
2. 和銅開秤出土状況



3. 刺突具出土状況

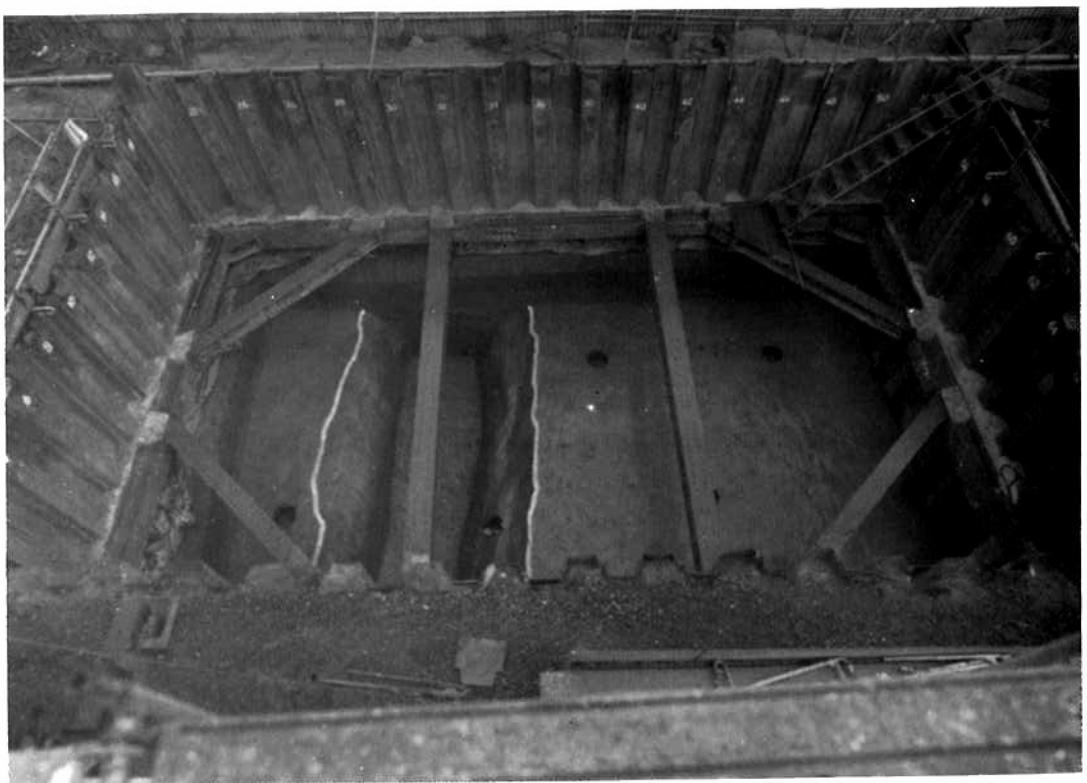


1. SD-1

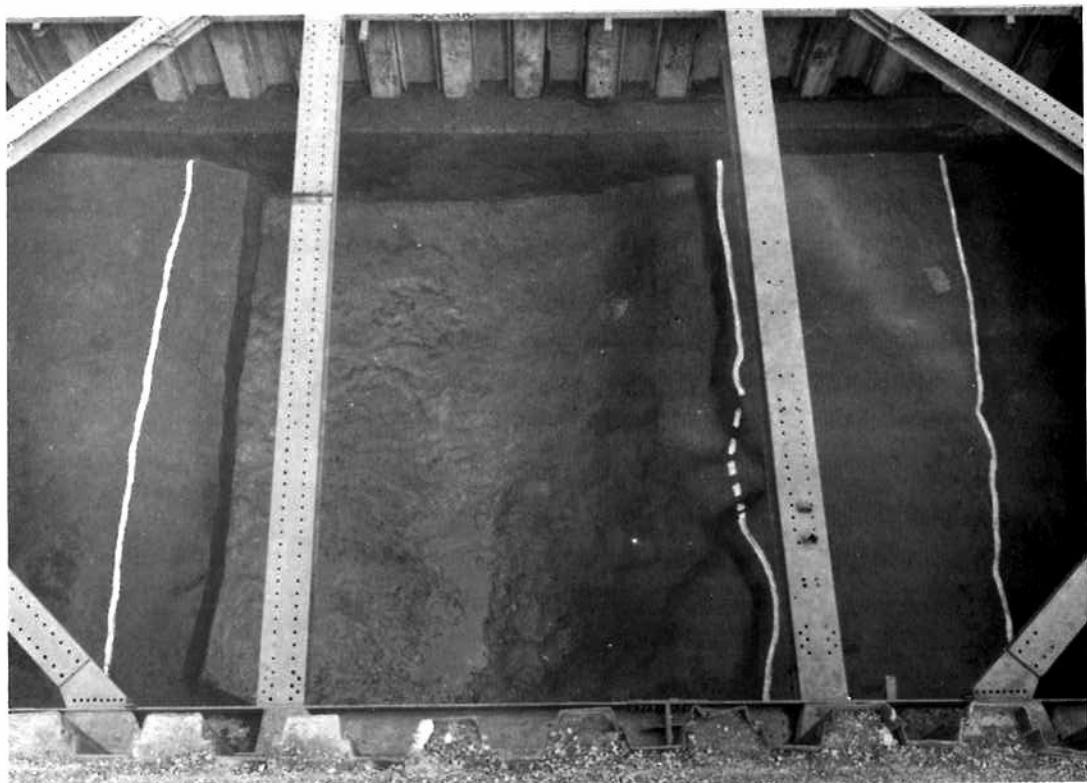


2. 北壁斷面

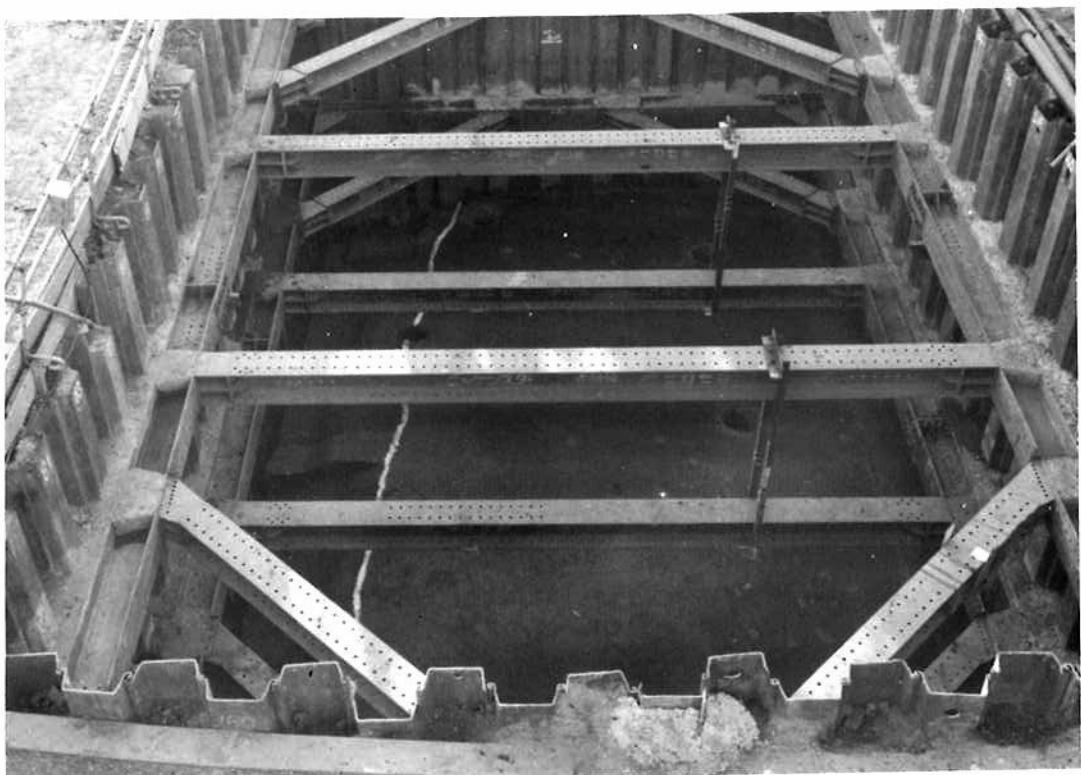
図版二十二 D3区遺構



1. SD-17



2. SD-16・47

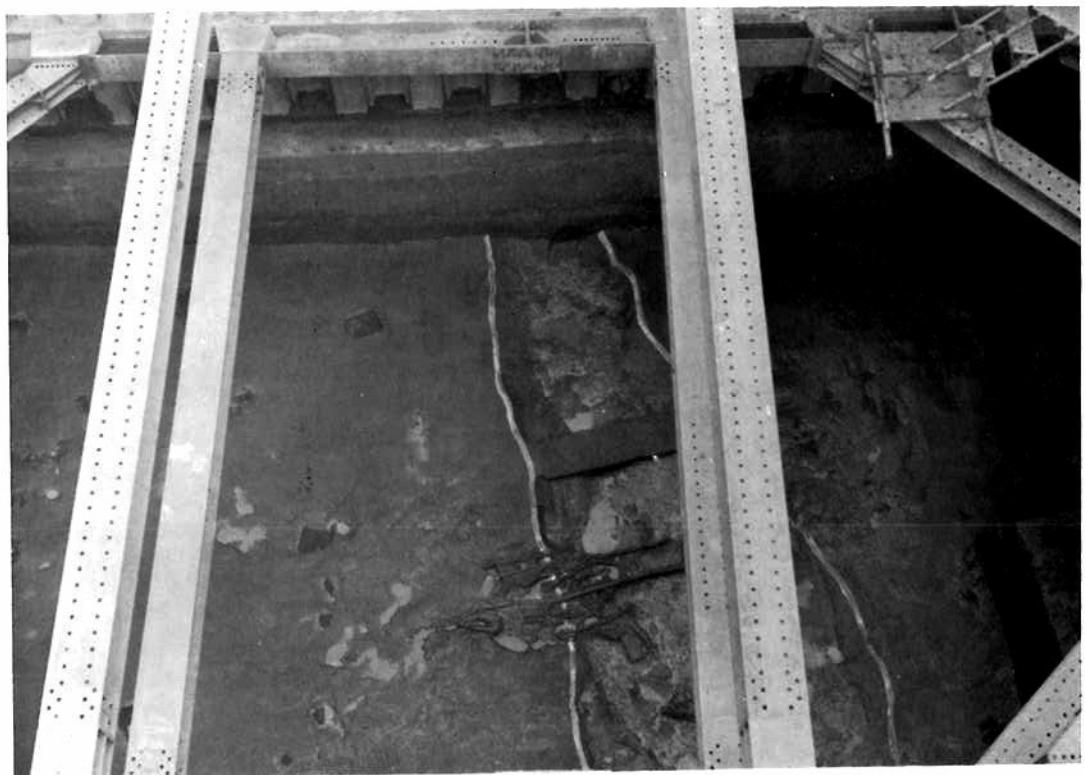


1. SD-46



2. 東壁断面

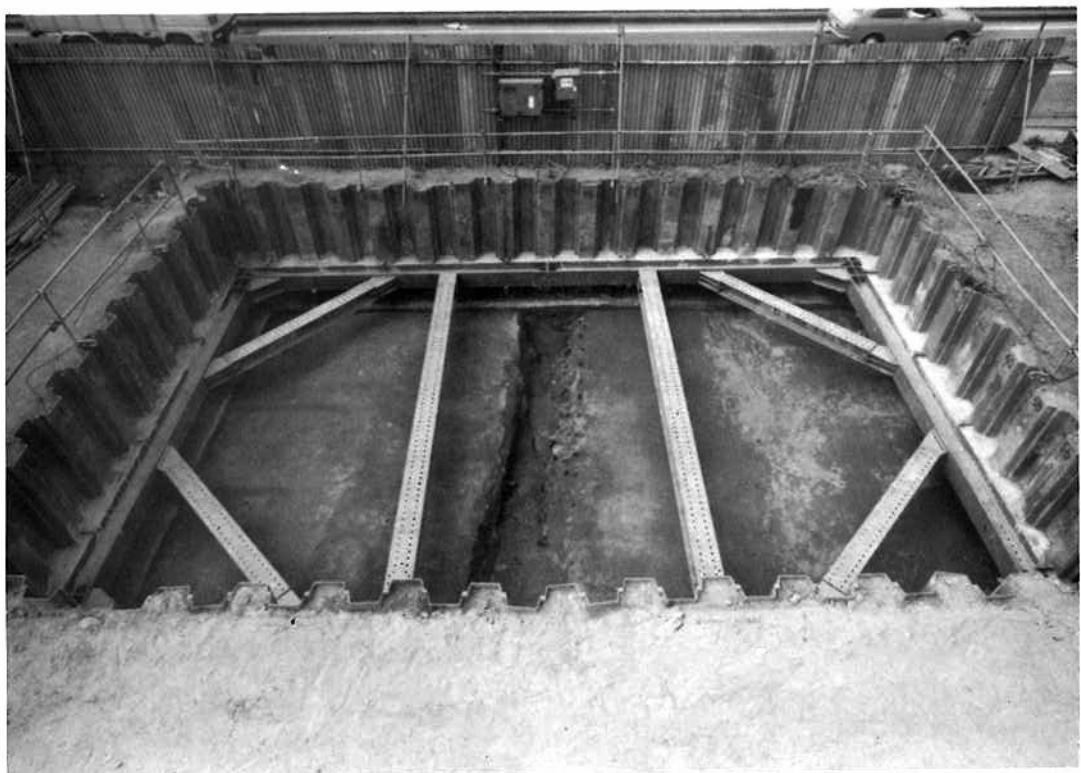
図版二十四 D4区遺構



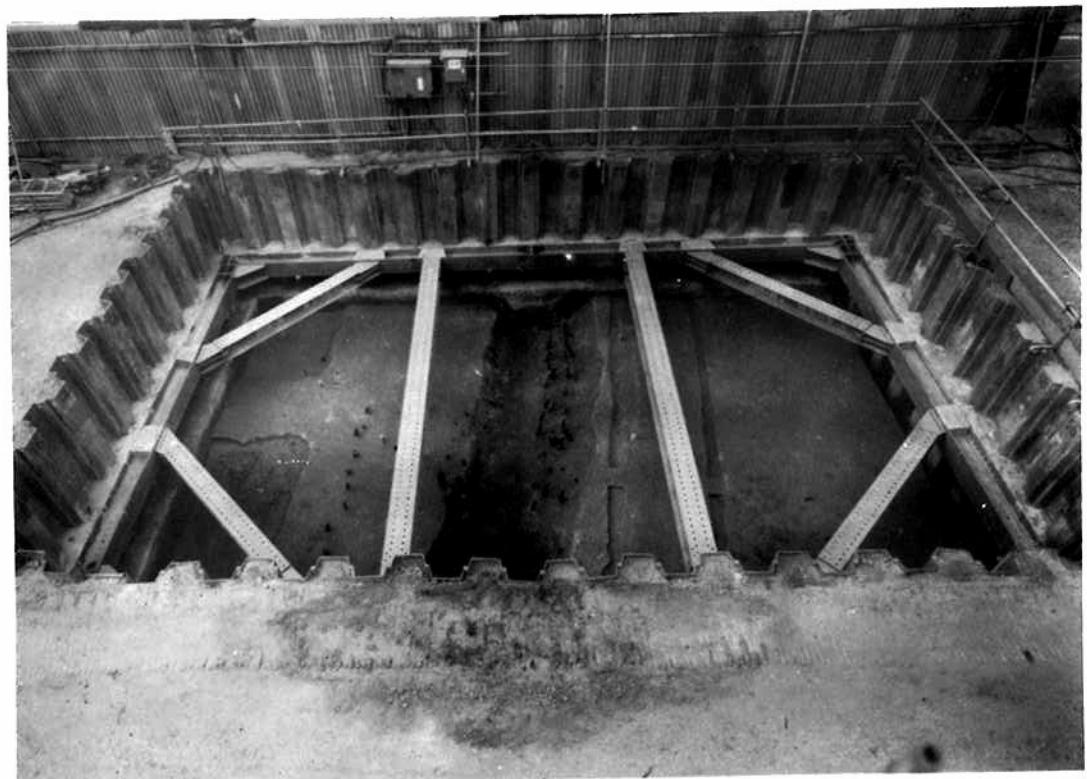
1. SD-3



2. 弥生土器出土状況

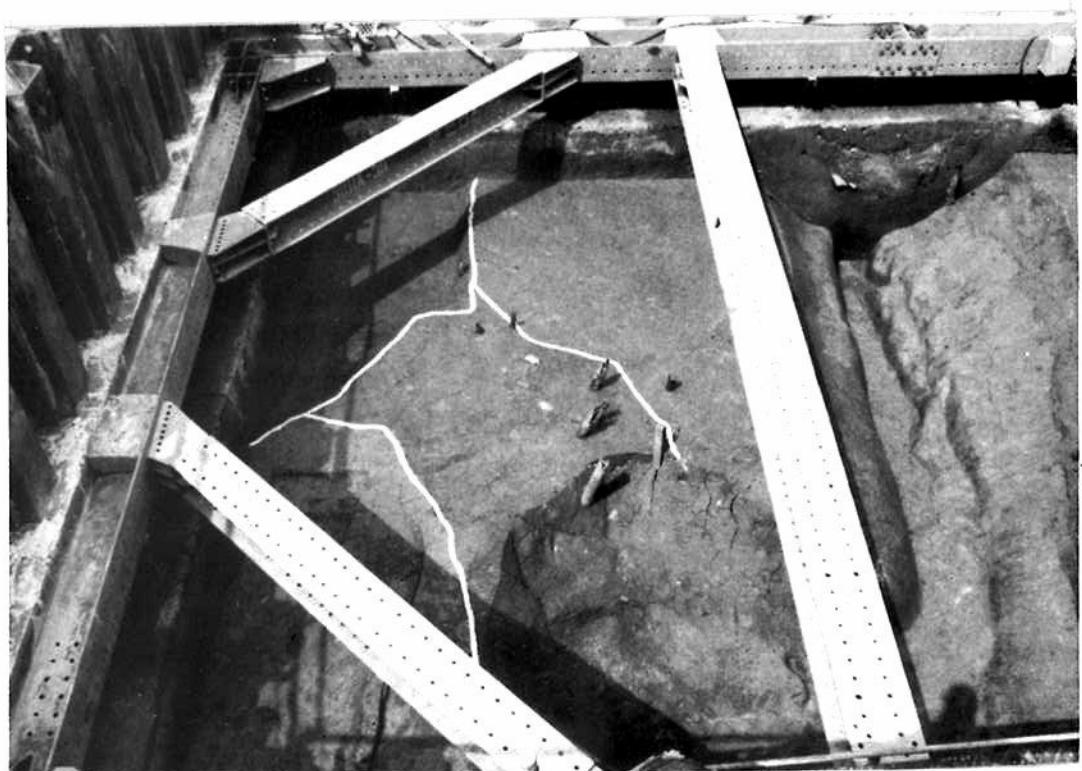


1. SD-23

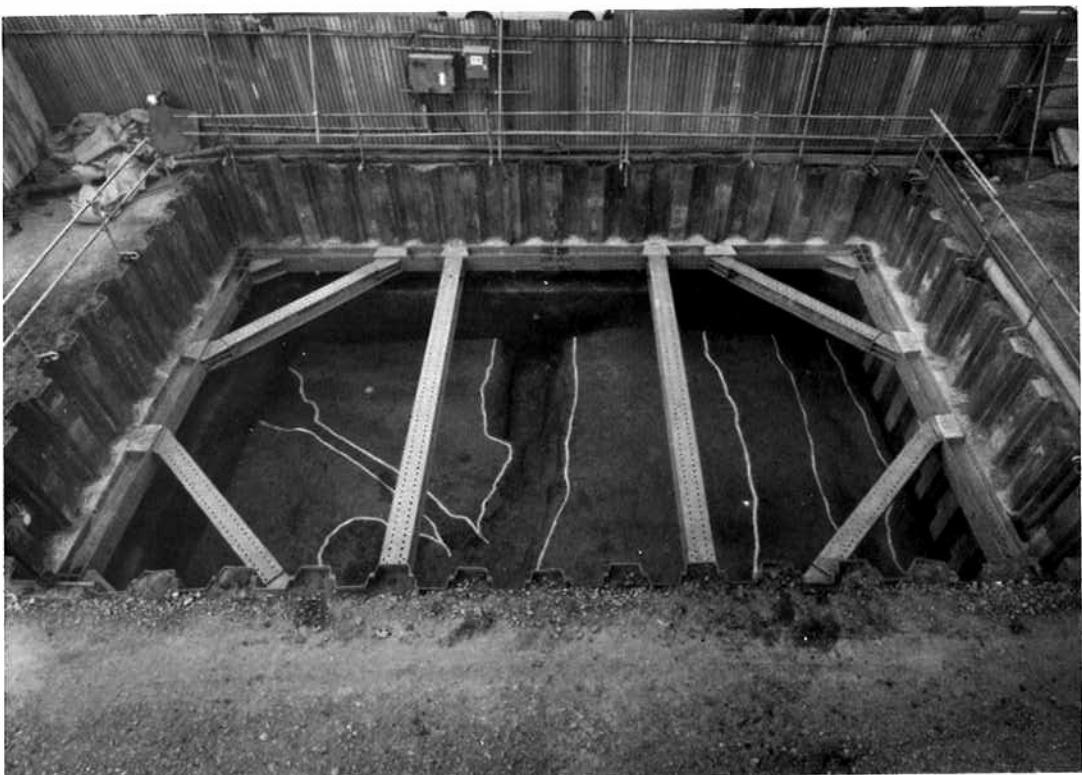


2. SK-3, SD-24・36・37

図版二十六 D5区遺構



SD-41・43



2. SD-42・49, SK-7



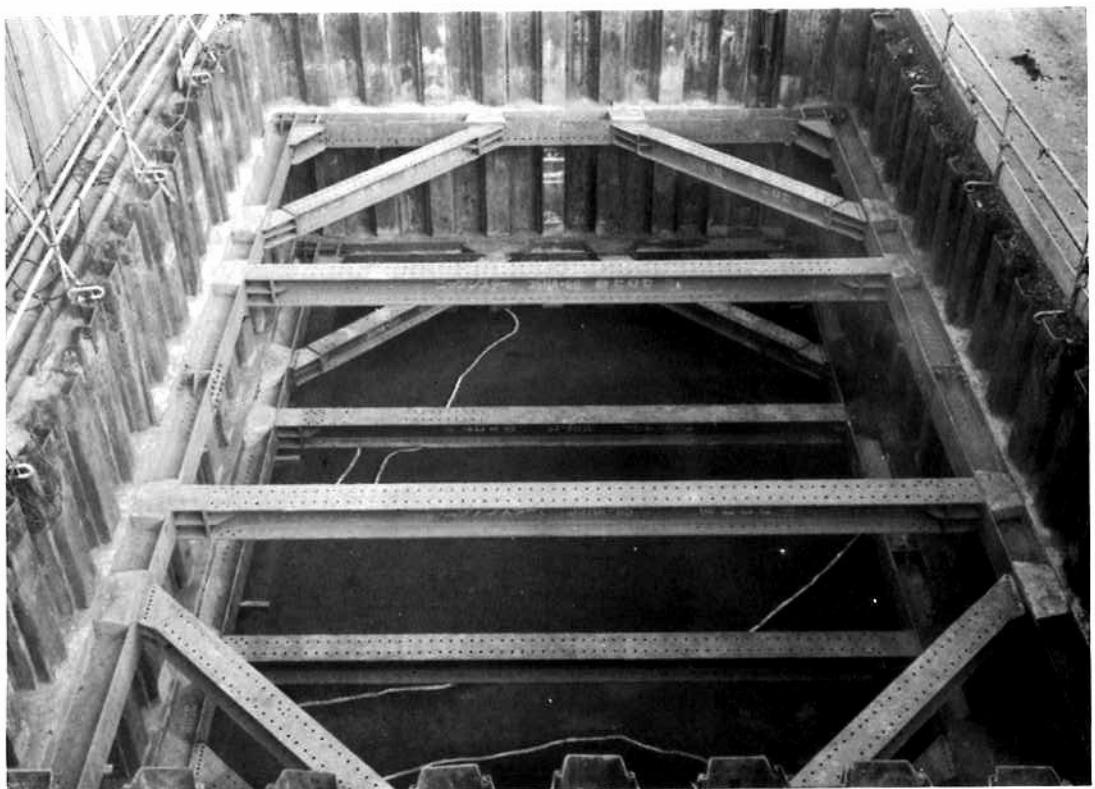
1. SD-39, SK-9



2. SD-39内 遺物出土状況



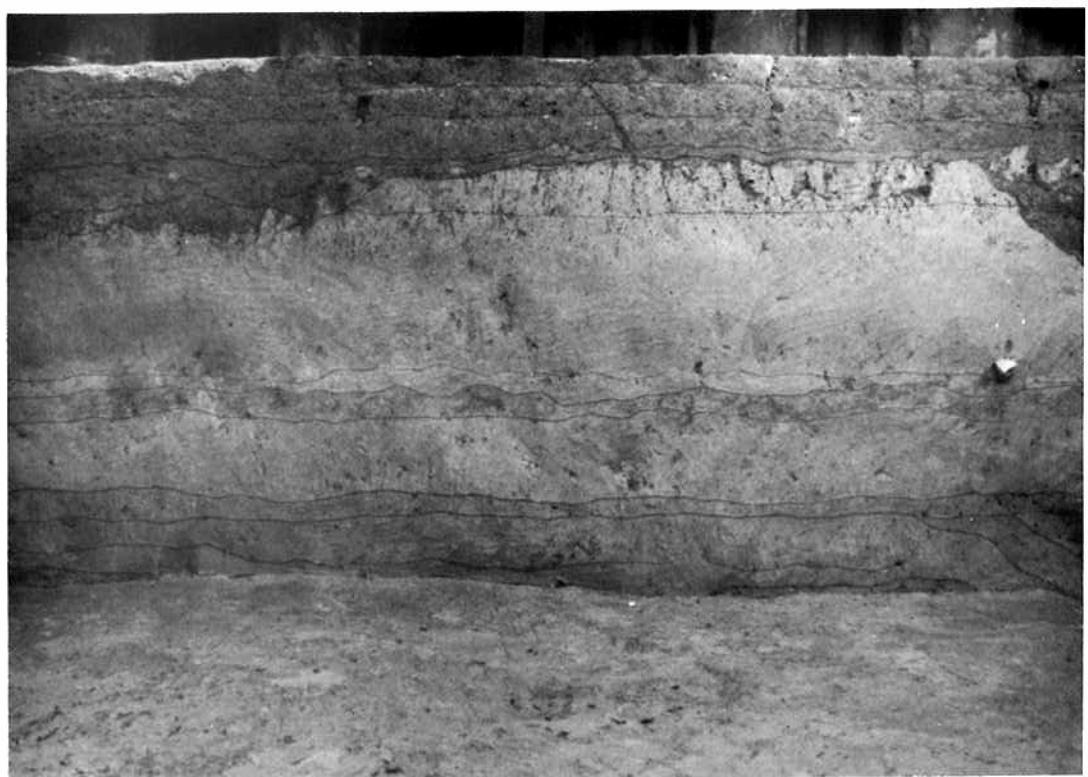
1. SD-50



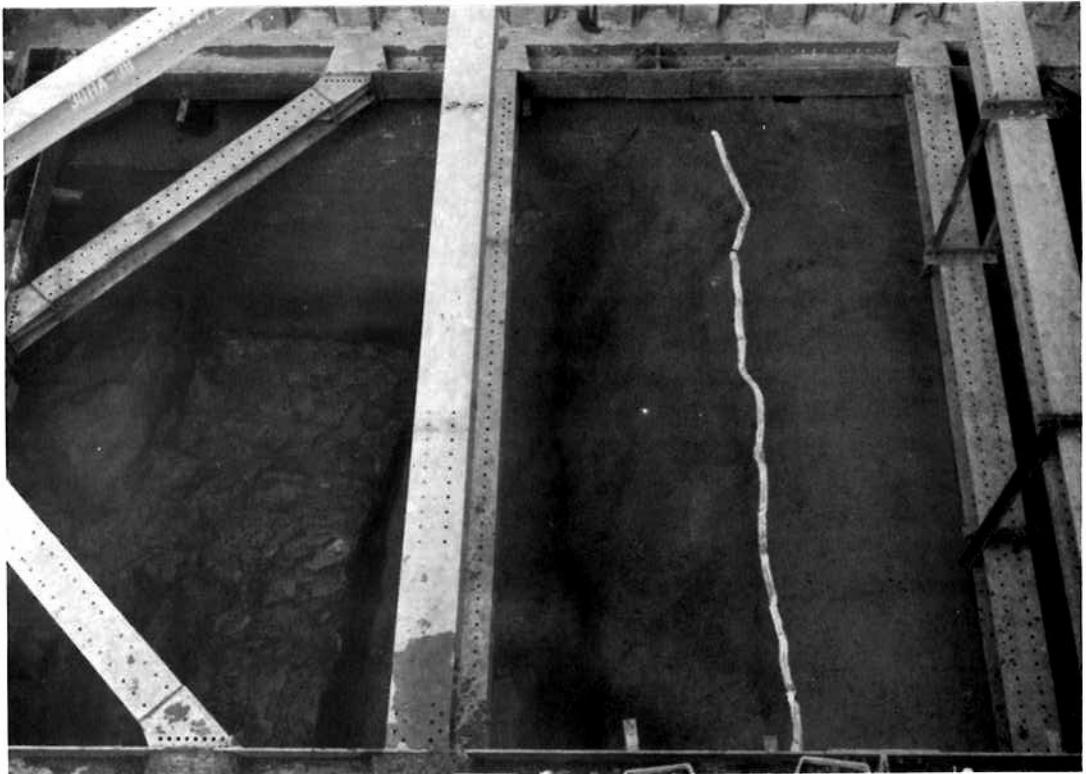
2. SD-51, SK-10



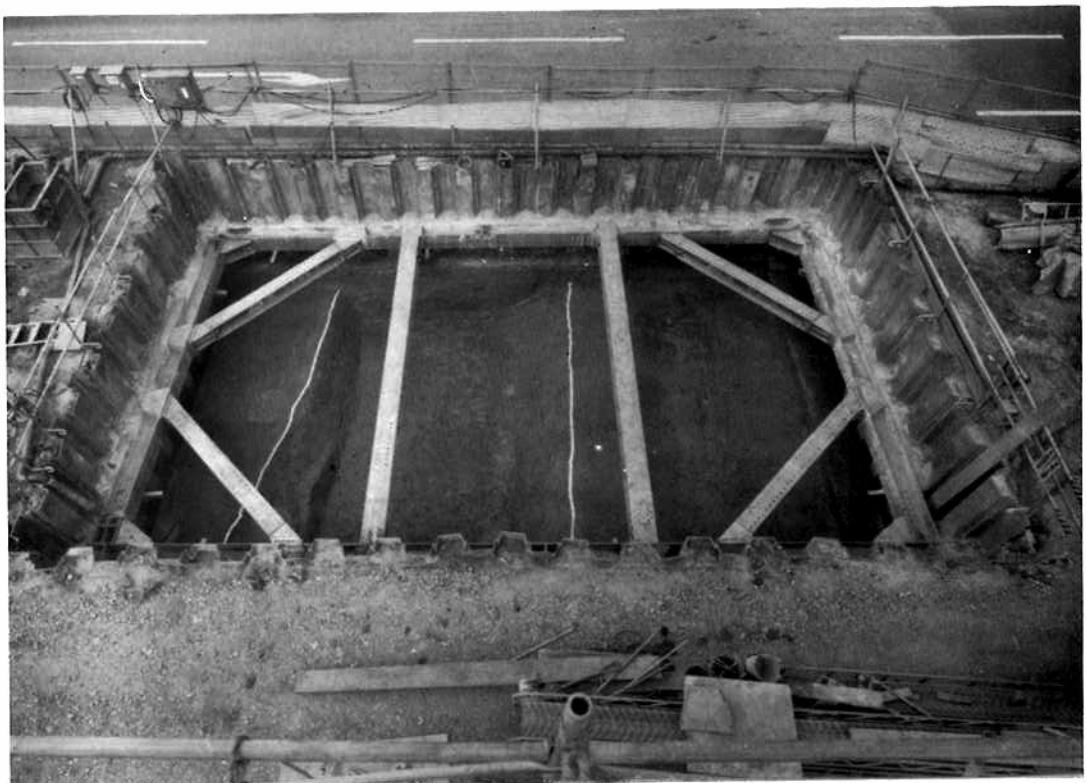
1. 北壁断面



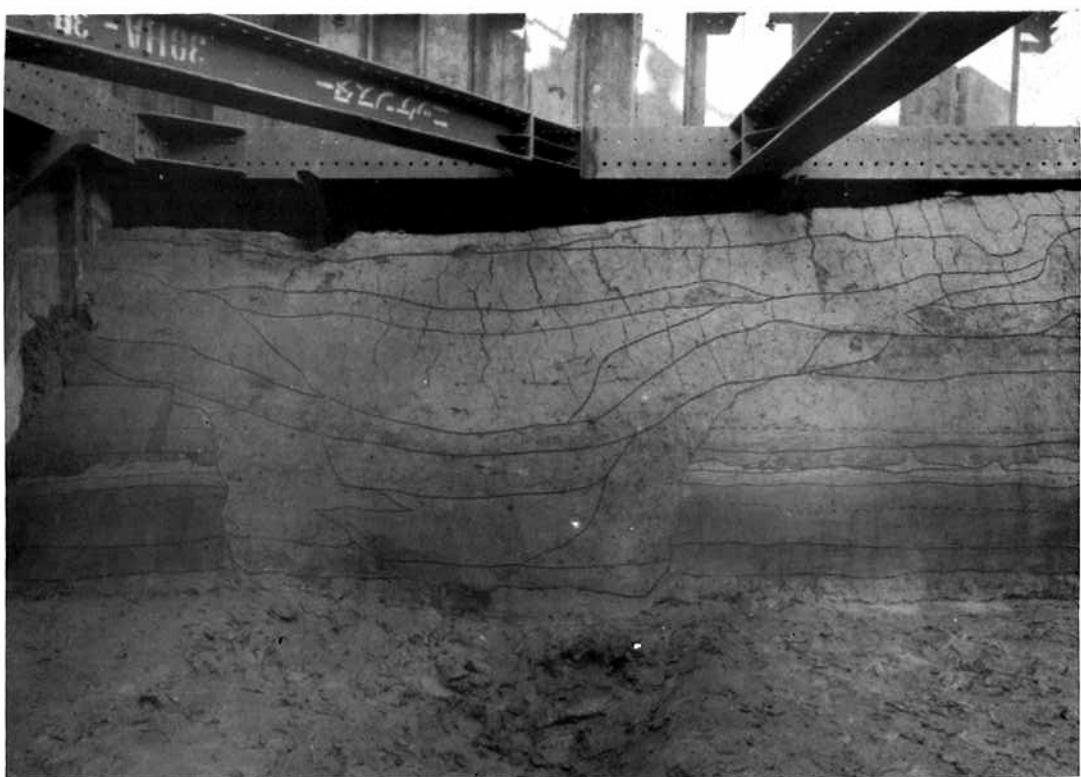
2. 西壁断面



1. SD-28



2. SD-29

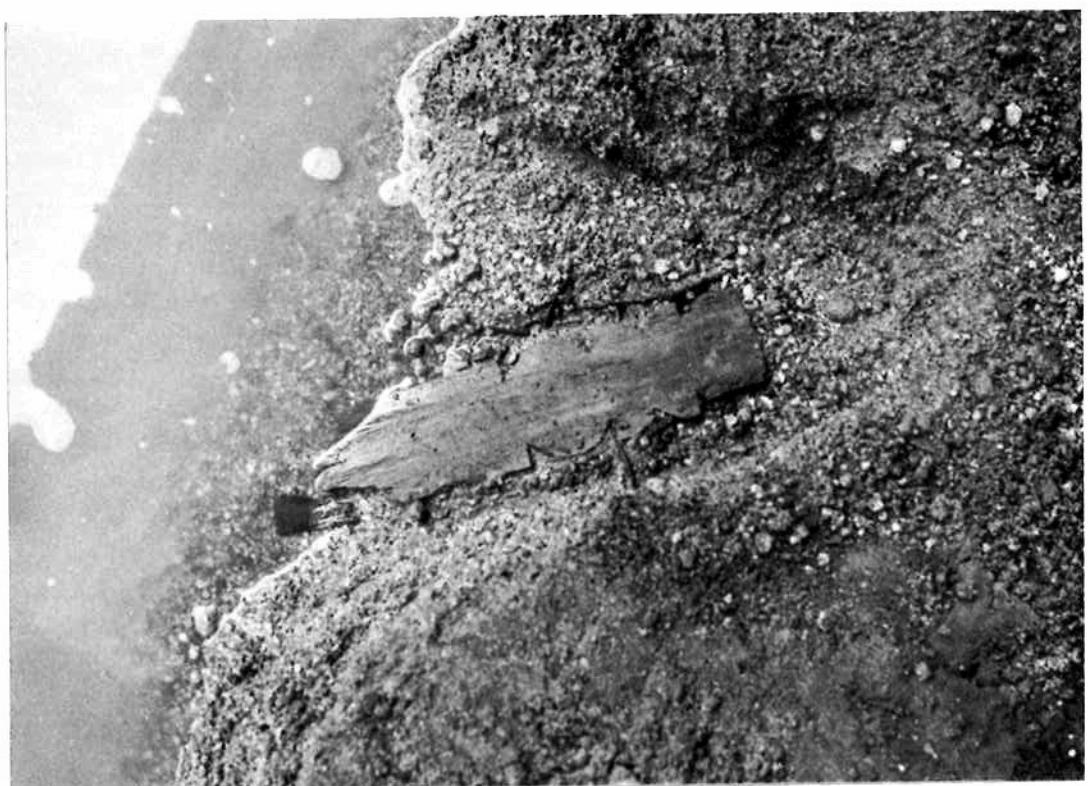


1. SD-28 北壁断面



2. SD-29-30 北壁断面

図版三十二 D6区遺物出土状況



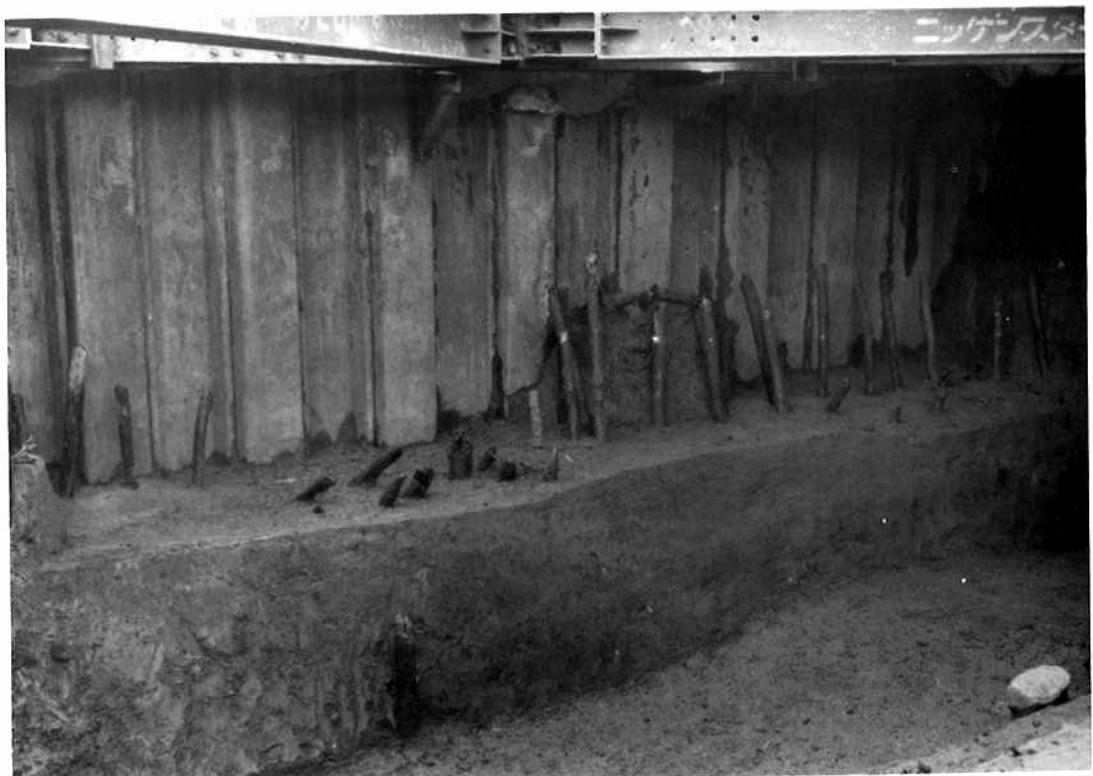
1. SD-28内 木器出土状況



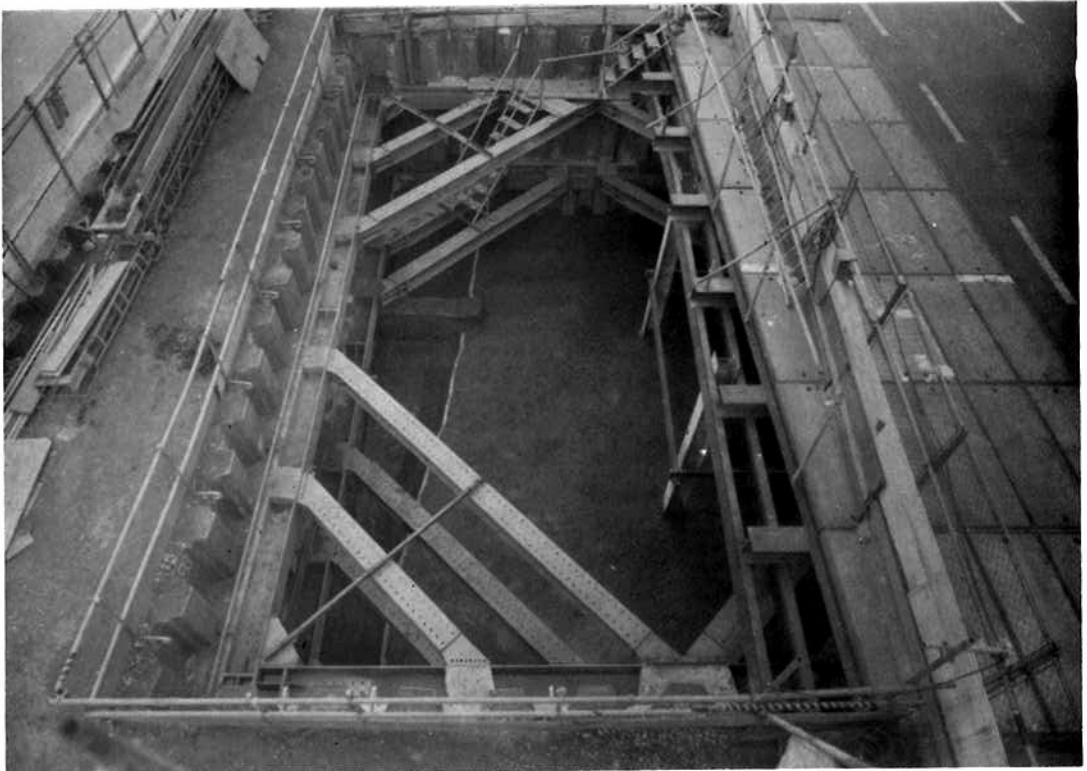
2. SD-28内 木器出土状況



1. SD-35



2. SD-35内 杭列検出状況



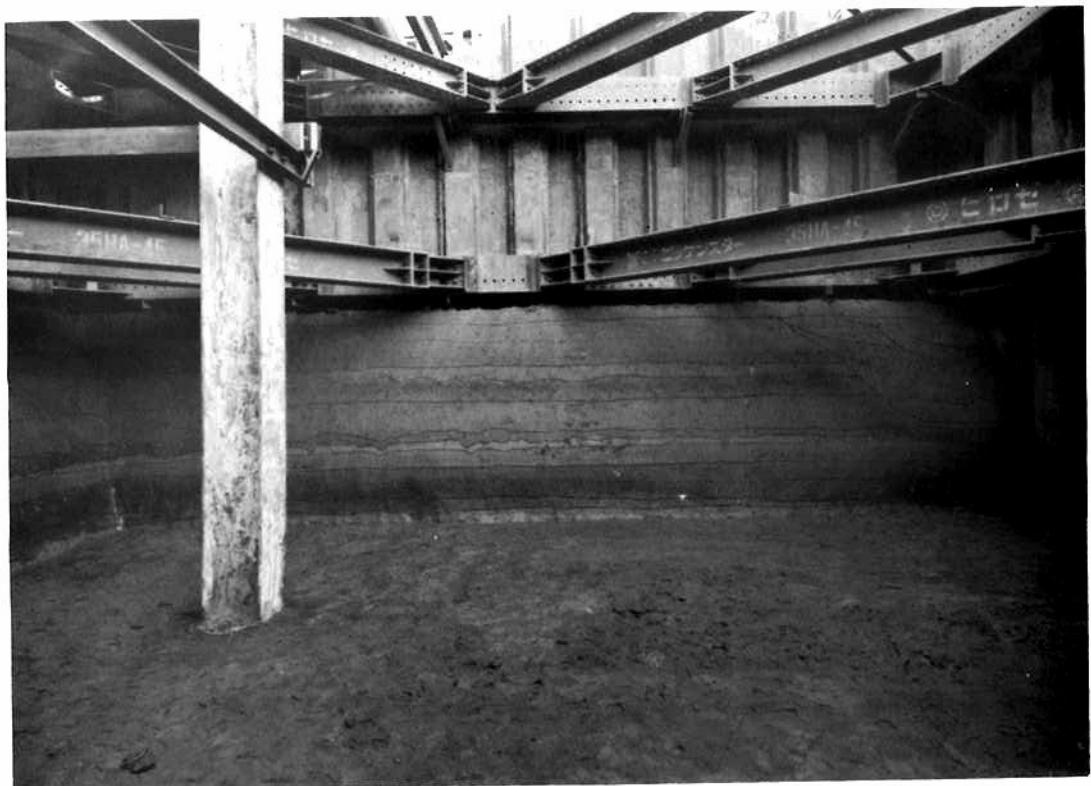
1. SD-37



2. SD-37・52・53・54

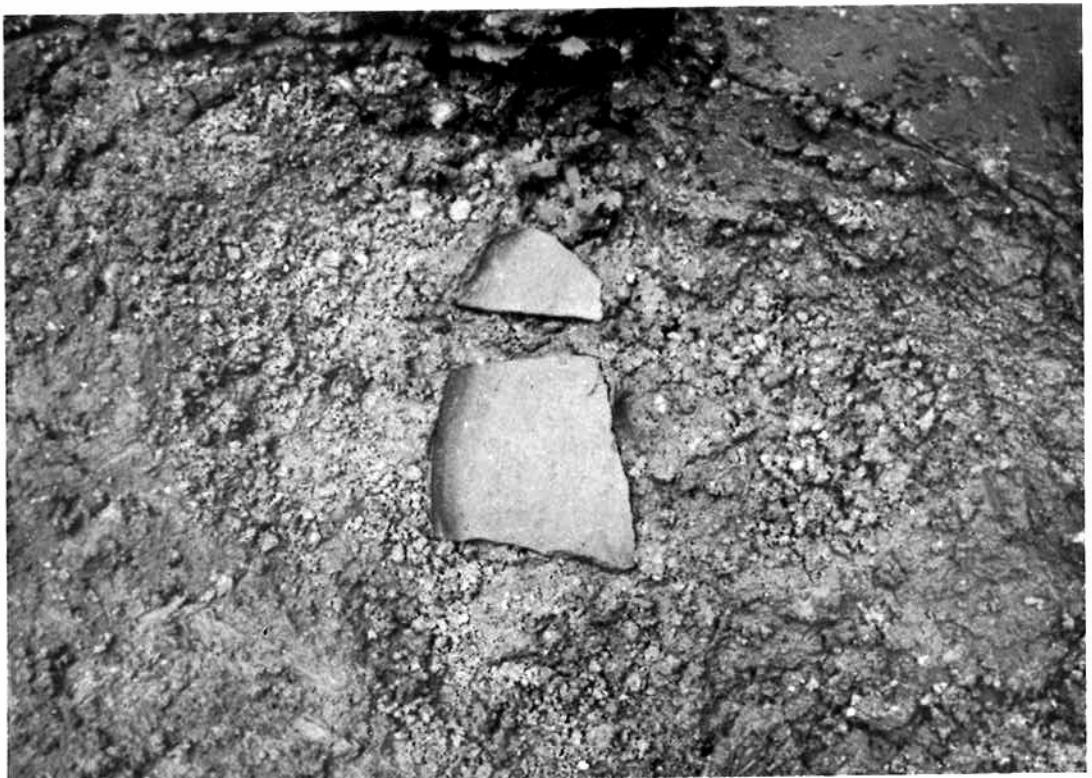


1. SD-35 北側断面



2. 北壁断面

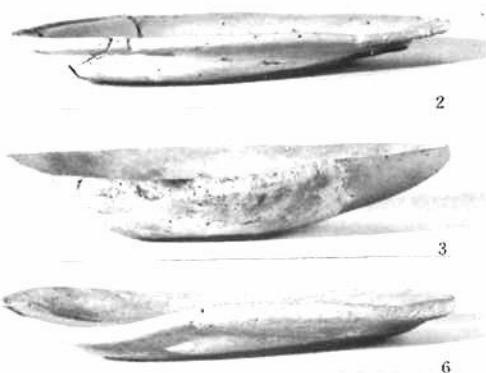
図版三十六 D7区遺物出土状況



1. SD-35内 土師器出土状況



2. SD-35内 木器出土状況



31



9



46



4

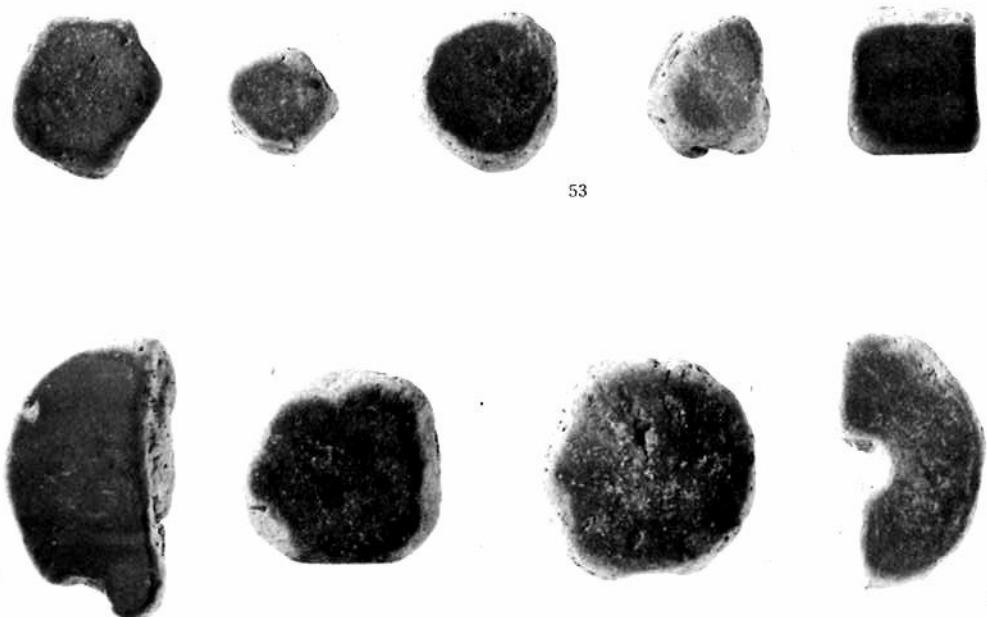


50

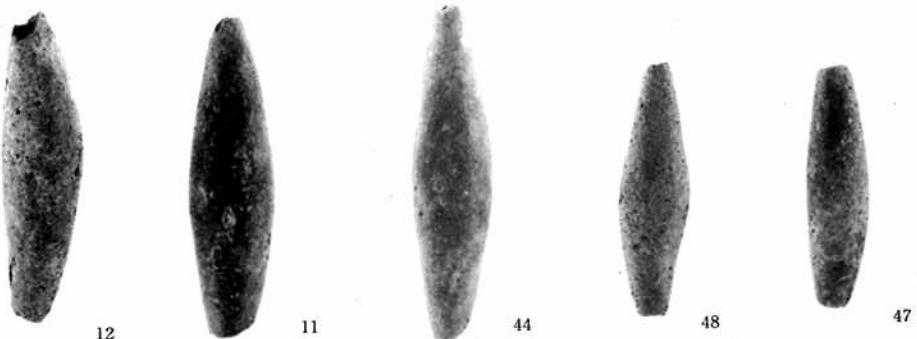
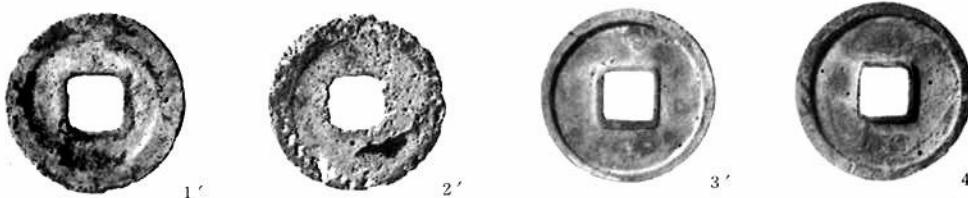


53

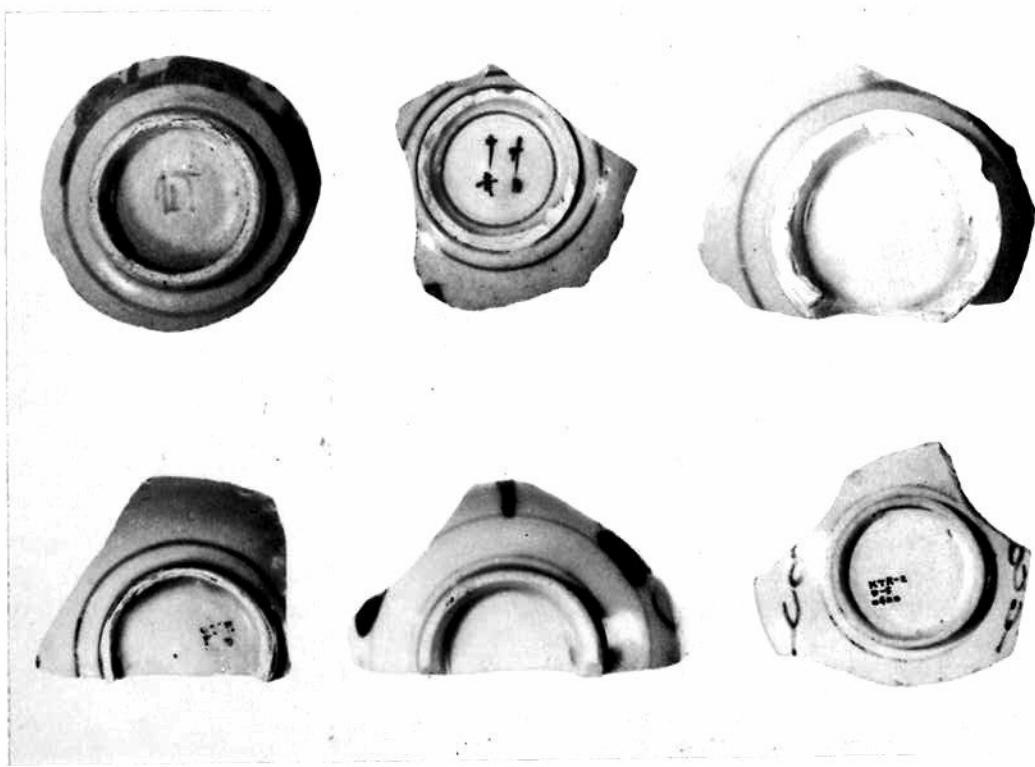
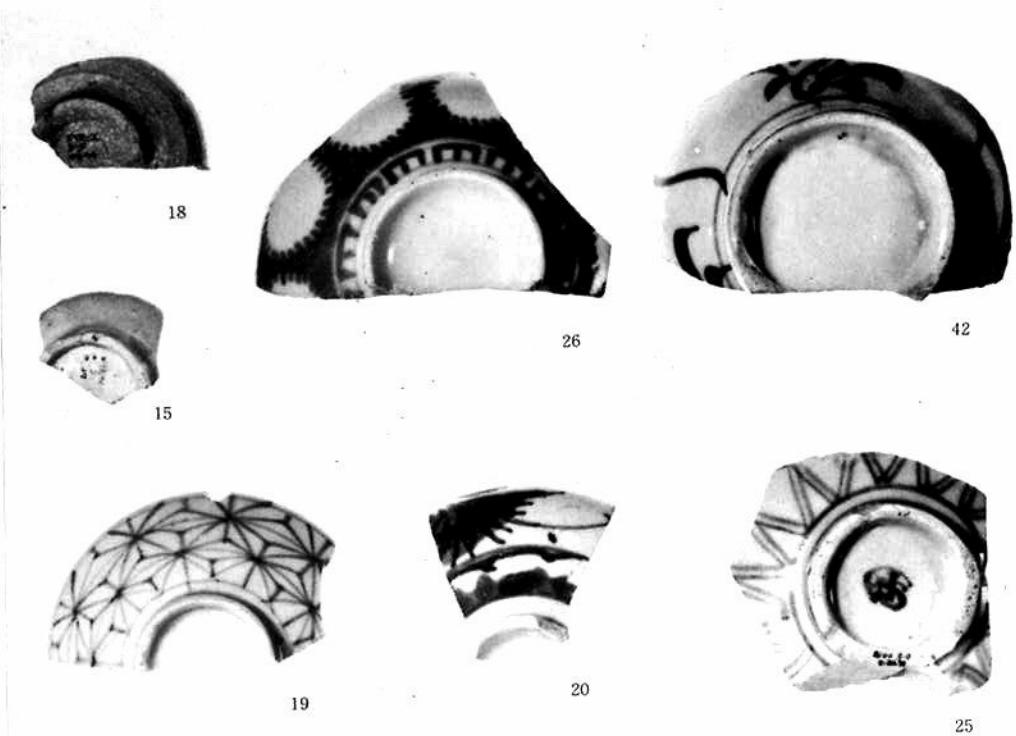
54



52



図版四十 遺物







図版四十三 遺物



69



55



74



42



110



119



86

鬼虎川遺跡

— 東大阪都市高速鉄道東大阪線計画事業に
伴う第15次発掘調査概要（その2-2）—

1983年10月1日

発行 財団法人 東大阪市文化財協会
印刷 株式会社 アズマ